
Wind flower

swan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Wind flower

【Nコード】

N8381S

【作者名】

swan

【あらすじ】

王都レアムドザインの軍本部にて能力者の補佐をして働くケノワ。

無表情で何を考えているか分からないと超我儘上司（年下）によく指摘されながら淡々と生活する彼が、町で偶然女の子レイダに出会ったことから少しずつ変わっていく。

ほんわか恋愛小説…のはずです。

これから、第3章突入です。

雨の中で

乾季が終わろうとしている。

時折繰り返されるだけだったスコールが、今や一日の半分にも迫り始めた。

このマムレム王国は、乾季と雨季に季節が分かれている。

乾季は国を砂まみれにし、雨季は人々に憂鬱を連れて来る。誰かが前に、そう言ったのを覚えている。

私は、確かそれに雨は歓喜も連れて来ると答えて苦笑いされた。しかし、今は少しかの人がそう言ったのが分かる気がする。一刻前に降り始めた雨の中、私は王都レアムドザインの街を走り回っているのだから。

淡い栗色の髪と感情をあまり映さないといわれるブルグレイの瞳の私の灰色の軍服は今や沢山の水を吸っている。

街には雨の中でも沢山の人垣が出来ている。

その中から、私は自身の上官を探し出さなくてはいけないのだ。

上官が行く場所はほとんどリストアップしてある。

上官付きの部下は自分だけではないのだが、残念ながら上官は私以外の者の言葉には耳を貸さない。メモをめくりながら走る。水溜りなど気にせず、泥水が飛び散る。

「キヤッ！」

その小さな叫びに足を止める。振り返ると、花売りの少女のスカートが泥水に染まっている。

「すまない。急いでいたものだから、大丈夫か？」

声を掛けると少女は傘の影から顔を上げる。

「。。。。」

淡い卷いた赤毛の少女の顔がゆっくり驚きに染まっていく。この少女見たことがある気がする。どこだったかまでは、残念ながら思い出せないのだが。

少女の無言の凝視に耐えかねて声を掛ける。

「大丈夫か？」

「は、はいっ。だ、大丈夫です」

「では、すまないが、これで代わりの服を買ってくれ。時間がなくて」

給料前のなけなしの持ち金を彼女に差し出す。女性物の服の値段なんて分からない。しかし、彼女は花籠と傘を持った手を開かない。

——カーン、カーン、カーン。

軍本部の敷地にある塔の招集鐘が響き渡る。

「三回…、このままでは間に合わなくなる。」

ずぶ濡れの手で握っていた紙幣とコインを、無理やり彼女の手に押し付けていく事にする。

走り出した背中に何か少女が言うのが聞こえたが、雨と雑踏に聞き取れなかった。

最悪です

軍内にある能力向上・研究科学局（通称・能力者の館）の司令部建物の一室に、押し殺した声が響く。

「最悪です。貴方は何を考えているんです？」

何度目か分からない私ケノワ・リュウの呟きに、上官キフィ・クレイはやっと口を開いた。手の中に在った焼き芋を胃の中に収めたからだ。

「だからさ、追いかけてなきやいいじゃん。俺言ったよーちゃんと招集鐘四回目の会議には戻るって」

「貴方の言葉が信じられますか！ この雨の中走り回って私は風邪を引きそうです」

今日の午後に予定されていた、特別上級能力士官の定期会議（鐘四つから）を一刻半前にして彼は、焼き芋食べたいなあ、そう呟いてあろう事か街に焼き芋を買いに出してしまったのである。

一緒に会議内容を確認していたケノワを置いて。

「男らしくないなあ。まあ、ご苦労様。俺を無事見つけられなかったのは残念だけど」

そうなのだ。彼はどう他の士官に言い訳するか考えながら帰った私を見て、どこ行ってたの？ と平然と会議の席に就いていた。

「補佐官がいないと俺不評みたいでさあ。ケノワ・リュウはどこだって皆聞くんだもん。やっぱお前いないとダメだわ」

彼なりのフォローだろうか。

全く心に響かない。無表情と言われる口元が引き攣るのを感じながらケノワは切り返す。

「それは貴方が他の意見にちょっかいを出し過ぎるからです」

金色にも見える薄い褐色の瞳は、にんまりする。

「それでも食べて元気だしなさい。無表情に拍車がかかってるよ」

彼が押し付けたのは大量の焼き芋だった。

「こんなに要りませんよ。他の部下たちに与えたらどうです？」

彼は極端に部下にこだわるので、今のところ彼の部屋に机を置く事が出来るのは私だけだ。

「ヤダね。あいつらはお前の部下で俺は認めていない。それにわざわざ別棟の一般兵まで届けに行きたくない」

首を振るとキフィの金色のくせっ毛の髪がふわりと舞う。

見た目だけは、端整でまともそうに見えるのだが……。心の中でため息をつく。

「気に入らない？ わざわざお前の為に買ってきたのに」

「そんな訳ではありません。…限度を知る事です」

心の中を読まれたようで、慌てて切り返す。

「それより、今日さ晩飯一緒に食べない？」

妙に真剣に彼はそう口にする。

「何故ですか？ わざわざ外で食べるという事ですよね」

キフィは軍の、国の貴重な能力者なので、基本的に軍敷地の外には住めない事になっている。なので、能力者は外出制限があり軍内からあまり出られずに夜間は寮に籠もっている。

「だって、南の戦地から帰ってきたのに自由に飯も食べに出られないなんて最悪だろ」

「しかし、もしそれがばれたら危険です。ましてや貴方は、謹慎中です」

キフィは口を尖らせると人差し指を振った。

「わかってないなあ。だから、優秀な補佐官との先の前線からの無事を祝っての夕食にするんだ」

「つまり、私が口実ですか？」

私が苦い顔を作ると、彼は口元に笑みを作る。

「今日は奢るよ。どうせ金無いんだろう。芋食って寝るよりマシだと思うけど」

「：サキヨミしましたね？」

私の睨みを受けて目線をそらす。

「たまたま昨日なあ：今日一日の事だけだ。もうリユウを利用なんてしないって」

この人の能力は厄介だ。未来読みの能力者で、先月彼の能力で大変な厄介ごとに巻き込まれたばかりだ。

「私の未来を勝手に読まないで下さい。：外食は今回だけですからね」

事実、無一文に近くなった私はきつと焼き芋でも食べて寝てしまっていただろう。

「了解。」

彼は勝った、と目を輝かせて腰を下ろしていたソファから立ち上がり、上着を脱ぎ外に出る準備を始める。

「何食べる？ 寮の食堂近頃不味くなったらしくてさあ」

仕方なしに私も勤務終了のサインを勤務表に二人分書き込む。

「しかしですね、寮の料理が不味くなるはずありません。貴方の舌が肥え過ぎているのです。」

現に彼らの食事は最高のシェフに最高の食材で作られると聞いた。
軍の門を警備する一般兵に、私の責任の下彼を管理する事を提示
して、外に出る。

「リュウさあ、そうやって皆と話せばいいんだけどね」

彼は何気なく言い、私は口を噤む。彼が破天荒で他の一般兵と馴染めないうちに、私は人付き合いが苦手であるようだ。馴染めないと口数が減ってしまう。

「…まあ、俺はリュウと普通に話せるからどうでもいいと言えはい。」

「貴方はどうし…」

「あ、やめよう。その貴方ってのを。別に軍内でそう呼ばれるのは構わないけど、外じゃただの人なんだから。キフィって呼んで」

遮るようにウィンクしながら言っただけは先を歩く。

「では、キフィ殿でよろしいですか？」

「違う。キフィのまま、俺もケノワって呼ぶからさあー」

間延びした口調がいつもの調子と違う。どうやら照れているらしい。

「今日は肉食おうかなあ、ケノワは何がいいんだ」

「私に決める権利は無いですよ」

そう返すと、うーむと腕を組みながら真剣に考え始めた。

軍の正門を抜けて歩き出すと、大通りの薄暗い路地から人が飛び出てきた。

思わず腰にかけていたナイフで構える。

「おいおい。怖がるからそんなに警戒するなよ」

キフィが暢気に後ろから言う。

「ですが…」

相手が少し前に進み暗がりで見えなかった相手の顔が街灯にさらされて見える。

「あなたは」

「あ、あの…」

顔を強張らせて、立っているのは昼にスカートを汚してしまった少女だった。

「おい、その手の物仕舞ったらどうだ？」

「ああ、はい」

彼女に向けて構えていたナイフを腰に戻す。

「ここは軍本部の門の前、危険です。早く帰りなさい」

キフィが、後ろで「素っ気なー」と呟くのが聞こえたが無視する。本当に軍本部の周囲の大通りは危険が絶えず、その上人間的にも危険なのが気性の荒い一般兵だったりするのが悲しいところである。こんな少女が来るところではない。

しかし、彼女は首を振る。

「あの、違うんです。私、貴方に会いに来ました」

「は？ 私に…」

「そうか！ こいつに！？ ここはほんとに危険だから、一緒に話しながら飯でも食おうじゃないか！」

またも面白がるキフィに遮られ、押し切られそうになる。

「お待ちください！ 何故そうなるんです？ 彼女の素性も分からないのに」

「うるさいな、いいんだよ。俺が金出すんだから。えーと、女の子も連れて行ける飯屋は」

慌てて訂正を試みても、もうキフィは乗り気だ。

ルンルンで歩き出したキフィの背中を見てため息をついて、少女を振り返る。

「家に、帰らなくて大丈夫なのか？」

突然の成り行きに呆然としていた少女は、困ったように頷く。

「あのでも、本当にいいのでしょうか？」

「あの人は、いつもあななんです。危険な所には行かせませんし、ただ飯食える事は確かですが、その他の保障はありません。変な人間に自ら巻き込まれるべきじゃない。断るなら、今です」

ケノワは大真面目に言った。

そう少女が逃げるなら今しかないのだ。

奇妙な晚餐

「では、レイダちゃんとの出会いに乾杯！」

一人上機嫌にキフィは皆にグラスを持たせるとそういった。

彼女、レイダ・ゼイライスは結局ついてきたのだ。

テーブルに並ぶ肉や、エビの姿煮込みなどを前に、早くもレイダは後悔しているように見えた。

何故なら、キフィが連れて来たのは高級食堂として有名な店だったからだ。一介の花売りが入った事があるはずがない。

「こんな物は作法なんか気にしないで良いから」

そうアドバイスする。

「そうそう。俺、そんな物は気にしてないしー」

そう言いつつも、キフィの手さばきは見事だった。

それを横目に、レイダに切り出す。

「それで、私に何の話が？」

「：スカート、洗えば大丈夫なんです」

「そんなのは気にせずもらっておけばいい」

いつもなら、口を挟むキフィが横でニコニコして話を聞いている。

「そんなわけにはいきらないです。ケノワ様からこんなお金もらえません」

「汚したのは事実なのだから、手間賃と思うんだ」

「ですから、スカートなんて平気です。花を落としたわけでもありませんし」

「私は返してもらうつもりは無い。私が悪いのだから」

「でも」

二人の話が平行線をたどり始めた頃、キフィが発言する。

「じゃあさ、レイダちゃんって花売りなんでしょ？ その代金が続く限り毎日俺のところに花を持ってきてよ。部屋に飾る」

「な、貴方は何を言っているんです。軍内の一般人の進入は禁止です」

「貴方は無しだろ。別に中に入らなくてもケノワが門まで受け取りに行けばいい」

平然と言われ絶句する。

「まってください。私がそんなに暇に見えますか？ ただでさえ、あな…キフィに手を焼いているのに」

「じゃあその時間は大人しくしてるよ。なっ、レイダちゃんどうだろう？」

レイダは話を振られ、戸惑った顔で頷く。

「分かりました」

妥協案を吞まないわけにはいかない。

「花瓶が小さいからそんなに沢山要らないからね」

にんまりして、キフィはメインの肉に取り掛かった。

「貴方は馬鹿だ」

ケノワは、呆れてレイダに呟いた。

レイダの顔が一瞬歪んだのには気づかず、ケノワは久々の豪華な食事を腹いっぱい詰め込むことに専念する事にした。

やどかり (前書き)

話の長さがまちまちになっています。

やどかり

彼女を家の近くという繁華街脇の通りまで送り、キフィを軍の寮まで送り届けることにする。

キフィは無口なケノワの代わりにレイダと話をずっとしていた。その横でケノワはやっと面倒が終わると思ったのに、次の言葉がこれだった。

「なー、今日ケノワの所に泊めてよ」

「ご遠慮願いましょう」

即答するとキフィが口を尖らせる。

「なんだよ、彼女の事怒ってんの？」

「そういうことはありません。私の部屋は軍とたいした距離がない所です。それでしたら、寮に戻られる事が先決です」

大体、キフィの部屋に比べたらたいした事がない部屋だ。

「泊まる。決めたからな」

「ですから」

「明日、お前の部下にばらすぞ」

「何をです？」

「ケノワには可愛い花売りの彼女がいて、毎日花を届けに来るって。その上、情報部の奴らにも流してやる。長官まで耳に入れるぞー」

痛くもなさそうな仕返したが、人の噂とは尾ひれをつけていく物と言うのもよく知っている。

キフィとの関係も、部下たちの噂でどうやらケノワが完全にキフィを従えていると思っっている人が多いようだ。多分、軍司令長官も実際のケノワは四つも下の上司に手を焼いているというのに。

「貴方という人は…。最初からこのつもりで来ましたね」

なんだか、キフィに引きずり回された一日で肩に疲れがのしかかる感じだ。

まだまだ続くのか。

仕方が無いので、軍前の大通りに平行して走る裏通りにある家に向かう。

「おお、本当に近いんだな」

街灯が少なく薄暗い通りには小さなアパートメントと店などが並びそれを興味深そうにキフィは見回す。

「勝手に路地に入るようなら、置いていきますから」

「なんだよ、良いじゃないかこのくらい」

身体の方が路地に向きかけていたキフィは口を尖らせつつケノワの後ろにつく。

ケノワは、色あせたレンガでできた五階ほどの高さの建物に入
った。

外観は建てられてからの年季が入っていて壊れそうに見えたが、
階段や内装は小奇麗に整えられている。

階段を無言で上りきった最上階の部屋の前でケノワはキフィを振
り返る。

「言い忘れていましたが、家の中にあるものは勝手に触らないよう
にしてください」

「分かってるって。ケノワがルールだろ」

物分り良さげにキフィが答えたが、ケノワはため息をつく。

「あと、この家のことを脅しに使われても、もう何もいませんから」
家に入れる前から、ケノワのテンションはとてつもなく低かった。
さすがのキフィも無言で勢いよくこくこくと頷く。

キフィが見守る中、ケノワが扉の鍵を開ける。

入ってすぐに広めの台所とリビングがあり、他に二つ他の部屋へ
つながる扉がある。

ケノワらしく、生活感のあると無しとの境界線みたいなの。すつき
りした家だ。

「なんだ、普通じゃん。士官の部屋としては良い方なんじゃないの。
一人で住むには広いし」

二人分の上着を壁のフックに掛けながらケノワは、呟く。

「一人じゃありませんよ」

本当に小さな声だったが、キフィは地獄耳で振り返る。

「お前、恋人と住んでんの？ それなら先に言えよなー。俺お邪魔虫じゃん」

「そんなんじゃないやしません。キフィの部屋はあそこになります。ここは本当に何も」

「触るな、だろ」

キフィが言うと同い、扉をケノワが開けた。

「おお…」

キフィはその言葉の後に続くものをしばらく考え、

「意外な趣味だな」

そう、続けた。

ケノワは絶望的な顔で、部屋を見回して首を振った。

その部屋は、几帳面な刺繍レスとファンシーな家具調度でそろえられていた。

どちらでもありません

「お前の趣味しらなかった」

ケノワの入れたコーヒーを飲みながらキフィは言った。

「趣味ではありません！ 断じて！ あの部屋は家族が使っているんです」

いつもにまして厳しい声音でケノワは否定した。

「家族？」

「そうです。一つ下の妹がしばらく前まであの部屋に住んでいたのです」

「今は？」

「遠くへ遠戦に行っている間や、乾季の休日なんかに来るんです。皆好き勝手に宿代わりに使うのですよ」

没落気味の貴族とはいってもやはり、嗜好品には目が無いのが貴族の女なのだ。父も家督を継いだ兄も手を焼いているだろう。

ケノワは少しウンザリした顔で答える。

「なんだ。俺が知らないうちに可愛い趣味の彼女か変な趣味に走ったかと思った」

「どちらでもありません」

ふーん、と呟いてキフィは笑う。

「なんだあ、良かった。レイダちゃんがいるもんね」

「何故そこで彼女が出てくるんです？」

「だーってえ、レイダちゃんと知り合いなんだろう？」

「まさか」

ケノワは困惑し眉をひそめて否定する。

「あれ、違うの？ 知り合いだから訪ねてきたんだろ？」

「どうしてそう思うのです」

「名前の事とか、彼女に対する雰囲気とかで初対面じゃないなって」

「名前？」

キフィが何を言っているのか全く分からず聞き返す。

「ケノワ、自分で一言も名乗ってないのにレイダちゃんは“ケノワ様”って呼んでた。いつもよりケノワもよく喋ったし」

ケノワは必死で思い出すが分からない。

「彼女と会ったのは今日が初めて…、以前に会ったかも知れませんが」

がきつとそんなに親しくない間柄です」

キフィが非難めいた顔でケノワを見つめる。

「女の子の顔くらい覚えておきなさい。全く出会いを大切にしないんだからなあ」

それとこれとは違うとケノワは思いつつ、今日顔を見たときの覚えある感じは確かだった。

しかし、彼女と出会った場所は全く思い出せない。

王都に来てから七年経つが、その間にあまり遊びに出た事もない。その上、人の顔をよく見ないのでお手上げだ。

なんだか考えるのも馬鹿馬鹿しい。

「そろそろ寝ませんか？ 明日も早いですよ」

「うー、そうだなあ」

キフィは答えつつちょっと嫌そうに寝室へ入っていった。

それを見届けてから、ケノワは自室に入った。

ケノワの部屋は仕事用の机と必要最低限の家具があるだけだ。やはり、ケノワはこちらの方が妹の仕立てた部屋より落ち着くと思う。

まあ、あの部屋を共同で使う羽目になる兄や父を思うと不敏だが。ケノワは机に向かった。

持って帰ってきた翌日上方部へ提出の報告書に目を通しておかなければならぬ。

カーテンを閉め忘れた所為でいつもより少しだけ目が覚めるのが早かった。これで、読みかけだった報告書を読み終えられる。

何も考えずにコーヒーを入れるためやかんを火に掛ける。

ポットにお湯を移してリビングに体の向きを変える。

ああ、と寝ぼけた頭で思う。

「いたんですね、そういえば」

そこにはリビングのソファに腰掛けたキファイがいた。なにやら頭を抱え込んでいる。

「頭ん中までレエスだ…」

キファイはくたびれた様子で呟いて、立ち上がった。

「顔洗ってくる…俺の分もコーヒーお願い」

「はあ」

前々からあの部屋では夢見が悪そうと思っていたが相当だったようだ。

報告書を読みながらコーヒーを飲んでいると、キファイが戻ってきた。

「朝から仕事？ 偉いなあー」

すっきりした顔でいつもの飄々とした態度だ。

「キファイが昨日早めに仕事を切り上げるからです。昨日、本当は読

み終えるはずでした」

「あら、そうなの？　いってぐれば良いのに」

嫌味にも笑顔だ。

全くそんな気なくせに、言葉だけはいつも立派なのだ。

「んーじゃあ、俺が朝飯作っちゃおう」

「そんなこと頼めません」

頼めないどころか恐ろしい。

「いいの、いいの♪　料理得意だし」

勝手に台所に入り込み何やら鼻歌でも交えながら料理を始めた。
長年の付き合いで彼が言い出したら利かないことは十分解っている。仕方ないので今回は放っておいて今は報告書に専念する。

「はい」

キフィが目の前に差し出したのは、穀物が煮込まれたリゾットの
ような物だ。野菜がこれでもかと入れてある。

「…どうも」

キフィは得意げに笑い、ケノワの前に座る。

「不味くないと思うよ。食ってみ」

キフィの視線に困りつつ、それを口に運ぶ。

「...どう？」

「おいしいですよ」

「だろ？　うちの村の主食なんだ。いつもは妹が作ってるんだけど、俺がたまに作るとすげー喜ぶから」

嬉しそうにキフィは自分のぶんを食べ始める。

「この四年で初めてキフィの手料理食べましたよ」

「そうだったけ？　まあ俺が作ると高くつくからな」

満足げな笑みを彼は浮かべていた。

戸惑いの花束

昼過ぎ、軍の外の通りに一人ケノワは立っていた。

もちろん不本意だが、レイダを待ったためだ。

キフィに有無を言わさぬ笑顔で見送られ、書類作りを置いて出てきたのだ。大人しくする約束のキフィに一応頼んだが出来上がっている可能性はほぼゼロにちかい。

彼女とのことはいまだに思い出せない。それはほぼ諦めた。

「あ、あの」

次の遠征会議の事について鬱々と考え込んでいたケノワに震えた声で呼びかける。

顔を上げると少し頬を上気させたレイダが立っていた。

走ってきたのか息が上がっている。

「申し訳ありません。お待たせしました」

腕に抱えていた花を差し出す。いろんな種類の花が混じる小さな花束だ。

「そんなに急いでくる必要は無い」

レイダを気遣って発した言葉だったが、今にも泣きそうな顔になる。

「私、迷惑ですか？」

「ああ」

またつい、レイダの言葉に乗ってしまい本音を答える。言葉を失って立ちすくんでいたレイダは、しばらく俯いていたが勢いよく顔を上げる。

「でも、これ毎日持ってきます。約束は絶対ですから！」

早口で言うと、レイダはケノワに押し付けるように花を渡すと走り去った。

「何なんだ」

眩きながら振り返ると、通りをはさんで反対側の軍の門番と目が合う。

最悪だ。

ケノワが心中で呟いたのは言うまでもない。

レイダは次の日から、一度も遅れず門の前で待っていた。

あるときは笑顔で、あるときはどうしようもなく落ちつきなく元気に。

その日も、レイダは雨が止んだばかりの門の前で待っていた。

「ケノワ様」

現れたケノワに薄く笑いかける。

「これ、今日はいつもと違うのを持って来たんです。どうですか？」

今日は同じ種類の花だけの束。小さな花びらが真っ赤に染まっている。

しかし、その花の名前など知らない。

それはいつの日だったか、実家で育てられていた花と同じだろう。庭師が世話をするのを妹たちが一生懸命見ていたから。

「：私は、よく花のことはわからない」

「そ、そうですか」

いつもに無く元気が無い。笑顔もギリギリのところで保っているようだ。

「どうした？ 元気がないな」

「え？」

レイダの顔に一瞬怯えが混じる。しかし、すぐに笑顔を取り戻す。

「そんなことないですよ！ ケノワ様と今日も会えたし最高の気分です」

「本当に…」

「あー！ もしかして、ケノワ様私の事気にしてくれるんですか？
うれしいなあ」

明るい声にケノワの追求は掻き消された。ケノワの手をぶんぶん振り回して笑っていたレイダは、満足したように頷いて一方的に別れを告げる。

「では、今日の配達は終了です。：花の配達も今日で終了です。私、ケノワ様に毎日会えて話が出来て最高でした。さようなら」

花束を持ち階段を上りながら遠ざかりなら告げられた言葉は、ケノワの中でぐるぐる回っていた。
いつもなら速攻で忘れてしまえるのに。

「ケ、ノ、ワ」

階段のすぐ先にある部屋の前でキフィは待っていた。

「今日は遅かったな？ レイダちゃんと愛を深めていたのか？」

キフィが自室の扉を開けながら、冗談めかしに言った言葉にケノワはすぐに答えられなかった。

「ケノワ？」

キフィが窓際に並んだ花瓶をさらに増やしながら訊ねる。

「：ああ、すいません。花売りは、今日で最後だそうです」

「はあ?!」

ケノワが差し出した花束を受け取っていたキフィが危うく落とし

そうになる。

「な、なんで！」

「私に言われなくても」

「おかしいだろ？ 自分からアピールしておいて急に！ お前何か理由は聞かなかったのかよ！」

キフィの言う事がいまいち理解できないが、それでも彼女がやめるのだからしょうがない。

「いいえ。もう代金分の花をいただいたのでしよう」

キフィが眉をひそめる。

「いいのか？」

「何が、ですか？」

「レイダちゃんだよ。お前、分かってるのか？ ちゃんと、会う度に話してたか？ 彼女の事なんとも思わないのか？」

まるで全てが自分の所為のように言われてケノワは、黙る。

呆れたようにため息をついてキフィは、花瓶に花を生け始めた。結局一日がもはやしたまま終わってしまった気がする。キフィはあれからすっかり口をきかなくなり、仕事の話しかなかった。

正直キフィが喋らないと部屋の中がいつもの十倍位暗いものになった。

彼女が、あんなに怯えた顔をする理由は何だったのだろうか？
キフィを怒らせてしまう位に自分は、鈍感なのだ。

次の日はキフィが門の前で待っていたが、結局レイダは現れなかった。

「来なかった。居たら、連れて来るつもりだったんだけどな。ケノワ、レイダちゃんの家知らないのか？」

「そういった話は、無かったです」

キフィは無言で頷いた。

「：私が、いけなかったのでしょうか？」

毎日会っていた彼女の姿を一日見ないというのはこんなに落ち着かない物なのだろうか？

自分が彼女はこういう気持ちでここへ来ていたのか考えていれば、良かったのか。

「ケノワ、しょうがないさ。友達になる縁が無かったんだ・・・」

キフィはそうつぶやいた。

戸惑いの花束 (後書き)

お読みいただきありがとうございます。
ついでに評価もお願いします！

恋愛のカテゴリにしたけど大丈夫だろうか、これ…

冷たい手を

仕事が終わる重い気持ちのままケノワは大通りを歩いていた。なんとなく、そのまま家に帰る気にならなかった。

「ここらか」

以前レイダを送った通りに足が向いていた。

彼女が今にも出てきそうだが、この通りに花屋はない。繁華街の裏路地だ。

まあ皆、住むのはこちらになるのだろうか。

一度通りを抜け、また往復するように歩き出す。

自分が何をしたいかわからない。意外にも人通りは多い。何やら小さい看板がかかる店が並んでいる。

扉によくわからない絵が描いてある店の前に差し掛かったとき、急にその扉が開いた。小さな身体が飛び出してきて雑踏に紛れる。

「待て！ お前がどこに逃げようが逃げ切れるはず無いだろう！」

大声で叫びながら大男が先に現れた人を追いかけ始めた。

いきなりの展開に少々驚きながらもケノワはまた歩き始めた。ここでは皆こういう風に生活しているのだろうか？

すっかり暗くなった家の前の通りを歩く。

すこし、冷えてきているようで肌寒い。結局夕刻を無駄に過ごしてしまった。

遠目からアパートメントの前に誰か座り込んでいるのが見える。
小柄で子供が迷子になってしまったようだ。

「どうした…」

座り込むひとへの言葉は途切れた。

「ケノワ様…？」

今にも泣きそうなくせに甘い声で自分の名前を呼ぶ。

「レイダ」

肩を震わせて、レイダはケノワを見上げる。いつも着ているふわふわのワンピースではなく、身体の線が見えるようなぴったりの肩だしのドレスでレイダは寒さに耐えていた。

「なぜ、そんな薄着で・・・」

自分の上着をレイダに掛けてやりながらケノワは彼女の目の下に青あざがあるのを見つける。

頬に触れると驚くほど冷たい。

「怪我しているな。家まで送るから、立ちなさい」

「嫌です」

震える声でレイダは即答した。

「嫌です。帰れないです、私逃げてきたんです」

「逃げるってなにからだ？」

「私、本当は…花屋なんかじゃないです。家にお金なくて私、売られてしまつて。今日から本当の仕事が始まるはずだったんです。でも、でも…」

声が上手く出ないのかレイダの口がパクパクする。

「いい。レイダもういい」

「だ…め。私、ケノワ様が好きです。だから、怖くて。ずっとなんて言わない。一回だけでいい…」

喉が大きく動く。

「私を抱いてください」

泣きそうな顔で必死に言われた事に、しばしケノワは呆然とする。

「貴方は、何を言っているか分かっているのか？」

「わかっています。でも…!!」

ケノワはレイダの身体を支えるようにして立たせる。

「これから私の部屋に連れて行くが」

「覚悟はできています」

「…違う。私にそんなつもりは無い。こんな所で問答していても身体は冷えるばかりでいけない」

「いいんです。ケノワ様、ねっ？ 抱いてください」

「・・・」

ケノワは何も言う気になれずに、レイダを部屋へ連れて行くため階段を上りはじめる。

玄関からリビングへ連れて来るとケノワは告げる。

「…レイダ、身体が冷たくなっているから湯を浴びてきなさい」

「そしたら、私を…」

期待に満ちた瞳で見られてケノワは即答する。

「その気は無い」

「…でも」

「いいから」

食い下がろうとしたレイダはケノワの顔を見てやめた。

ケノワがあまりにも、怒りを面に出していたから。

レイダが部屋から浴室に消えるのを見送り、ケノワはソファに腰

掛け深くため息をついた。

何故こうなるのだ？

昨日の今日でこの展開は何なのだ？

レイダの行動が読めない。

突然現れて、自分を抱けなどとあまりにも突飛で、理解できない。

しかし、彼女が今から晒されるという状況下に自分は到底返す気にはなれなかった。つまり、ここに居させることになる。

「：解らない」

ケノワは考える事をやめた。

とりあえず今夜はここで匿おう。

そう決めた所でレイダが浴室から出てくる。

「ケノワ様：」

今度こそケノワは絶句した。

レイダは服を着る事をせずにタオル一枚で出てきたのだ。

おずおずとケノワに近づいてくる。硬直していたケノワは急に立ち上がると、レイダを冷ややかに見下ろした。

「妹の服を貸す、好きに使って構わないからあの部屋へ今すぐ消えてくれ」

指差された部屋の扉とケノワを交互に見てレイダは部屋へ入っていった。

「一体：どうすれば」

ケノワ本当に頭を抱えた。
自分がどうすべきなのか、気持ちの整理がつかない。

夜中、唐突に目が覚めた。

最初は隙間風と思った。しかし、誰かがすすり泣いているようだ。混乱した頭で、寝室から出た。薄暗い中人影を見つけそこで家にレイダを置いていた事を思い出す。

レイダは、ソファに膝を抱えて座っていた。ケノワの気配に気づき顔を上げる。

「ケノワ…さま」

怯えた声にケノワは苛立ちを覚えた。

ランプを灯すと涙に濡れた顔が浮かび上がる。鼻の頭が赤い。

「何を…」

「ごめんなさい！ 私、朝から帰りますから、もう迷惑な事したりしないですから…嫌いにならないで…」

レイダの瞳から大粒の涙がこぼれる。

何度もごめんなさいと繰り返し呟くレイダの頬の滴をケノワは無意識にぬぐってやっていた。

驚きに目を見開くレイダをよそに、ケノワは妹たちに昔やってあげたように腕の中に抱きしめていた。

初めて彼女にこんな事をした気がするのに懐かしい感じがする。

それは妹たちに彼女が似ているからかもしれないし、彼女から故郷の匂いがしたからかもしれない。

「っ…ケノワさま？」

涙も驚きで止まったようでケノワの肩に回った顔を必死で動かす。

ふとケノワの腕はずれて、両頬に手のひらが触れる。額にコツンとケノワの額が重なる。

「ここに、居ていい。ただし、変なことを言わない事」

「は…い」

耳元で囁かれた言葉にレイダは、必死で嗚咽を抑えて答える。

困惑（前書き）

この回からレイダ目線も入ります。

困惑

耳元で心地よい音が聞こえる。

歌？

歌詞は無くただメロディだ。

子供のころ故郷の町では母親たちが歌ってくれる歌。

夢から覚めつつベットの脇にあるレースのついたカーテンを見て
レイダは飛び起きた。

まったく見たことがないもの。

娯館の部屋じゃなく、カーテンから透ける太陽の位置は恐ろしく
上だ。

そうだ、この場所はケノワの家だ。

「なんで」

レイダは慌てて、鏡の前に立って愕然とした。

昨日の夜、かなりの間泣き続けて疲れて寝た目は不恰好に腫れて
いた。その上青あざつきだ。

「どうしよう…」

髪を梳くのさえ忘れて立ち尽くしていると、扉が叩かれる。

「レイダ、起きたのか？」

「え？ あ、はいっ」

「入るぞ」

唐突にドアノブが回転する。

レイダは半ば突進するようにドアを押さえた。

「だ、だめです！ いけません。私死んじゃいます」

「？ 何がだ」

レイダはまた泣きそうになりながら扉にはりつく。世界で一番憧れていて、大好きなケノワにこの最低最悪の顔など見せたくない。

レイダに入室を拒まれて、ケノワは混乱した。

昨日はあそこまで擦り寄ってきて今度はこれか？

ケノワは、意地になってレイダの制止を振りきって部屋の扉を開けた。レイダは押される形で床に尻を着いていた。

「レイダ？ 今度はなんだ」

「ううう、見ないでください！ 私ひどい顔です」

必死で顔を隠す彼女の姿にため息を漏らす。

「そんなことか。さっき見たからどうにもならない」

無表情の下そう告げる。

「み、見たっていつですか？」

腫れた目で不安げに見上げてくる。

「一晩中泣き止むまで一緒に居たんだ、いまさらだ」

彼女は絶句して次に赤くなる。

「あの、その、ありがとう…:ございます」

ケノワは床に座ったままのレイダを抱き起こす。

「いいから、顔洗ってきなさい」

「はい」

レイダは言われたとおりに顔を洗いながら困惑していた。昨日からケノワがこの前までの彼よりも自分に近い気がしたのだ。優しくされている。

それも自分が。

このことに対してレイダは特別な感情が湧き上がるのを感じた。いつも、いつも懂れていた彼の隣りに自分が居る。

顔を洗い終えリビングに入るとテーブルには既に朝食が並んでいた。

その完璧な朝食にほうけてしまう。

「ほら、座りなさい」

既に座ってレイダを待っていたケノワが促す。

「あ、はい」

レイダが座った事を確認したケノワはそのまま食事を始めた。
レイダはそれをついまじまじと見てしまった。

「・・・どうした？」

レイダの目線に気付いてケノワが訊ねると慌てて首を振った。
おずおずと口に運んだケノワの手料理は緊張で味が分からなかった。

「あの・・・私」

朝食を終えてコーヒーを口に運ぶケノワにレイダは恐るおそると切り出した。

「なんだ？」

「私、その、どうしたらいいのか・・・」

少しケノワが怪訝な顔をする。

「何を？ はっきりいってくれないか」

ケノワの声にレイダは少し肩を揺らす。

「私、いつか戻されちゃうんでしょうか？ 今日ですか？ 明日ですか？」

勇気を出して言うと、ケノワの表情は呆れた顔に変わっていた。

「昨日言っただろう。ここに居て良いと。その娼館に帰すつもりはない。帰りたいのなら止めないが」

「いいえ、そんな。ありがとうございます」

慌てて首を振る。

夢のようだった。このまま、ケノワの家にいられる。嬉しくて顔がにやけてしまう。

「あの、私家事とかします」

そういうとケノワはちらりとレイダを一瞥して呟いた。

「好きにしたらいい」

「はい！」

「ケノワ〜♪」

朝から至極上機嫌のキフィに出勤早々絡まれた。

「お前、昨日レイダちゃんといただろ？」

「サキヨミですか」

軽く睨むと、キフィは首を振った。

「違う。お前のうちに近所の奴に聞いた情報だ。仲良く買い物とかしてたって？」

誰だろう近所の奴と言うのは。

休日の内容まで一番めんどくさい相手に情報を流しているなんて。

「・・・ちがいます」

「違うって何が？ 今、自分でサキヨミとか言っただろ。事実なん
だろ。恋人にしたのか？」

「何を言ってるんです」

軽い頭痛を覚える。恋人であるはずが無い事などキフィにもわか
っているはずなのに。

「で、本当のところはどうなんだ？」

「拾っただけです」

「どこで？」

キフィはニヤニヤしながら訊ねる。

「・・・・・・・・家の前です」

「家の前って何だよそれ」

「彼女を買った娼館から逃げてきたらしいです」

「は？」

キフィは予想もしなかった事だったらしく、大きく口を開く。

「あのレイダちゃんが娼館から？」

「殴られていてあまりに酷かったものですから」

キフィはただ頷いて真剣な顔をして考え込んでいた。

「…許せねえ」

「なんですか？」

キフィがふいに出した言葉に聞き返す。

「信じらんねえ。女の子を普通殴るかよ！ レイダちゃんいくつだ
と思っただよ！」

キフィは一つ下の妹が居るといっていた。
きつとレイダを見たときのケノワの心境と同じなのだろう。

しかし、彼は勘違いしているようだ。

彼女の年齢を聞いて驚いたが、あれでも十八歳。十七歳の彼よりも年上らしい。

わざわざそこまで言う気はさらさらないので訂正はしないが。

「しばらくうちで預かります」

「お、じゃあ…」

きらきらした顔で身を乗りだしたキフィにケノワはすかさず付け足す。

「貴方はうちにはいらっしやなくて結構ですから」

「ちえーけちだな」

ケノワの先回りの言葉にキフィは唇を尖らせる。

「…ま、彼女が落ち着いたら会わせてもらおう」

頭を掻きながら呟くと自分の椅子へ戻っていった。

家に帰ると部屋に充滿する匂いにケノワは慌てて台所へ行った。そこには何ともいえない顔で立っているレイダがいた。

「何があったんだ？」

レイダは一瞬目線を横にそらすと呟いた。

「夜ご飯、作ろうと思ったんです」

「夜ご飯…？」

目の前の光景にケノワは頭を抱えなくなった。

まずレイダの髪の毛が若干こげている気がする。そして見るも無残な色合いに焼けている肉。鍋には怪しい紫色のスープが湯気を立てる。

食べられる物がこの中にどれかあるのだろうか？

正直ここまでは破滅的な食材の壊し方を初めて見た。あのキフィさえもおいしい料理が作れるのに。

「その、ごめんなさい」

レイダは本当に申し訳なさそうに言った。

「ああ、これはしょうがない。私が料理を教えるから」

レイダは驚いて顔を上げる。

「本当ですか?!」

「ただし、習った物以外は作らないで欲しい」

この部屋が彼女によって崩壊してしまう事を阻止しなくてはならない。

ケノワの真剣すぎる顔にレイダは頷いた。

困惑（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
感想・評価などいただけると嬉しいです。

考えておくから

遠くから見ていただだけのケノワが身近な人になった。

いつも何か考えているような顔をしている彼が実は何も考えていない時があったり、料理がとても上手だったり意外なことばかりだ。ただ、一緒にいる事に慣れてもそれが恋愛に発展する甘いものは傾きそうに無かった。

何も無かった出窓の外の部分にレイダは花を育て始めた。

通常の人が育てる事が難しい品種でさえもとても綺麗に育ちレイダの自尊心が守られた。

幼い頃から植物を育てる事にとっても秀でていたのだ。

料理は日進月歩で少しずつ覚えている状態だった。

少しの失敗であればケノワは何も言わずに見守ってくれる。

小さい頃からよく考えれば両親が自分には料理をさせてはくれないなかった。

決してその頃は貧しかったわけでもないのに。

そういえば初めて一人でクッキーを焼いた後から台所に入れてもらえなくなった気がする。

そのときに粘ってやはり勉強するべきだったが、あの両親の顔を思い出すとどうも入室は許可されなかったのではないだろうか。

一日中家にいる事はレイダを寂しい気持ちにさせる。
素直に外を出歩く事が出来なくて本当の荷物になってしまうのではないかと考え始めていた。
ケノワは気にしなくてもいいと言ってくれるがどうしても考えるのだ。

「ケノワ様」

ケノワが仕事が早く終わり帰宅した日に思い切って聞いてみた。

「何だ？」

きつちりと着込んでいた制服を緩めながらケノワはレイダを見た。

「あの、私仕事を何かしようと思うんです」

「仕事？」

手を止めてケノワが目線を合わせる。

「はい。私、ずっと何もしないで居るわけにも行かないし…何か出来る事したいです」

「しかし…」

案の定表情には出ないが考え込んだケノワにレイダは続けた。

「私、明日にでもあの娼館にもう一度行って話してきます」

「え」

ケノワの目に厳しいものが混じる。

「あ、違いますよ。働きに行くんじゃないくて、売られた時に払われた金額を返す事が出来ればもう追われなくなっ」

「そうか…」

しばらく重い沈黙が続いたあと、ケノワが口を開く。

「賛成は出来ないな」

「でも！」

「レイダが行くのは賛成できない。しばらく外にも出てはいけない」

ケノワは自室のドアを開けながらきっぱり言う。レイダの前でそれは閉じられた。

「なんだか、いじわる」

ケノワが言う事も分かるけど、何かしたいのも事実だ。
このまま彼に全てを任せてしまう事はしたくない。

担当している家事を終わらせるとレイダは外に出た。

ケノワの家に転がり込んでからは一人で出かけるのは初めてだった。

仕事を探すつもりだった。返す金額を聞きに行く事をして、結局は払えなければ意味が無い。娼館に行くのはお金を貯めてからにするしかないだろう。

通りを歩きながら働き手を探していないか聞いて回るしかない。レイダにこの王都に知り合いなんていないのだから。

一日目は全く収穫ゼロ。

この幼く見える顔や体つきも大きく影響しているように思う。でも、これはどうしても変える事が出来ないところだ。

次の日、また家を抜け出して半日ほど歩き回った所で呼びかけられた気がして振り返る。

「レイダちゃん」

振り返った先には黒髪が綺麗な女の人が立っていた。

彼女はレイダが毎日のように通った花屋の店員だった。通りの角にある華やかな場所、多分彼女のおかげで売り上げを上げる花屋。

「エレノアさん…」

「最近こないから心配してたのよ？ あ、レイダちゃんが好きなアネモネが入ってきたの、見ていく？」

にこやかに話しかけられて、レイダは頷く。不覚にも嬉しくてな

んだか泣きそうになる。自分を心配してくれるなんて。
エレノアは3つしか変わらないのにとっても大人な女性で憧れていた。

「どうしたの？」

なにも言わずに自分を見るレイダにエレノアは首を傾げる。

「…あの…」

彼女と大好きな花屋で働いたらどんなに楽しいだろう？
自分のこんなわがままを聞いてくれるだろうか？

「私を…、えっ、なん、で…」

意を決して顔を上げて口を開いた所で、店の奥から不意に現れた
予想もしなかった人と目が合う。

「どうしてここにいる？」

いつもより冷たい言葉。

それよりもブルーグレイの瞳は自分を責めるように見ている。

「え、と…」

完全に言葉を見失ってしまう。

「リュウ、レイダちゃんと知り合いなの？」

面白そうにエレノアは訊ねる。レイダとケノワの二人の間に流れ

た険悪なムードは完全に無視だ。

「あぁ」

短く答えると不意にレイダの腕をケノワは掴んだ。

「また来る」

「はい。さっきの話考えておくから」

ケノワの恐ろしい程の無表情（多分これが基本スタンス）にもエ
レノアは臆することなく笑顔で手を振る。

エレノアとケノワ、二人は知り合いだったのだろうか？ 自分よ
り二人とも長く王都にいる、恋人などでも可笑しくないのだ。

本当のところはどうなのだろう。

自分が知らないだけ？

見えない

腕をつかんだまま足早に歩き始めたケノワにレイダは精一杯ついていくしかない。

今はまだ仕事中的のはずだ、だから今も制服を着たまま。それも士官用で一般人にも興味を持たれる、目立つもの。

レイダの視線に気付いたのかケノワが歩きながら振り返る。

「どうして出てきた？」

少し掴まれていた腕への力が抜けた。

「仕事を…探しに」

ケノワの右眉が上がる。僅かな変化だけど怖い。

でも…心の中でまたこの前と同じ言葉を繰り返してしまう。

言葉を続ける事が出来なくて、沈黙のままケノワのアパートメントの前まで来てしまった。

「ここまでくれば大丈夫だろう」

ケノワはレイダの腕を解放すると部屋まで戻るように無言で示す。

「ごめんなさい」

ケノワが怒っているような気がして慌てて階段を駆け上り部屋へ駆け込む。

気のせいなんかじゃない、あれは大好きな人を自分が怒らせてしまったのだ。

こんな身寄りなんて無くてどうしようもないレイダを家に置いてくれているだけでも奇蹟に近い。

それなのにレイダは自ら彼の言うことを破った。

だから怒る権利を彼は持っているのだ。

でも、レイダの中ではどうしても割り切れなかった。娼館に売られるまでの自分に彼が優しくしてくれる事、でも、いつまで続くか分からない。

ずっと、甘えられない。だから、自立して生活をしていく事を目指さなくてはいけないのだ。

夜遅くケノワが帰ってくる。残業だったようでその手にはまだ大量の資料が入ったファイルを手に入っていた。

レイダの夕食はケノワが朝作り置きしていった物を温め直して食べていた。

今だにメイン料理は任されていない。

レイダもケノワのためにその食材を温める。

それを横目にケノワは自室で軍服から私服に着替えて出てきた。

「どうぞ…」

レイダから出された食事を受け取り食べ始める。
いつも通りに食べおえたケノワは、所在が無さげに立ちすくむレイダを一瞥する。

「どうした」

言いながらも自身が食べ終わった食器を重ねて流しに置く。言葉を促すようにケノワは視線を送る。

そんなケノワを目で追っていたレイダは頷いた。

「今日の…お昼の事で…」

「そのことか」

あっさりと頷くとケノワはソファへレイダを仕草で呼ぶ。

自身も座って目の前に座るレイダを見る。

「出歩くなと、話さなかったか」

「はい」

ケノワの顔は怒っているわけではない。

けど、目に感情が宿る。言う事を聞かない自分に苛立ってる。

「危ないから、今後一人では出歩くな」

「そんな!」

言い切られた言葉にレイダは泣きそうになる。

それに別の感情が混ざる。

納得いかないと表情に表したレイダにケノワは重ねて告げる。

「今はこの家から出られると仕事が増えるんだ。大人しくしてくれないか」

まるでそれは娼館に入れられた時に聞いたような言葉。

——それでは意味が無いのだ。

立ち上がって声をあげてしまう。

「どうしてそんな事いいますか？ 私、嫌です。ずっとここに閉じこもってるなんて！ こんなじゃ私が逃げたかった生活と何も変わらない」

感情が高ぶって涙が盛り上がってくるのを感じる。

自分がこの家にいる間ケノワはエレノアのような彼女と会ったり自由を謳歌するのだ。いくら自分からこの家に転がり込んだからといってあんまりだ。

「わ、私は娼館に戻ってでもここから出たほうが自由なのかもしれない…」

思わず出してしまった言葉にケノワが顔を上げる。

「それは許さない」

強く低く響いた声にレイダは身を竦ませる。

「それでもっ、私だってしたいことがあるんです！」

涙声でそれだけ口にすると自身にあてがわれた部屋に駆け込む。

「レイダ」

レースが沢山施されたふかふかのベッドに飛び込む。ぐちゃぐちゃになった頭の片隅で自分の名前を呼ぶケノワの声を聞いた。

「っふ、ぐ…」

布団を頭まで被ると声殺してとめどなく流れる涙と共に泣いた。

「どうしてこうなるんだ」

レイダの部屋から微かに泣き声が聞こえる。

出てこないと悟り彼女の扉の前から身体を離す。

深くため息をつくと自室へ向かう。今日中に仕上げなくてはならない報告書がいくつか残っているのだ。

思わず増えてしまった仕事に少しキフィに回すことも考えなくてはいけない。

これは自分だけのせいではないのだから。

焦燥

「ケノワ♪ 昨日の夜どうだった？」

朝からにっこり微笑んだ王子様にケノワは睨みを利かせる。上司だろうがキフィに関しては構ってられない。

昨日の帰り、キフィは言ったのだ。『言葉には気をつけてな』それはつまり、昨晚の事を既にサキヨミしていたのではないか？キフィは唇を尖らせる。

「なんだよ、せっかく聞いてやってんのに。ちゃんと忠告してやっただろ？」

「…遠回し過ぎです」

「なんだよ、結局泣かせたんだ？」

彼は自身の執務用の机で大げさにため息を吐く。
そのキフィへケノワは手に持っていた書類を渡す。

「それを今日中に仕上げてください」

「えっこれってあれだろ、明日の会議に使う提出書類…お前の仕事だろ？」

「あなたの仕事です」

ケノワは自身の机にも取り出した書類を置く。

本日提出する書類に関しては夜のうちに仕上げておいた。

キフィに手渡したのは本来、彼が提出すべき報告書である。彼は出来るくせに大まかな概要を記載した用紙をケノワに手渡していつも逃げてしまうのだ。今まではケノワが代わりに書類への書き換えをしていた。

「俺、今日仕事がいくつかあるんだけど？」

キフィが書類を手にしたままケノワを窺う様に見た。

キフィの言う仕事とは彼の能力を使って行なうサキヨミの仕事だ。戦場の動向などを読むのは毎日ではないが、これからの情勢や国内の把握には大きく役立つ。

それもキフィほど正確で思い通りのことに対しサキヨミできるものは少ない。

性格に大きな問題があっても引っ張りだこなのである。それも上級士官の定例会では現状報告も必要。

だから、普段はケノワが大目に見てやり処理している。

「では、それもあなたの仕事ですね」

つれない様子のケノワにキフィは唸った。

「今日も行くのかよ？」

「いきます。急ぐことですので」

「…」

キフィは手元の書類を机に降ろすとペンを手に取った。

「今回だけだからな、全くっ。昼の鐘二つまでに終わらせてやる！」

「ありがとうございます」

素直に仕事を始めたキフィに礼を言うとケノワも書類を開いた。キフィのした仕事分書類提出は発生するのだ。彼に渡した以外の物を彼の宣言した鐘二つまでに終わらせなくてはいけない。

昼食を挟みながらもキフィは渡された仕事をきちんと作り上げて見せた。

元々彼も村を治めていた人間だ。こういった仕事もそつなくこなせる。もう少し普段からさせてもいいのではないだろうか。

「あー嫌だな。アングリードのおっさんに引き渡してお前だけ行くつもりなんだろ？」

キフィは自室がある能力向上・研究科学局の司令部建物から一般の兵もいる建物へ移る廊下を歩きながら言った。心底嫌そうな顔。

「言葉を慎んでください」

ケノワは短く訂正する。

アングリードのおっさん呼ばわりされたのは、特別上級能力士官を纏め上げるアングリード・アルファン統括のことだ。彼自身は能力者ではなく能力向上・研究科学局の研究局長である。

高い能力のキフィは彼のかっこの研究対象でキフィは彼のこと

が苦手のようだった。

「…あのおっさんの目線見たことあんのかよ、めっちゃ嫌な視線なんだぞ…」

「仕事ですのぞ」

これから行なう行政把握のサキヨミにはアングリドと彼の補佐の研究員がつく。その間ケノワは自身の副官にキフィを任せて外に行く事になっていた。

「…本日は大人しくしてください」

ケノワの部下、キフィの副補佐官は今朝この話を聞いた時に見間違いでなければ頬を引き攣らせていた。

彼の後ろにいたキフィの部下たちも、ケノワと目線を合わせない。更なる補佐としての人員追加をオーラで拒否していた。そんな彼らにはこれ幸いと溜まった書類を押し付けてきた。

普段のキフィの破天荒は副官になると悪化するらしく、重要な補佐官会議などの時さえ呼び出されることがある。

子供じゃないんだからやめてくれという話だ。

「…わかってる」

キフィにして珍しく殊勝に頷いた。

彼なりに今がふざけている場合でないと分かっているらしい。

渡り廊下を過ぎると副補佐官が待っていた。キフィは彼を見つけるとニヤリと嫌な笑みを浮かべた。自覚と行動はまったく違うらしい。

「よう」

「お久しぶりです、クレイ殿」

何とかよどみなく返答したパース副補佐官はやはり無理をしているようだった。顔の硬直が極度になり今朝より引き攣っている。確か彼は27歳、キフィの10も年上と言うのにこれだ。

「約束どおりお願いします」

「ん。パース、よろ」

略しすぎだろ、という思いを込めてキフィを横目に睨むとケノワの背中をバンバンたたく。

「大丈夫、俺いい子にしてるから行って来なっ」

「分かってます。言葉遣いも訂正を」

彼をほぼ無視してケノワは彼に上官としての自覚を持たせるため訂正を入れた。

「はいはい」

キフィもいつもの事なので適当に流す。

こういったケノワの平然とした態度や彼に命令することからキフィを従えているとう要因なのだが本人は意識していない。

「パース補佐官、本日これよりクレイ特別上級能力士官の護衛・補

佐の役割を委譲します。くれぐれも危険な行為はさせないように（他の人間に対して）」

手にしていた管理書類を手渡すとパース補佐官とキフィを置いて踵を返す。

そのときパース補佐官がこれからの事に半分泣きそうな顔で継るように見ているのを無視して。

焦燥 (後書き)

読者登録ありがとうございます。
嬉しいです。

わがまま

そつと扉を開けて外を伺い見る。人の気配がない事を確認して自分の部屋から抜け出した。

リビングのテーブルの上に自分用の朝食と昼食の作り置きがあるのに気付く。

「ケノワさま…」

思わず目頭に熱を感じる。

昨晚あんなに酷い言葉をぶつけたにも関わらず、彼は怒ることもせずにいつも通りのことをしてくれる。

なんて自分は子供なんだろう。勝手に押しかけて匿ってもらっているのに我が儘ばかり…。彼は呆れているのかもしれない。だから怒る事もしないのかも。

——これ以上の我が儘は言わない。

仕事を決めて、お荷物から脱却をするんだ。もし、ケノワに呆れられて見放されても大丈夫なように。

ケノワの残してくれた朝食を食べると、アパルトマンを駆け下りる。ケノワにこの家から出ることを禁止されていたけれど、出ないわけに行かない。

まず、エレノアに頼むことを考えなくてはならない。例えば彼女がケノワの恋人でも。自分が唯一まともに出来る事を…。

でも、ちょっと思ってる。

今日仕事が見つけれなければ彼の言葉に甘えてしまってもいいのかも、と。

雨季が目の前に迫っている王都の空は薄曇。

もしかすると、雨が降り始めるかもしれない。

軍本部近くの通りを避けて大通りに向かう。大通りと小さな商店の通りが交わる角がエレノアが働く花屋だ。

小走りにレイダは通りを走りぬける。

ひとつの事に真っ直ぐに進むレイダは気付けなかった。

色んな思惑の中に自分がいる事を。彼女の後にゆっくりと迫るものがある事を。

エレノアは今にも降りだしそうな空を恨めしく思いながら、店の前に出していた鉢を店の内側に取り入れていた。

この雨季に近くなる度に訪れるアマゴイの雨に辟易しているのだ。あと少しで天然に降るんだからわざわざ足元を泥まみれにしなくてもいいだろうに。

主要な道には敷石があるがちょうどエレノアの店の前からは地面がそのまま晒されてる。足元が本当に悪くなるのだ。

今日は気分が最悪だから早めに店を閉めようと心に誓う。また、これを聞いた恋人に苦笑いされるかもしれないけど。

全ての鉢を店に取り入れて奥から紅茶の入ったカップを持ってくる。店の入り口に先ほどまで無かった人影を見つけた。

往復している間に訪れたようだ。

「いらっしゃいませ。ごめんなさい、お待たせして。奥に戻って
…」

近づきながら挨拶をすると相手は首を振る。

「いえ…いいんです」

聞き覚えのある声にエレノアはもつと近づく。

「レイダちゃん」

「はい」

名前を呼ぶと俯いていた彼女は慌てて顔を上げる。

最近、急に店に現れなくなったと思ったら、二日続けて顔を
見せてくれた。前回と同じように深刻そうな顔をして。

「どうしたの？ こっちに座って」

店番用に出している椅子とすすめる。自身もセットになっていた
椅子にすわり目線で促す。彼女は何か自分に伝えに来た気がしたの
だ。

しばらくの間、レイダは半分泣きそうな顔でエレノアを見つめて
いたが口を開く。

「あの…私、今仕事が無くて…それでこのお店で働かせていただく
事できないですか？」

「この前までどこかで働いていなかった？」

「それは…私、お金返さなくちゃいけないことがあって…働かなくてはいけないんです」

はつきりとは答えないまま真剣な目で自分を見るレイダ。

確かにエレノアが一人でこの店を続けるのは大変だ。

体調の事もあるので毎日店を開く事ができていない。出来ればこれからの時期や乾季に是非、人が欲しいと思っていた。けれど…

「レイダちゃん…ごめんね。今、私の所で働かせたいって話が他にもあって、そちらにもまだ返事をしていないのよ。現状すぐに答える事は難しいわ」

何故ならば、レイダの他に頼んできているのはエレノアの恋人からの頼みなのだから。

恋人も上司からの強い依頼だったらしく、できるだけ善処するように言われている。何せ恋人があんなに真剣に私に頼みごとをする事は珍しい。

彼女の話も無下には出来ないけれど…。

「そう、なんですか…」

レイダはがっくりと肩を落として薄く笑う。

「急にこんなお願いしてすみませんでした」

「いいえ。でも、もしうちで働かせてあげられそうだったらすぐにお知らせするわね」

「ありがとうございます」

レイダはエレノアが出していた紅茶を飲み干すと立ち上がる。
そこでふと思いついて訊ねてみる。

「あ、レイダちゃんってリュウの知り合いなのよね？」

そう聞いた瞬間レイダの顔を強張る。

「そう…です」

「リュウって最近ちょっと変らしいの、どう思う？」

エレノアのところにも面白おかしく軍の知り合いから色んな噂が入ってくる。特にリュウとクレイの二人に関してみんな教えてくれる。実際に話すより噂は楽しい物ばかり。

その彼から今、仕事の依頼をされてるのだから。

「わ、私わからないです…」

レイダが本当に泣きそうな顔で自分を見ているのに気付いて話を変える事にする。リュウがもしかするとレイダには嫌われてるのかもしれない。

「そうなの。レイダちゃん、また時間あったら遊びにきてね。花の話が詳しく聞ける人っていないから」

「はい。またきます」

「楽しみしてるから」

店の出入り口まで見送るとレイダは先程より口元をゆるめて笑う。

「ありがとうございました」

頭を下げて歩き出したレイダ。

しばらくエレノアは見送る。

すぐに答える事ができなかった事への罪滅ぼし。ただの自己満足。ふと、彼女の後ろに大きな男が二人現れた。

降りだしそうな雨に足早になる人ごみの中、レイダが男と被って見えなくなった次の瞬間、彼女は消えた。

瞬きの間に男達の姿も掻き消えた。

「レイダ：ちゃん？」

ぽつり。

堪えきれないというように天から水滴が零れ落ちた。

地面の色を少しずつ変えていく…。

囚われ

エレノアが純粹に発した言葉にレイダは鉛のように気分を重くさせる。

『リュウと知り合いなのよね?』なんて、二人のしたしさを表しているようだ。

職も貰う事ができなかった。なかなか世の中は上手くないかもしれないのだ。

今日はもう部屋に帰って家事を終わらせたほうがいいのも知れない。

エレノアの店から離れて雑踏に紛れた。

目の前に割り込むように男が入ってきた。

避けようと身体の向きを変えた瞬間、背中を引かれるようにして脇道へ押し込まれる。

「えっ」

何が起きているのだ?

男達の顔を見ようとした途端に腹部に強い衝撃を受けて意識が途切れた。

「うっ…」

沈み込んでいた意識が、身体の痛みで急速に戻ってくる。腹部に鈍痛を感じた。

自分がどこにいるのか分からない。でも今しがた自分はどこかに投げ落とされたのは確かだ。

恐るおそる瞼を上げたレイダは絶句した。

ここは…ここは…自分が一番来てはいけない所。

体中の血が一気にどこかへ引いていく。自分に与えられた腹部への衝撃もこの場所にいる事を考えると頷ける。

でも、冷静に物事を考えられない。ぎゅっと固く瞼を閉じる。

どうしよう。

「起きな」

不意に背中側から声をかけられる。強張った身体のまま動けないでいると乱暴に腕を捻り上げれる。

「きゃっ」

無理矢理引き起こされて見上げた顔は、ほんのちよつと前まで顔なじみだったもの。

レイダを覗き込んでいた妙齡の女は赤い唇を吊り上げる。

大きく胸元が開いた赤いドレス、それは彼女の象徴。

「あんたみたいな田舎者、買ってやっただけでもありがたく思ってもらわなきゃいけないのに、何逃げ出してんだい」

勢い良くレイダの身体を壁に放り投げる。背中から強く打ち付け

て息が出来ない。

「マリンダ、商品だ。余計な傷付けんな」

横から声をかけられて娼館の女主人・マリンダは鼻で笑いタバコに火をつけた。

恐怖に口を開けないレイダにゆっくりと歩み寄ると、前髪を鷲掴みする。ぎりつと強く力を入れられて顔をゆがめる。

「ここを舐めちゃいけないよ。こっちだって商売だ、お前は所有物なんだよ」

レイダの目に涙が浮かぶ。悔しいのと情けないのがごちゃ混ぜになる。

「ふん、お前みたいなのにもありがたい事に客がいるんだよ。田舎くさい処女が大好きだそうさ。そんな奇特な人はいないよ」

大きくタバコを口に含むとレイダに吹きかけるようにして吐き出す。前髪からはずされた手は妖艶な動きでレイダの頬を撫でていく。

「今日、いらっしゃるんだ。前回はお前が逃げたからね。この日のためにお前を探し出したんだ。準備をしてもらわなくてはねえ」

衝撃的な事を言われて大きく目を見開いたレイダに満足そうに頷く。

「後は頼んだわよ」

呆然としているレイダの前から踵を返すと、後ろに控えていた女

たちに指示をして部屋からでていく。

娼婦たちに与えられる独房の様な部屋を。

指示を受けた女たちがレイダを引き立てると着ていた服に手を伸ばす。

「嫌っ！ やめてっ！」

必死にはがされそうになる服を握り締めていると、後ろから心底呆れたような声が響く。

「あんた何が考えてるの？ お金で買われておきながら逃げ出すなんて、卑怯すぎるでしょう」

声の主を振り返るとそこに立っているのはレイダとたいして変わらない位の少女。

「ここに来る事を了承しているからこそ、マリンド様はあんたを買ったんだから」

彼女の言葉にレイダは言葉を失う。

“来る事を了承する” そうだ、自分はこの娼館で働く事を了承し、両親にお金が入ることを選んだはずだ。

この少女も同じようにここで働いている。

それは、彼女も同じような境遇があるから。だからこそ彼女の言葉は重い。自分勝手に嫌だからという事だけで、殴られてでも逃げ出した。

———卑怯者。

凍りついたように動かなくなったレイダに女たちは手を掛ける。
綺麗に身支度をしなくてはいけない。
今晚は彼女の初仕事になるのだから。

出来る限り誤魔化しておけ

自分の前に立つアングリードのおっさんを見て、今日は我慢をしようと思ったんだ。

ケノワとの約束も自分なりに守ろうとした。

けれど、コレは不可抗力だと思うぞ。大目に見ろよ？

「いいからっ、ライフを出せって言ってるんだよ！」

「ですから、いくら貴方様でも出来かねてしまいます！」

「お前なんか話しても通じねえんだよ！ ライフを呼べ！」

大声で怒鳴りあっている状態でキフィは目の前にいる幼い顔をした女の胸ぐらを掴んだ。

「クレイ殿！」

後から必死に両腕を抑える形でパースが声をかけるが完全にキフィの目はイってしまっていて歯止めが利かない状態だった。

「…ちょっと通してください」

おどおどとする女性補佐官を押しよけて太陽のように明るい色の髪をした男が顔を出す。柔らかい微笑をいつも浮かべている彼が今日はちよっと迷惑そうにキフィを見つめる。

「今日はどうしたんだ、キフィ？」

パースの羽交い絞めから解放されて今度はライフへと詰め寄る。

「どこにいるんだ？」

「はい？」

意図がつかめずにライフは首を傾げる。

キフィはつまらなそうにライフの顔を見つめて口を開く。

「お前のかのー…んぐっ！」

がばっとライフはキフィの口を塞ぐ。キフィよりも体格がいいライフの手の平は彼の鼻共々塞ぎキフィを引きずるようにして廊下の端まで引きずっていく。

苦しそうにもがくキフィを補佐官とパースは見つめた後顔を見合わせる。

ライフはアマゴイの能力者の中でも特に強い力を持ちアマゴイの部門のリーダーをこなす男だ。22歳の若さで周りからの信頼も厚い。

その彼と正反対のキフィが押しかけた上にいつも動揺を見せないライフの焦りはいつも彼を見ている補佐官でも見たことが無かった。

「殺すつもりかよ」

やっと解放してもらい肩で息をしながらライフを見る。

「何しに来たんだ？ 全く、俺はちゃんとエレノアには手配したんだ。これ以上絡まれる覚えなんてない。彼女のことで脅そうと思うなよ」

同じ寮に住んでいるのでお互いの事は知っているがキフィは、先日急に個室を訪ねてきたかと思えば街で花屋をしている彼女の秘密をばらすと脅してきたのだ。

能力者の中でも戦闘系ではないアマゴイなどの能力者は軍の了承が得ることが出来れば軍の周辺に住むことが出来る。

やっこの思いで最愛の彼女と暮らす申請が審査を通り受理されたところに謀ったように奴はやってきたのだ。

階級も不本意だがキフィのほうが上、命令のように彼女の花屋で人を雇うように言われたのだ。

「…脅しじゃない。今回はお前の彼女だって危ないかもしれないんだぞ？ わざわざ教えに来てやったのにこの仕打ち？」

「危ないってどういうことだ!？」

またキフィの胸元を掴もうとしたがかわされる。

「俺をそのエレノアの元に案内してくれ。移動しながら話す。時間がもったいないんだよ」

キフィは踵を返すと廊下を走り出した。ライフは後を追うように足を出した。

「あ、あの！ ライフ殿、仕事は！」

補佐官の声にライフは少しだけ後を向いてこたえる。

「君に頼む！ 仕事なんて二の次なんだよ！」

「そんなあ！」

ライフの補佐官は途方にくれた顔で彼の背中を見る。

「ニライ、俺が二人を追う。お前は出来る限り誤魔化しておけ！」

パースは死にそうな顔で補佐官仲間のニライの背中を叩くと二人の消えた先に向かって走り出した。

エレノアの店に今日は来客が多かった。

「ここに来ていた？」

雨の中現れた彼は不機嫌に言葉を呟いた。いつもは軍服、それも将校制服をきっちり着込んでいる彼にしては珍しく私服だった。それでも普段着と言うよりも正装を着崩した格好だ。

「ええ、さっきまで居ただけど…でも、帰る姿が途中で消えちゃったのよねえ…なんでかな」

「消えた？」

エレノアはケノワの顔が剣呑になったのを見て顔を曇らす。

「何かいけない事あったの？」

「…レイダは…追われてるんだ…」

思わぬ言葉にエレノアは目を見開く。

「追われている？　じゃあ、消えたのって…」

ケノワは頷くとエレノアの前から立ち去ろうとする。慌ててエレノアはケノワの腕を引いた。

「リュウ！　ちょっと、どこに行くのよ！」

ゆっくりと振り返った彼は驚くほど冷たい顔で告げた。

「レイダの所に決まってる」

ケノワはエレノアの手を振り払うと小雨の中、店の外に飛び出していった。

「決まってるって…一体どこなのよ？」

彼女の値段

ケノワは髪を伝い顔にかかる滴に顔を顰めながら走っていた。でもこの苛立ちはそれだけではない。

ここ数年何度こうやって自分はこの王都の街を走っただろう。それは決まって上司のキフィのためだった。彼と一緒に居るようになってからと言うものの“彼のためだけ”に尽くすそれが当たり前になっていた。

しかし、彼女が来てからは違ったのだ。

何もかもが変化していく。

いつも我が儘なキフィが彼女のためにと素直になる事もある。自宅の中は殺風景な出窓に信じられないくらいの花々が並ぶ。：その上、帰宅した時冷たい沈黙を持っていた部屋が暖かいものになり自分を彼女と共に迎えに出てくる。

だからこそこうして彼女の自分は走っているのだろう。

ケノワは通りを確認しながら進み繁華街の裏路地に入った。歩調を緩める。

きつと分かる人が見ればすぐ気付くんだろう。この通りは娼館が軒を連ねる場所だった。この通りはここ最近何度も通っている。

見覚えがある扉の前まで来てケノワはひとつ息を吐いた。

看板に目をやる。レイダを拾う前にこの通りを歩いた時ここから飛び出してきた者をぶつかった。あれこそレイダだったのだ。彼女のいた娼館を調べて驚いたものだ。

路地裏にあるには少し古めかしく豪華な扉をしばらく見つめて押し開いた。

玄関は間口が狭くしばらく進むと一般の家よりも広いホールに出る。そのホールは白い大理石が使われており綺麗な絨毯が引かれている。外観の見た目からすると誰もが驚くだろう。世に言う上流階級の者たちが訪れる娼館という。そのホールを無感動に歩きながらケノワはあたりを見渡した。

来客に気付いた使用人がすぐさまケノワへ近寄ってくる。

「お客様、まだ当店は営業はしておりません。夜間に再度訪問くださいませ」

声をかけてきた男を一瞥すると投げやりに答える。

「レディ・マリンドを呼んでくれ」

「しかし――」

「早く」

食い下がろうとする男にケノワは声を落として命令した。男は何かを感じたのか踵を返して奥へ入っていった。

ホールの奥には絨毯が続く階段があった。

階段は緩やかなカーブを描き吹き抜けのホールの壁の中に消えていく。じっとそこを眺めていたケノワは誰かが後ろに立つのを感じて振り返った。

「この忙しい時に誰かと思えば、貴方なのね…軍服もいいけれどそういう格好もお似合いよ」

マリンドは赤いドレスに気だるげな表情を浮かべて立っていた。きつと世の中には彼女を妖艶という奴もいるだろう。

残念ながらケノワにそんな事を感じることは全く無かったが。

「レイダを返していただこう」

「まあ、もうばれてしまったの」

ケノワの言葉にマリンドは大げさに眉を顰めた。

「そんな事が本当に出来ると思って？ 貴方があの子を隠してしま
うから、私は、余計な手間をかけてあの子をやっと取り戻したとい
うのに」

早口に言うとかケノワの顔を窺うようにマリンドは見る。ケノワは
平然と彼女を見返しているだけだ。

「…とりあえずかけて頂戴」

ホールにあった二組の豪華な革張りのソファにそれぞれ腰掛けた。
ケノワは冷たいブルージェイの瞳でマリンドを観察していた。一
筋縄ではないかない相手だとは思っていたが案の定彼女はレイダのこ
とを連れ去ったのだ。

「…彼女の事については待つように頼まなかったか」

「それは貴方が言った事。レイダはこの娼館に買われ働く事になっ
ていたのよ、それを逃げ出しまつさえ見逃せという、なんという
恩知らず」

マリンドの赤い唇が言葉を紡ぐたびにむかむかする。それを押さえつけるように言葉を重ねた。

「だから、彼女を買い戻すと言っている」

「させないわ。あんな平凡な小娘でも物好きは沢山いるのよ？　まだ店に出しても居ないのにレイダは顧客から求められていた。これから金を生む事が分かっているのにそれを売るなんて事はとてもとても…」

大きく手を広げたマリンドは体を前へ乗り出した。

「それに、貴方に彼女を買い戻すお金を持っていると思えない」

綺麗に口角を上げるとマリンドは微笑んだ。

「・・・いくらだ」

ケノワはマリンドを鋭く睨みつけると聞いた。

「あら、本当に買うの？」

「そう言っているつもりだが？」

不遜に言葉を返す。

「100ヴォルド。ね、無理でしょ」

マリンドはケノワ個人が何もできない若造としか思っていないというのは分かっている。確かにケノワの軍から貰っている給料では

早々出せる金額ではない。

だからこそ繰り返しの場所を訪れて丁重に断りを入れているのだ。

「そうねえ：ああ、いい事思いついたわ」

ケノワの言葉を見無視してマリンドは表情を明るくする。

「あの子が今晚、初仕事なのはご存知？」

誇らしげに言われた言葉にケノワは珍しく驚きの表情を浮かべる。

「知らなかったのね？　そうだろうねえ、レイダを買いに来る貴族様に交渉でもしてみたら？」

立ち上った彼女は見下すようにケノワを見やると立ち上った。

「そろそろいらっしゃる時間、そこで待つもよし諦めて帰るもよし今日だけは許してあげる。ただ、彼を殺そうなんて思わないことよ」

新しいおもちゃを見つけた子供のように言うマリンドは立ち上がりホールを抜けていった。

取り残されたケノワは顎へ手をやり呟いた。

「貴族…様、ね」

ケノワの後ろと階段の上り口には屈強な男が立っていた。
一応見張りを立てるという事か。

彼女の値段（後書き）

10000スラン||1ヴォルド

1ヴォルド||10万円位

3ヴォルドで一カ月生活できます（物価が高いイメージお願いします）

お読みいただき本当にありがとうございます。
感謝です。

籠の中

ケノワが立ち去ってからしばらくすると恋人のライフが店へ走りこんできた。

「エレノア！」

彼女の無事を確認するとライフは力いっぱい抱きしめた。

「ちょっ、どうしたの？」

ぎゅうぎゅうとライフの胸板に頬を押し付けられながらエレノアは訊ねる。

それに彼の後ろには見たことがない能力士官の制服を着た少年が立っているのだ。

「…ライフ、そんな後でいいから確認させろ」

綺麗な金色の髪を持つ彼は冷たく言い放つ。

「そんなってなあ！ 心配させておきながらっ」

「いいから！ エレノアよりも今はレイダちゃんなんだ！」

ライフの言葉を遮るとキフィは言い放つ。

一瞬ライフは彼の持つ気迫に圧倒され、渋々とエレノアを解放する。

「悪い…」

いつもお調子者のキフィと雰囲気が変わっていた。

「レイダってあのレイダちゃん?!」

エレノアがキフィへ聞き返すと彼も幾分表情を崩して頷く。

「さっきまでレイダちゃんが貴方の所に来てただろう?」

「ええ、どうして知ってるの?」

今日はこうやって彼女のことと尋ねてくる人ばかりだ。それも教えても居ないのに彼は来た事を知っている。

「それは、彼がキフィ・クレイだからだよ」

後ろからライフが教えてくれる。

彼がああキフィ：噂よりも士官らしい態度に驚く。そしてこの展開になんとなく納得する。

「サキヨミなのね」

「そうだ、何かレイダちゃんにいけない事起こるんだ。どこに行きたかわからないか?」

「そんな事：リュウに聞いたけど彼はレイダちゃんのところに行くとか」

キフィが眉を上げる。

「レイダちゃんのところに行く？ 何を話した？」

「…レイダちゃんを見送っていたら彼女が消えちゃったって話をし
て…」

「そうか…」

エレノアの話聞いたうえでキフィは瞳を閉じた。

彼の周りの空気が変わる。

きつと彼は能力を使っているのだろう、ライフとエレノアは目配
せをして静かに見守るしかなかった。

「よし」

ゆっくりと瞼を上げるとキフィはつぶやいた。

「視えたのか？」

「…まあね。俺様にできない事はない。ただ…ちょっと強すぎるん
だよね」

言ってみたものの二人が理解できることではなかった。
精度がよすぎる事で時間軸が近すぎると鮮明すぎて良く分からな
い部分出てくるのだ。出来れば一定の距離をおきたい。

しかし、今は近い所を見ないと間に合わない気がするのだ。

最初に見た映像では彼女が乱暴に殴り倒される鮮明すぎる断片だったのだから。きっとあの時見たものは起こってしまったに違いない。

自分が手を伸ばして助け出すことができないのがもどかしい。

「とりあえず俺はケノワとレイダちゃんが居る所に行ってみる」

「じゃあ、行くか」

「え、行くのか？」

相当意外そうな顔で見ていたのだろうライフが少し乱暴に言った。

「ここまで付き合って、はい、さよならなんてしないっての」

エレノアもにっこり笑う。

「そうそう、ライフがそんな奴なら私彼の事好きにならないし」

ライフは、キフィの背中を押す。

「ほら、早く行くぞ。急ぐんだろ」

「ああ、もちろん」

二人が通りに出た途端に大きな声が響く。

「あーっ！ 見つけましたよっ！ お二人ともご自身の職務に戻ってくださいっ！」

「お、やべ。パースの奴追いついてきやがった」

「可哀想に」

ライフは全くそう思っていない声で言った。

後ろから全力疾走で駆けて来るパースをまくように二人は走り始めた。

「お待ちくださいー！」

息を切らしたパースの言葉にエレノアがこっそり笑ったのは秘密だ。

レイダは、自分に着せられた、レイスのついたドレスの端をつまみ大きく息を吐いた。

露出の多いドレスは、大きく背中が開いていてまるで、自分に似合っていない。

男を喜ばせる為だけの布きれだ。

慌しく、自分の身なりを整えていった女たちは今、いない。

独り残された部屋は、今まで自分が入れられていたところよりも何倍も豪華な調度品が並んでいた。部屋の中央には、大きなベッドがこれ見よがしに据えつけてある。

格子の入った窓の側に置かれた台に置かれた花瓶は、ケノワの家にあるように魅力的な色を持っていなかった。とても高い花なのに色あせて見える。

椅子に座るレイダは、諦めの色を濃く浮かべた瞳を、ゆっくり閉じた。

全て望んだ事ではなかったが、自分で、選んだ事だ。

窓の外は、日が暮れ始めていた。

手はぎこちないくらい固く握りしめられている。

洗面器一杯の水でも人は死ねるのだ。

それならば、ここで・・・

この冷たく凍ってしまったレイダの思考は、いつの間にか過去に飛ぶ。

あの頃に戻りたい。

祖父がいて父も母も生まれたばかりの妹も病気などしていない、あの頃に――

あのお屋敷で祖父が育てた花たちの中で、もう一度あの人に会うのだ。幼いあの時の様に、彼は笑ってくれるだろうか。自分に向けて優しく本を読んでくれるだろうか……

「ケノワ様……」

レイダの閉じられた睫のすきまから、涙が零れ落ちた。

笑う男

ケノワは瞼を閉じてじっと待っていた。

ホールが一番いい場所で微動だにしない。

マリンダが許可したのだから自分がここいる事を周りの者は邪魔できない。

静かだったホールがざわめく。

ゆっくりと目を向けると使用人について男が歩いてくるのが見えた。

服装は上等な生地を使っているのが分かる。年齢はケノワの一番上の兄と同じくらいだろうか。

マリンダが見計らったように二階から降りてきた。

「お待ちしておりましたわ。クロックラン様」

「ああ、だが、私も待たされたぞ」

羽織っていた上着を使用人に渡しながら、クロックランといわれた男は、マリンダに答える。濃い茶色の髪と訛りから南部の出身と言うことが窺えた。

「本当に申し訳ございませんでしたわ。ですが、今日はお望みの娘は、きちんと、準備しております」

多くを含んだ言葉が耳につきケノワは、僅かに眉を顰める。

「それと今日は、会わせたい男がいるのです」

ちらりとマリンドの目がケノワを捕らえる。

「ほう、会わせたい娘ではなく？」

「ええ、そちらにいる男」

マリンドが仕草でクロックランを促す。

クロックランはケノワを一瞥すると、落胆した様子で訊ねた。

「誰だ？」

紹介したい、その言葉に彼はきつと自分の好みの美男子を想像したのだろう。

ケノワの顔かたちは、端正なつくりをしているが、彼の好みでは無かった。そして表情の無い顔が嫌味だ。

「この男があの子を唆し、隠していた張本人ですの」

マリンドは楽しむようにゆっくり告げた。

クロックランは、一度は通り過ぎたケノワの顔を再び見た。

「その横暴さだけでも許されない事、しかし、更に娘を買い取ると…」

「なんだと？」

クロックランはケノワのほうへ体の向きを変えて近づいてくる。

「あの娘を買い取るだと？ お前のような若造が？」

ケノワは正装に近い格好をしていても、値段をかけた無駄に野暮ったい、貴族然とした物ではない。それを見抜いて彼は鼻息荒く吐き捨てた。

「そのつもりだ」

短く、それも“貴族らしさ”を前面にだしたクロックランに、彼は怖じ気もせず答える。

「この娼館からあの娘を買い取れると思っているのか？」

「彼女は私が保護する。体を売る、と言われるなら穢される前に買い取るしかないだろう」

「それならば、私があの娘をお前より高値で買い取ってやろう」

マリンダを見ると彼女は、待ってましたとばかりに頬を緩めた。その目は彼女が自分の味方をする事を意味していた。

「マリンダ、あの娘はいくらだ？」

「彼には100ヴォルドと」

「それなら私は、130ヴォルドで…」

勢いよく言った自分の言葉は遮られる。

「信じられない醜態だな」

すつ、と綺麗に目を細めたケノワに、クロックランは一瞬目を奪われ、言われた言葉の意味を理解し拳を震わせた。

「ふざけるなっ」

これでも地方であっても貴族である自分に、対等とばかりの物言いい。

自尊心の高いクロックランには許せぬ発言だった。

「貴様、私を誰だと思っているのだ。ヤサのクロックラン子爵であるぞ」

そうだ、自分はあるのヤサ地方の子爵だ。

この王国の中で一番豊かな資源を持ち国王からの信頼も厚い。地位として王宮の中でも低くない。こんな王都の町人ごときに負けない人物ではないのだ。

「あの娘もヤサ出身だ。この私が同郷のよしみで買い取るほうが、娘も喜ぶだろう。貴様のような、借金を抱え込んでいそうな平民が買い取るより、な」

「…」

何も言わないケノワを勝ち誇った顔でクロックランは見下ろした。

ヤサ出身の平民の娘一人にこんなに執着を見せるのは、そのヤサ地方自体での売春行為が禁じられているからだった。

領地内の民を統治することに長けている辺境伯が、不純な事に厳

しいのだ。領地内外での汚職などしてみようなら一族が次の日には路頭に迷うだろう。

しかし、禁じられるほどに人は求めてしまうのだ。娼館にいるヤサ出身の娘は稀少で高値で取引される。田舎の小娘でも生娘であるだけで価値が違うのだ。

今回など、馴染みのマリンダに情報をもらった時の感動が忘れられない。

目の前で、無言で打ちひしがれる若造を見て一層クロックランは、自分が満足するのを感じた。

「ふうん、それで？」

ポツリと、やけに明るい声がその場に響いた。

それは、これまで会話をしてきた三人のものはあまりにも違って、マリンダとクロックランは顔を見合わせた。

「貴方が、ヤサのクロックラン子爵と言うことくらい最初から分かっている。それで、何が言いたいんだ？」

再び言葉が紡がれる。

その先にいたのは、満面の笑みを浮かべるケノワだった。

先程まで貼り付けていた無表情が嘘のように、そこには明るい快活さがあった。楽しそうに細められた切れ長の瞳、口角など先程と比べるために分度器を準備したいほど緩んでいる。

表情と言うのは、人をどれほど飾り立てるものなのかを悟らせる。先程まで端整で片付けていた瞳を縁どる長いまつげも、綺麗な形で自己主張する瞳もキラキラと眩しいものを感じられた。

自分たちは楽しいピクニックの計画を立てていたのではないかと
思わせる雰囲気、二人はしばし硬直した。

「ヤサ出身の彼女を引き取る事に、貴方の権力が効くというならば
証明してくれるんだろう？」

にっこりと微笑んだケノワにマリンダが、迷惑った顔で口を開い
た。

「なんだか、急に明るくなったわね…いつもこうしていればいいの
に」

「本当にそう思うか？ クロックラン子爵殿？」

その軽い声音にクロックランは、強張った顔を見せる。

「あ…」

何事かを発しようとした彼の声は言葉にはならなかった。

玄関ホールが急に騒がしさを増したのだ。何か乱暴な物音が響い
た後、慌しく足音が近づいてくる。

三人は足音の主を無言で待った。

「ケノワ！」

そこに姿を見せたのは、良く知った顔だった。

いつもへらへらと浮かべている笑みは無く、真剣だ。すぐ後ろに
は何度か顔を見たことのあるアマゴイのライフがいた。

「どうして、ここへ？」

ゆっくりと訊ねるケノワの声はこの場にふさわしくないほど優しく響く。

ケノワの顔を見たキフィは、驚愕し後ずさりしてライフにぶつかった。

——それほどまでに、ケノワの表情はいつもと違う微笑を浮かべていた。

「レ、レイダちゃんがやばそうだと思ってな」

キフィが何とか言葉を返すと、にっこりとケノワは笑い再び、クロックランに向き直る。

「それで？」

ケノワは、クロックランの顔に浮かぶ驚愕の本当の意味を既に見抜いていて楽しんだ様子だ。

「その顔……そんな事が…なぜ」

短い言葉しか紡げぬ彼を見る。

「そんなに驚くか？ 最初からずっと見ている顔ではないか」

実に落ち着いた動作でケノワは立ち上がり、クロックランを見据えた。

「貴方の発言はしかとこの胸に受け取った。ヤサの子爵殿の権限はそこまで大きいとは」

「い、いや、それは…」

けして責め立てる口調で言われているわけでもないのにクロックランの顔色は今や真っ青だった。何度か声の出ない口を動かしていたが、掠れるような声が漏れる。

「…何故、このような所にリュウ家の方が…」

ふうん、と呟きながらケノワは片眉を上げる。

「そんなに私は似ているのか…」

ただ事実を吟味する様子に横から声が入る。

「おい。ケノワ、誰とお前が似てんの？」

キフィが興味有り気な顔でいつも通りぞんざいに聞いた。しかし、クロックランの顔が引き攣る。

「だ、誰に口をきいてるのだっ、この方はヤサを統治するリュウ辺境伯のご子弟だぞ！」

「お前に聞いてないし」

焦るようにして紡がれた言葉に、キフィがムツとした顔をする。何も知らぬ子供に対するような発言で彼の機嫌を損ねたようだ。

「クロックラン殿？　口を慎むのは貴方だ。彼は私の上司です」

クロックランはぎよっとしたようにケノワとキフィの顔を見る。

「そーそー。俺様が上司でこいつが部下なの、おっさん分かる？」

キフィがケノワの隣に立ってにんまり笑う。

しばらくケノワは観察するようにクロックランとマリンドアを眺めていたが、口を開いた。

「家の力を使うのは避けたかったがしょうがない。

クロックラン、貴方の行為についていくつかすぐに調べさせてもらう。ことの裁きについては一軍人の私にはあずかり知らぬ所だが。それから、レディ・マリンドア、貴方についても報告させてもらう。ヤサの身売りされる子女を買うこと自体が、条例を違反しているのだから」

ゆっくりと目を細めるケノワの顔には普段浮かばない笑みが未だに綺麗に浮かんでいた。

「あら、いいのかしらそれで。あの子を売った家族のものも一緒に罰せられるのではなくて？」

マリンドアは心外だとばかりに言い切った。

ケノワの口元が嗤う。

「そのことについては貴女に言われなくても分かっている。彼女の事情については私からも報告させて貰う。余計な心配など要らない」

クロックランを見やると、呆然と立ちすくんでいた。

ケノワは笑う顔とは裏腹にずっと湛えていた冷たい怒りを前面に出して二人を一瞥する。

「――レイダは私が引き取らせてもらう」

ずっと、ケノワは踵を返してホール横切ると階段へ向かった。

キファイが後に続いた為、慌ててライフもその後を追う。

扉

階段を上りながらケノワは一度自分の頬に何かを確かめるように触れた。

昔から喜怒哀楽の表現がとことん下手で、嬉しい時でさえほとんど笑顔を浮かべることができない。

しかし、人と言うのは怒り度合いが限度を越えるといつもと違う面が出てくるものだ。

それがケノワの場合は、いつもの反動のように最高の笑みを浮かべることが出来る。普段が無表情である分、穏やかに笑う彼は異様でしかない。

そんな彼の姿を見たことがあるのは一握りの人間、家族くらいだ。比較的温厚な彼が怒りに飲まれることなど無く、ケノワ自身も今回のマリンダ達の前で微笑んで思い出した。怒りとは、こんなにも自分の中で煮えたぎるものかと。

「なあ、ケノワ」

足早に進むケノワにキファイが無頓着に声をかける。それは先程見た光景を覚えている者にとっては背筋が凍りつくような事だ。勇気がいる。それを気にせずやる彼はそれなりの経験値をつんでいるのだろう。ライフはこっそり後ろで感心する。

「何です？」

ケノワは平然と振り返った。

その顔には先程まであった笑みがもう無くなっていていつもの顔

に戻っていた。

「うげえ、なんだよもういつもの鉄仮面じゃん。あの微笑のままレイダちゃんを迎えに行ってやれよ」

キファイがずばりと言うとケノワが足を止める。

「…これが、普通なのですか？」

キファイが不満げに腰に手を当てる。

「サービス精神が足りないんだな。あの顔が出来るのならば、女の子が怖がらないぜ？」

「…」

ライフにさえ分かるほど、ケノワの眉根が寄せられる。

「あ、それよりも。この扉の先にお姫様はいるからな」

キファイはちょうどケノワが立つ横にあった扉を指差した。

たぶん、元々このことを伝えるために呼び止めたのだろう。ケノワは短く溜め息をつく。

体の向きを変えて、扉を叩く。

「レイダ？」

返事が返ってこずに首を傾げる。

その時ガッシャン、と何かが割れる音が響く。

「あ！ げっ、やば。ケノワ今すぐこの扉開けろっ」

後ろで急に騒がしくなったキフィに、ケノワとライフは途惑う。

「早くっ、俺サキヨミしたんだ。レイダちゃんが自分を傷付けるところ！」

ぎょっとして慌ててドアノブを回すが、鍵が掛けられているのか押しても引いても開かない。

三人で扉を押す体勢をとる。

「どうしてそれを先に言わない」

ケノワが言葉を漏らすとキフィが焦った顔で口を尖らす。

「しょうがないだろうっ、お前のあんな所見たら頭から飛び出してっただよ」

口を動かしながらも扉を押すが嫌に頑丈で動かない。

「蹴破ろう！」

キフィが言うが早いか、ケノワが思いっきり扉の弱そうな所に狙いを定め蹴りつけていた。

ドゴッ、と言う音と共に見事に扉には穴が開いていた。そこを元に扉を蹴り開けた。

「…信じらんねえ。どうなってんの、お前の補佐官」

「だって護衛だろ？ 監視だろ？ 一応あいつ、武術の試験をトツプで出たらしいしさ」

二人の声を無視してケノワは部屋へ駆け込む。

彼女は、窓際の椅子の前にいた。

「来ないでっ…」

その姿は昨晚話した時とは、かけ離れた姿だった。

いつも動きやすい柔らかいワンピースを身に着けている彼女が、その性を曝け出すような体のラインが強調される艶めかしいドレスに身を包んでいる。

その上、その華奢な手のひらにはキラリと光を反射する刃物のようなものが見えた。それは震える手で手元へ突きつけられている。

「レイダ！」

ケノワが鋭く声を掛ける。

びくりとレイダの体が跳ねる。焦点が合っていない瞳をケノワに向ける。

「レイダ、そんなものを持って何をしている」

幾分和らげた声でレイダに諭すように告げる。

「…ケノワ様……？」

聞き慣れた声だと認識したのか、レイダの瞳に生氣が戻り始める。

「そうだ、そんな物離しなさい」

「だ、ダメです…」

レイダは自分に向けたガラス片という刃物を放さない。

「何がダメだ？」

少しずつ刺激しないように近づきながら訊ねる。

「わ、私なんかが居ちゃダメなんです。故郷で、家では何も役に立たない子供で、本当に貧しいのに。妹の事を助けることもできない。自分でここに来る事決めておきながら諦め悪くて…この人達に迷惑掛けちゃったし。嫌な思いさせて。でも、私はここで生きなきゃいけないって、それは、今の私には…堪えられない。だから、ここで終りにするんです」

自分に言い聞かせるようにレイダは言った。

「そんな事はさせない。うちにいれば良い」

ケノワは少し歩を進める。レイダまであと二歩ほどしかない。近づいたケノワにはレイダの手のひらに滲む血が見えた。

「それこそ、ダメです。私は役立たず、ケノワ様の邪魔ばかりしてしまいます。いいんです、これで…」

レイダの手のひらに力が籠もり指先が震える。
静かにレイダの拳から緋色の滴が零れ落ちる。

そんなはず無い

「レイダちゃん、そんなはず無いって」

後ろからいつもの声でキフィが言う。

そのことでレイダも初めてケノワ以外の人が居たことに気付いたようだった。

「レイダちゃんが来てから、ケノワがどんなに生き生きしてるか分かるか？」

「そんな…」

「こいつ本当に変わったんだから。表情とか表に出るようになったし、行動力もでたし。レイダちゃんいなかったら困るって」

「そんな嘘要らないです。私なんか…」

レイダは信じていない声で答える。

「だったら、ケノワがエレノアさんに仕事を頼んだのは誰のため？」

「キフィ…」

ケノワが全てをさらす彼に非難の声をあげる。

「そうだよな、俺を脅してまでお前たちがエレノアの花屋の仕事を欲しがってたくらいだし」

ライフも便乗するように告げる。

「え？　嘘……あっ！」

動揺したレイダの手元がぶれるのを見逃さずケノワはレイダに手を伸ばす。ガラス片を持ち奪い取る。

ケノワはそれを投げ捨てるとレイダに近づく。

後ずさろうとしたレイダの両頬を優しく包むようにして呟いた。

「役立たずではない。ちゃんと家に育てられた花が並んでいる。家に居て良い証拠だ」

「ケノワさま」

レイダの瞳に一気に容量を越えた涙が浮かぶ。

子供のように涙を溢すレイダは縋りつくようにしてケノワに抱きついた。

ケノワの手は優しさを込めた手つきで彼女の頭を撫でる。

それは大事な物を慈しむ手つきで。

目立つ士官の目撃証言を集めながらたどり着いたそこは、これま

での人生で訪れる事は一生無いと思っていた場所だった。

立派な娼館の扉を決死の覚悟で開いたパースはその奥に広がる光景に愕然とする。

その見たことも無いような大理石の廊下の先に立っていたのは、ここにいないはずの上司ケノワ・リュウだったのだから。

彼が自分に視線を向けた事で慌ててそちらへ向かう。

「リュウ補佐官、何故ここにいらっしゃるんですか？」

私服の彼に敬礼しつつもパースは尋ねた。

「…私用だ」

彼の後ろに男物の上着を着せられた少女が立っているのを見つける。

怯えるように彼の袖口を握り締めていた。

補佐官の彼女だろうか？　こんな所に？　いや、その前に更に後ろにいる彼らのほうが問題だ。

「クレイ殿、それとローガン殿も職務中に軍敷地を抜け出すなんて何を考えていらっしゃるんですか」

んべえ、と舌をだしてキフィは素知らぬ顔だ。

ローガン殿と改めて呼ばれたライフは苦い顔で頭をかいている。自分の権力ではこの二人を懲らしめる事が難しい。

「パース副補佐官」

気まずい雰囲気の中、最初に口を開いたのはケノワだった。パー

スは彼が助けを出してくれた事に感謝した。

「この二人のことについて報告は私が行なう。特にキフィの事についてには」

さらりと能力士官を呼び捨てにして言ってもらえた言葉に涙ぐみそうになる。これで胃痛から逃れられると。

「その代わり、頼みたい事がある」

「はい。何でしょう？」

もうこの際、この能力士官がらみのことではなかったら何でも出来る気がして答える。

「これから、ロット・リュウという貴族の家に行ってくれないか？」

聞いた事のある名前にキョトンとする。

「え？ あ、それって大貴族のリュウ辺境伯様の家では…？」

「ああ、私の兄の家だが」

「はあ、リュウ補佐官のお兄様の家…」

パースはケノワの言葉を反芻して硬直する。

今までケノワの家系が貴族と言うことは知っていた。

自分より六つも年下で正補佐官をしているのだ。しかし、同じリュウ家でも分家だと思っていたのだ。こんな軍の特殊な所に居ていい家の人間ではない。それも上司が問題児の彼である。

「パース副補佐官？」

「か、かしこまりました。でも私のような者がお伺いしても？」

「そんなに気負わなくていい。これから渡す書簡を家のものに渡し
てもらえればいい」

ケノワは何気ない素振りで手元にあった用紙に何を書き込んでパ
ースへ手渡す。

「確かに預かりました」

背中に冷や汗が出ているのを感じながらパースは娼館を出て、貴
族の邸宅が並ぶ区域へ歩を進めた。

心の中では今日は厄日だと呟いていたのは間違いなかった。

ケノワの書簡を受け取った兄の側近は数人の男を連れて現れた。

その彼らにクロックランの調査と、マリンダの罪を報告しケノワ
は娼館を後にした。

キフィとライフについては大人しく軍に戻る事を約束させて返し
た。

本来ならばすぐに彼らと共に幹部として報告をすべき所だったが、
今回に関してはレイダを優先しようと決めた。

キフィに関してはライフがある程度の説明を行なっておくとの保障つきだ。

これが本来の能力士官の姿なのだとかに納得しつつ引きずられる様にして連れて行かれたキフィを見送った。

風

娼館から出て歩き出してもレイダの小さな指はケノワの袖口を捕らえたままだ。

雨は一通り降った後で地面を濡らしていたが、雲はなくなっていた。

アパートメントの部屋に戻るとレイダをリビングのソファへ座らせる。

消毒液と包帯を手隣に座ったケノワはレイダの横顔を見つめた。レイダの顔は憔悴していた、それでも落ち着かないのか膝の上で何度も傷ついていないほうの手のひらを擦っている。

「レイダ」

名を呼ぶとレイダは、不安げに顔をケノワに向けた。その瞳の中に一瞬浮かんだのは、怯え。

「…はい」

震える声を意識したのかレイダは口元を押さえる。

その手を取ると脱脂綿に消毒液を浸しながらケノワは口を開いた。

「これからは、もう追われることはない。全部話をつけてきた。しかし……今回の事は、ヤサの検察に報告する事になる。辺境伯の力を借りたからな」

レイダの瞳が大きく見開かれる。

「あ…」

青ざめるレイダをいつもの無表情で見つめる。

しかし、レイダの手のひらを握りしめる力は強まった。

「レイダが、売春行為の為にこの王都にその身を売られてきた事は知ってる。しかし、ヤサではそれがどれほどの罪か分かっているだろう」

小さく頷くと擦れた声が何とか言葉を紡ぐ。

「…ケノワ様は私がヤサから来たって分かってたんですか…？」

「ああ、その言葉の訛りは間違いなく実家のある町のものだからな」

「そう、ですか…」

何かを期待するようにしていたレイダの瞳は揺れる。

彼女の震えが繋いだ手から伝わり、ケノワは安心させるようにゆっくり告げる。

「レイダ、今回の事でレイダの両親が責めを受けることは無いはずだ。そして、レイダも…困窮する生活でどうする事も出来なかったんだろう？ 辺境伯にもそう伝えてある」

「ありがとうございます。…ロット様にもご迷惑を掛けてしまったんですね。」

本当に、私は、リュウ家の方に迷惑ばかり掛けてしまう…ごめんなさい」

自分の情けなさにやっと治まっていたはずの涙が再び零れ落ちる。

「泣いてばかりだな…そうならないように行動してきたはずだが」

少し呆れた声を出し、ケノワの指がいつかののように頬を流れる水滴をぬぐっていく。

「エレノアのところでも働けるように話についているから、体調が戻ったら行けばいい」

「帰らなくてもいいんですか？」

途惑ったようにレイダは訊ねる。

ヤサからの調査があるのなら少なからず追いつかれるものだと思うっていた。

「帰りたいなら引き止めないが、先程も言った通りこの家にいて構わない」

言葉とは裏腹にケノワの両手はレイダを引き止めるように触れる。それは優しく傷ついた手のひらもなぞり傷を癒していく。

「本当ですか、嬉しいです。私、あのお花屋さんが大好きでいつも行ってたんです。働けるなんて」

「その顔のほうがいい」

泣き顔から嬉しさににっこり笑ったレイダに、ケノワもゆっくりと微笑する。本当の心からの笑顔。

それを真正面から見てしまったレイダは、頬が一気に熱くなるのを感じた。

「わ、私もケノワ様の笑顔が好きです」

なんとか答えると、ケノワはレイダの頭をゆっくり撫でた。

その顔には過去に妹たちに見せていた愛情とは違う物が混じっていた。

翌朝。

いつもより2時間以上早く出勤し、提出すべき書類と事後報告用の報告書をまとめた。

キフィとライフが脱走した件とキフィが統括の助手たちを振り切って仕事を放棄してきた事について直接報告（謝罪）に行く必要もあった。

キフィはいつもと同じ時間に寮から追い出されて出勤してきた。
早速、行動予定を報告する。

「げえ、何それ。ケノワが報告書を書いてんだからさ、おっさんにわざわざ会いに行かなくてもいいじゃん」

とても不満そうにキフィは言ったが、ケノワはいつもの調子でキフィを連れて行く時間の調整をする。

「昨日は、抜け出さない事を約束してましたよね？」

「…事情が事情だからいいんだよ」

「そこは認めますが、オトナとしての責任ある行動が必要なのです」
淡々と言われてキフィは机に頬杖をつく。

「まあ、俺はどうせ喋んなくていいんだろうから良いけど――」

「良くお分かりで」

キフィが喋るとろくなことが無いので、重要な所ではケノワが簡潔に話すのが一番だ。

「レイダちゃんは大丈夫なのか？」

「今日から花屋に行くそうです」

「そうか、ライフを脅した甲斐があったな」

満足そうに微笑むキフィを横目で睨む。

「あなたという人は…」

「あ、なあ。そういえば、お前が似てるのって結局誰だったんだ？」

相変わらずそこでは興味津々な顔で自分を見るキフィに答える。
答えないと仕事が進まないのだ。

「父です」

「へえ、何だっけ？ ヤサの辺境伯だっけ」

「それは兄です」

クロックラン子爵が急に顔色を変えた理由それだ。

顔かたちが元々、父に似ているのだ。

そして家督を継ぐ長兄も父に似ている。表情を取り繕わないケノワに比べて、いつも彼らは微笑を浮かべ領地内の全てを仕切っていた。

リュウ家は望めば国内1の富を手に入れることが出来るが、欲が全くといっていいほど無かった。領地内にほとんど全て還元をしている。そのため、家の者は王都にいる貴族のように贅沢をする事を知らないのだった。

贅沢な家など持ちたくない、長兄以外は宿代わりにケノワの家に押しかけてくるほどのだから。長兄も便宜上、屋敷を持っているのだ。

そうやって領地を治めてきた家の息子であるケノワを目の当たりにしクロックランは動揺したのだろう。

「ふうん。王族とも親交があるんだろ…」

先ほどのまでの体勢を崩さないまま手元にあった資料を拾い上げていたキフィが気の無い答えを返す。

「貴族や王家を…怨みますか」

王族の命によりこの軍に縛られる彼について尋ねてしまった。

「なんで？ お前を怨むのはオカド違いだろ。ケノワはケノワなんだからそれでいいんだよ」

いかにも彼らしい答えに思わずケノワも頷いていた。

「だからこそ、お前がアングリートのおっさんとライフの所の上司に叱られるんだろ？」

急に頭痛を感じ、溜め息をつく。

これでこそ、ここでの生活だ。

「あなたもその運命共同体…いや、本体ですよ。ほら、行きましよう」

まとめた書類を手に立ち上がる。

昨日、結局こなせてない仕事をさせるためにも彼を引きずっていいくしかない。

「あゝ俺、超腹痛いんだけど」

「では、私が捌いて見て差し上げましょうか？」

腰に携帯していたナイフを手に取るとキファイが引き攣った笑顔で立ち上がる。

彼を従わせる手段など熟知しているのだ。

いつの間にか居ついてしまう猫のように、この明るい風を持ってくる彼女は自分の中に無くてはならない存在になった。これまでの生活とは違う物が見えてくる。

突然転がり込んできた少女といつまでたっても騒がしい上司との毎日が続くのだ。

こっそり覚悟を決めて廊下へ出る扉を開ける。

廊下の窓から強い風に乗ってそれは飛び込んでくる。いつの日かみたレイダが手にしていた赤い花びら。

——Wind flower

風（後書き）

1章はここまで。

お読みいただきありがとうございます。

2章もよろしくお願いします！

兄

ケノワは、いつもの無表情にそこに立っていた。

目の前の人物が、この王都レアムドザインでそれなりの人物と分かっていてもその態度はいつも変わらない。

「やあ。久しぶりだな、この前は急に書簡を寄越したと思ったらそれが告発だとは、ちよつと意外だったな」

ケノワが訪問してきたと聞いて喜んで出てきたのはケノワの兄、ロットだった。

確か今年三十路だったはずだが、落ち着きの見えない兄だ。

それは身内にしか見せないものだが、リュウ家独自のこのテンションがケノワにはついていけないのだった。

これからのことを考えていつも以上に表情がなくなるのを感じていた。

レイダを娼館から連れ出して数日経った今日、急に軍へリュウ家の使いが姿を現してケノワへ招待状が届けられたのだ。

確かにケノワから訪問しておかなくてはいけないと思っていたが、招待状を軍に通してくるというのはさすが兄だった。ケノワの性格上、極端に家族との交流をしたがらないので催促されないと足が向かないのである。

貴族から通された招待状、それも当日付けだったら即そちらへ送

り込まれることが計算ずくでの行為だった。

残業もさせる事無く軍から送り出されたケノワはその足で王都に集まる貴族たちの集まる区域へと歩いた。

帰りしなキフィがずるいと口を尖らせていたが、内心まだ彼といった方がマシだとケノワは思っていた。

貴族の住むその家も贅沢を尽くした門とその奥に大きな建物が見えてケノワは辟易していた。

それらと同じならびにある兄の家もやはり大きな門構えをしていた。

他から見ればきつと質素といわれる類の建物だろう。

けれど、そもそもその場所に屋敷を建てざるえなかった堅実を好む兄の僅かな抵抗を読み取った。

「ほら、こっちに座りなさい」

身内しか通されないリビングに入ると、大きなソファに腰掛けながらロットはケノワに対面する所を勧めた。

流れるような動作で使用人が現れて二人の前にお茶うけと紅茶が出される。

言われるがままにケノワが座ると、にっこりと兄は笑う。

自分と同じ淡い栗色の髪に母に似た黄色がかった緑色の瞳が嬉しそうに細められている。

「なんで、例の大事な彼女は連れてこないんだ？ 出し惜しみ？」

単刀直入に切り出された言葉にケノワは口に含んだ紅茶を吹きそうになった。決してロットには悟られない程度に抑えたが。改めてゆっくり紅茶を飲み下して口を開く。

「：働いているので」

肯定も否定もしない答えを返した。

ふうん、と呟くと組んだ腕から顎の辺りを触りながらケノワを観察する。

「ちゃんと紹介してくれないなんてまったくつれないな。ケノワの彼女だ、きっと可愛い女の子なのだろう？ それに同じ王都に住んでいるのだから普段からもう少し私を頼ってくれてもいいと思うんだが」

「いいえ、そういうわけには…」

弁解を試みようとするケノワの言葉にかぶせるようにロットは続ける。

「あ、そうそう。リアも嘆いていたぞ、お前が全く顔を見せないとな。

まあ、リアの勢いは凄いからなかなか会いに行きづらいのはわかるがたまには顔を見せるべきだよ。あいつの所の次女はもう二歳になって一人で歩いているそうだ。家の子もあと少しで歩きそうなんだ、後で見に行ってくれよ。可愛いぞ」

「はあ」

曖昧な返事を返したケノワを気にする事無くロットは口を開く。

「そういえば、例のクロックランだが、彼は私と同期で上級学校と大学校を過ごしたんだ。いやはやあんなに腐った奴になるとは。い

や。私も薄々は気付いていたんだが、なかなか全容をつかむ事が出来なくてね。お前のおかげでクロックラン子爵家の汚職や売春行為を摘発できたよ。嚴重に処罰を行なった」

「ありがとうございます」

急に真面目な話をされて礼を告げると同じ流れで全く別の話題が飛び出す。

「いや、礼を言うのは私の方だ。感謝するよ。それよりも、今日はこの家で夕食を食べていけないか？ 妻や子供達もきっと喜んでくれると思うんだが。是非そうしてくれ」

いつものことだが、兄のペースで進む会話に調子を狂わされまくったケノワはゆっくりと首を横へ振った。

「辞退します」

「どうして、一人暮らしなのだからたまにはおいしい料理も食べるべきだと思うんだが」

兄はやつと会話の速度を落としてケノワを見つめる。

そして、急に一人納得した顔で頷いた。

「ああ、そうか。彼女が手料理を作ってくれるのか。そうだよなあ、この屋敷の者の料理よりきつと愛する彼女の手料理が数倍おいしいはずだな」

自分の説に、満足そうになっことり笑っている兄を前にケノワは頬が引き攣るのを必死に押さえていた。一瞬レイダの過去の失敗作が

脳裏をよぎったのだ。

折角の長話攻めから逃げられる唯一のチャンスだ。

ここでこの会話を今、覆す訳に行かずにケノワはゆっくりと息を吐いた。

いい材料になり過ぎないものを彼に与えるしかない。覚悟を決めて言葉を紡ぐ。

「確かに…彼女と夕食を食べなくてはいけないので…」

事実を抽出して告げる。嘘は言っていない。

「そうか。本当に彼女と仲良くやっているのだな。ケノワから恋人の事が聞ける日が来るなんてうれしいな」

いやまあ良かった、と呟きながらうんうんと頷いている兄から、ケノワは今すぐ回れ右で逃げ去りたい衝動を改めて覚えた。

きっと普段の演習より数倍いい動きで綺麗に撤退できるだろう。

ゆっくりと目線を外へ向ける。

比較的早い時間に仕事を切り上げてきたので今やっと夕暮れの朱色が群青に攻め入られている所だった。あと半時もすれば全て闇に包まれるだろう。

今日は雨季にも関わらず午後から晴れていたなと全く別のことに現実逃避をする。

「ケノワ」

急に現実呼び戻されて、ケノワはそちらに目線を戻す。何かを話しかけられていたようだ。

「？」

「だからな、今日は彼女が働いているのなら迎えに行くのかと聞いている」

兄の言葉で彼女への気遣いを見つけて、ケノワは頷く。

「そうですね、迎えに行こうかと思いますが」

「そうか：それなら暗くならないうちにお前を帰さなくていけないな。しょうがないか：今度は彼女を連れてうちに来るんだぞ。一人で来たら私が直々に迎えに行つてやるからな」

冗談に聞こえない言葉にケノワはまた曖昧に頷いた。

レイダを迎えに行くという口実を得てケノワはロットからの拘束を解除された。

帰りに彼自慢の息子、つまり甥を眺めた。

小さくて丸い生き物はコロンとベッドで寝息を立てていた。以前の経験から起きていたらきっと無表情のケノワに泣き叫ぶ所だろうから、心底安心した。

兄（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
読者登録も感謝感激です！！

これから第二章になるのでよろしくお願いしますね。

外堀

ゆつくりと飲食店が並ぶ通りに向けて足を運ぶ。

軍の大通りの裏通りがケノワのアパートメントなのだが、少し遠回りにそちらへ向かう。

それは嘘から出た真実なのだが、レイダを迎えに行こうと思ったのだ。

いつも仕事が先に終わるのはレイダのため、彼女が家に居る時間にしか帰宅した事がない。

今からケノワが行けば丁度良い時間になるだろう。

ケノワがレイダの働くエレノアの花屋に顔を出すと、店じまいしていたレイダが驚いた顔で出迎えた。

「どうしたんですか？」

当然の反応にケノワは曖昧に頷く。

言葉が出て来ない。

どうやらロットショックはケノワの中でまだ続いているようだった。

奥からエレノアが出てきてケノワを見止めると嬉しそうに笑った。

「お迎えにきてくれたのね。いいわよ、今日はこのままレイダちゃん上がっちゃって！」

「え?! 良いんですか？」

「いいの、いいの。こんな事滅多に無いと思うから帰っちゃいなさい」

エレノアはしたり顔でレイダの肩をぽんぽん叩く。

「あの、すぐに準備します」

レイダが慌ててエプロンを外しながら奥へ荷物を取りに行く。
残ったエレノアと目が合う。

「…悪いな」

「いいわよ、このくらい。意外にリュウも優しい事するのねえ」

意外の意味が分からずに何も答えずにいると、再びエレノアは続ける。

「レイダちゃんに意地悪したら、この私が許さないからね。あんただと思って同棲だって許してるんだから」

「それは…」

母のようなその言い回しは違うんじゃないかと思ったが、レイダが戻ってきた事で続けるのをやめた。話の意図を読みながら会話するのが面倒くさい。

「お待たせしました」

「急がせたな」

「いいえ」

レイダが嬉しそうに微笑んだのを見て歩き出す。

「エレノアさん、お疲れ様でした」

「はい、また明日ね」

レイダがエレノアに手を振ってケノワに追いつく。

何気ない仕草でレイダはケノワの手のひらに自分の指を絡ませた。あの一件からレイダはケノワと歩く時に手を繋ぐようになっていた。ケノワ自身、嫌なものでもないものでそのまま彼女の手を引く。実際、手を繋いでいると彼女との歩幅の差で逸れ気味になる事も、彼女を見失う事もなくなったので便利だった。ケノワのぬくもりを確かめるように手を繋ぎなおしながらレイダは訊ねる。

「あの、今日はどうしたんですか？」

隣りを歩く彼女を見ると少し上目使いに自分を見上げていた。

「…兄の所に行っていた」

「ロット様のところですか？」

レイダはすぐにピンときたのか繋いだ指に力が籠もった。

「ああ、ただの世間話をしてきただけだ」

「そうなんですか…この前の事に関してではないんですか？」

「その話は話の一割もしてないな」

先程までのことを思い出してウンザリした。

彼もレイダとの会話のように何も余計な事を考えずにゆっくりと
思っている事をそのままに言葉が交わせないものだろうか。

「気にすることは無い」

レイダの指先を握り返しながらゆっくり告げるとレイダは頬を染めて頷く。

「はい。ありがとうございます」

アパートメントに帰るとそのまま手を洗い、簡単な夕食を作る事にする。下味をつけていた肉に火を通し、スープを別の鍋で作る。

そして包みに入っていた容器を開けた。

ロットの妻は夫の半分も喋らない、つまり普通の会話量なので少しだけケノワとの会話が成立した。事情を察した彼女から夕食の足しにと一品分けてもらった。

「わぁ、これはなんですか？」

レイダはケノワが皿の盛り付けたその一品に目を輝かせる。

「譲ってもらった。パイ生地の上にミートソースと具を載せてオーブンで焼くとすぐできる料理だ」

「凄いです!」

その『すぐ』ができないレイダは初めて見る食べ物に興味を示している。

兄のあの反応からするとレイダを料理上手と判断しているようだった。現在、少なくとも普通の料理を作れるように仕込んでるところだが…。

それを温めながら既に出来上がった他の料理を盛り付けていたレイダに告げる。

「今度作り方を教える」

「本当ですか。王都の料理も教えてもらえるなんて嬉しいです」

レイダがにっこり笑う。

彼女はケノワが教える料理を一つ一つ書き残しているようだった。上手に作れなくても挫けずに作り続ける彼女はなかなかのものだと思ふ。

ゆっくりとレイダと食事をしながら兄からの申し出を断れてつくづく良かったと穏やかに思ったケノワは、それが何を意味するのか分かっていくのだろうか。

じわりじわりと外堀は埋められている。

レイダの態度に、ロットの言葉に、エレノアの忠告に、それはもしかすると既にケノワの心の中まで納まっているのかもしれない。

蝶と葡萄と木苺（上）

それは、帰り道だった。

今住んでいる自宅と働いている場所はそんなに遠くない。

大きな軍の前の通りと、それに並行する通りそこを垂直に横切る通りでレイダは働いている。

日が暮れ始めた頃、いつも通りに店を後にして通りを歩く。

いつもなら早足に大好きなケノワが居る家に向かうのだが、今日は少し違った。

雨季に入っている事で傘が行き交う中をレイダは慎重に歩いていた。

帰りしなエレノアが多く買いすぎた果物を分けてくれたのだ。

それはレイダが見たことも無い果物でどの部分が食べられるのか想像がつかなかった。エレノアはお菓子にするとおいしいと教えてくれたけれど、料理がとことんダメなレイダには到底おいしいものに出来そうになかった。

「ケノワ様ならできるかなあ」

料理の基本を教えてくれているケノワだが、彼が器用にお菓子まで作る事が出来るとは思えなかった。

もらった果物の強度が分からずレイダは慎重に歩いていた。

何度も立ち止まって手元を確認していたレイダは、偶々横に目線に移した。

人の邪魔にならないように道の端に寄っていたので何かの店の前

だった。

そこはガラス張りのショーウィンドウで覗き込むことが出来る。そして、レイダの目が一点に引きつけられた。

ガラスに擦り寄るような形でレイダはそれを見つめた。

「：蝶」

ガラスの先にあるのは、蝶の装飾が付いた綺麗な器だった。透明なその器には色が少しだけ差し込んでいる。

「綺麗：」

レイダはじっとそれを見つめた。

蝶が今この器に降り立ったばかりのような精巧さに魅せられた。

そして自然とレイダの袋を持っていた手は握り締められたまま胸元の前に寄せられる。

その仕草は何か大切な信仰を持つ敬虔な信者のようなものだった。

実際にレイダにとっては蝶という生き物は他の生き物の何倍も意味があるモノだった。

その蝶が綺麗な硝子になり永遠のものとして目の前にある。

手元にあつたらどんなに素敵だろう。

けれど、見るからに高級感がある店だった。

器の横にひっそりと掲げられている値札は10000スラン、つまり1ヴォルドもするのだ。自分の給料の実に三分の一もする。とてもじゃないけれど手に入れない。

「そんなに欲しいのか」

不意に背後から声を掛けられて、レイダは振り向いた。

「ケノワ様…」

思わず空を見上げる。

傘の端から見えた空は既に暮れており自分が相当長い間この場所に居た事を示していた。彼も仕事帰りに通りがかったのだろう。手には二人分の食材を買い込んだ袋を手をしている。

「私だってよく分かりましたね」

思ったことをそのまま告げると、ケノワはたいした事でもないように首を振った。

そっとレイダの隣りに立ったケノワは彼女がそうしていたようにガラスの中を覗き込んだ。

「何を見ていたんだ」

レイダは告げるかどうか悩んだが、口を開いた。

「…あの蝶のついた器です。まるで本物のようで綺麗だって」

視線を移して眺める。

「確かに珍しい品だな」

ケノワがそう答えつつも最後に価値は良く分からないが、と呟いた言葉もちゃんと聞こえた。

レイダも分かっている、自分はきっと蝶だからこんなに興味を示しているだけだと。

「ケノワ様、帰りましょう」

口元に笑みを浮かべて促すとケノワは頷いて二人家路に向かい始めた。

二人がちょうどアパートメントにたどり着いたタイミングで、小雨が大降りに変わった。

窓を打ち付ける大粒の雨の音をBGMに夕食をとり終わった所でいつもならしばらくソファでぼんやり休んでいるレイダがテーブルから立ち上がる。

そのまま自室として使っている部屋へ入り袋を手にして出てきた。

「ケノワ様、今日エレノアさんにこれをいただいたんです」

そういつて差し出したそれをケノワは眺める。

レイダの指はおそろのおそろの袋から取り出していく。

それは、レイダの両手いっぱいに乗る。

細い枝のような蔓の支えを元に紫色の小さな粒をたわわにそれぞれ実らせていた。ぷりぷりと二十、三十と小指ほどある実はレイダからするとなんなのかが分からない。

「あの…これってなんですか？」

実は名前もまだ知らなかった。

エレノアは皆が共通で知っている果物として「コレあげるね」と自分に手渡してきたのだ。

あまりにも知っていて当然そうな顔だった為、聞くタイミングをなくした。

「葡萄」

「ぶどう…?」

短く答えてくれたケノワの言葉を繰り返す。

「ぶどうはどうやって食べるものなんですか?」

「洗って皮をむくと食べられる」

ケノワは馬鹿にも呆れもせずと答えてくれたが、皮ってどの部分だろうと首を傾げているとケノワも立ち上がりレイダの手から一房葡萄を取る。

水道へそのまま持っていくと水でケノワが葡萄の実を洗っていく。ぽん、と一つ水の勢いで枝から弾けとんだ丸い実にはレイダは目をむく。

「け、ケノワ様取れちゃいましたよ?!」

「問題ない。そのまま皮むいて食べていい」

認識としては全部がくつついていて一つの果物と思っていたレイダは思わず手にしていた丸い実を見つめる。

「この皮ですか…」

「取ってやる」

途方にくれた顔をしていたのだろうケノワが葡萄の本体を台の皿に載せて手を差し出す。素直に渡すとケノワが枝が付いていた部分に器用に切れ目をつけてするりと薄い皮をむきレイダに差し出す。

「中は白いんですね」

紫色の皮の中から少し透明で緑がかった実が出てきて感心する。初めて食べるそれにわくわくしながら口に含む。ほんのり甘い果汁が広がり思わず顔が緩むのを感じた。

「中に種がある」

そういわれたタイミングで歯がコリッと小さな粒を捉えた。苦味が広がって、慌てて口の中から種を取り出した。うん、凄くおいしかった。

視線を感じて見上げると、目線で感想を聞かれていると分かり頷く。

「おいしいです」

「そうか」

彼は言いつつ貯蔵庫の扉を開けると、何かを引っ張り出した。

「これもある」

それはレイダも知っている果物だった。小さな頃、祖父がよく森に花の採取に行ったついでに摘んできてくれたもの。

「木苺ですね！ 買ってくださいったんですか？」

勢いで訊ねる。

だって、ケノワは自分ひとりのために果物、それも木苺などを買う性格じゃないのだから。

「安かったからな」

「嬉しいです」

嬉しくて微笑んだが、ケノワは少し微妙そうな顔になる。何か、気に入らない事があったのだろうか？

「この両方を食べるのは大変だな」

言われて、双方を見ると確かに二人分には多すぎる。食べきる前にどちらか腐らせてしまいそうだ。

「…そうですね…」

蝶と葡萄と木苺（下）

どうしようかと考えていたレイダの顔にぱっと明るさが戻る。

「あ！」

急に叫んだ事でケノワが手を止めてレイダを見るが先は続かない。黙り込んだレイダをよそにケノワはとりあえず葡萄の皮をむいておくこと優先して作業する。

「私、作りたいものがあります」

一瞬無表情がさらに固まったが、ケノワは息を吐いて促す。

「何を？」

「私にも一つだけ作れるお菓子があるんです」

ちよつと自慢げに言われた言葉にどう反応したものかケノワは逡巡する。

ケノワの杞憂の理由は十分にお互い分かる。

今まで散々失敗してきたレイダだからだ。

「だ、ダメですか…？」

生でも食べれるこの食材を生かすも殺すも今ここはケノワの判断に任せられる。

「本当に、作れるのか？」

苦渋の選択をしたケノワの声にレイダが大きく頷く。

「はい、ちゃんとつくれます」

ケノワは更に訊ねたい本当か？　という言葉を飲み込んだ。

「じゃあ、ケノワ様はお部屋でお仕事でもしてください」

レイダはそういうなりケノワを部屋へ追い払った。

当然キッチンの崩壊を防ぐために見張ろうとしていたケノワは抵抗しようとしたが、勢いに負けて持ち帰っていた仕事に取り掛かった。

レイダはケノワが大人しく部屋に入ったのを見てにっこりと微笑んだ。

これだけは自信があるのだ。

両親だって食べてくれていたのだから、大丈夫。

彼がむいてくれた葡萄と木苺をボールに移して砂糖をたっぷりまぶした。とりあえず、半分は生で食べた方がいいというケノワの意見を尊重して使うのは半分だ。

少し時間を置いて水分が出たところへレモンの汁を入れる。

全てに馴染ませてそれを鍋に移して火に掛けた。

きっとケノワが居たら頬を引き攣らせていただろう。

一人で火を扱わせるなんて…と。

でも、大丈夫だ。

あとは色味を見ながらそつと材料を混ぜ込むだけなのだから。

仕事に区切りをつけて自室の扉を開けた。

数時間経っていて既に深夜。

レイダから結局、声を掛けられる事は無く実際に『お菓子』が出来たのかは不明だ。

部屋から出てリビングに入るとソファに丸くなって寝ているレイダを見つける。

「レイダ、起きなさい」

昼は暖かくても夜は冷えるものだ。こんな所に寝ていたら風邪でも引かかねない。

揺すり起こすと目を擦りながら顔を上げる。

「ケノワ様…？ …あっ！ もう何が作ってあるのか見ちゃいました？！」

眠る前の記憶が一気に覚醒させたのか声を上げる。

「？ まだ見てないが。失敗でもしたのか？」

「失礼ですね。ちゃんと作りましたよ」

拗ねて唇を尖らせると、レイダは起き上がってキッチンへ向かう。

「もう出来ていると思います」

レイダが、トレイに載せてリビングに持ってきたのはグラスだった。

ガラスで出来たそれには綺麗な色味、赤い粒と薄緑の粒が浮かんでいた。

「ぶどうと木苺のゼリーです。明日まで冷やして朝からたべてくださいね」

それは、以前の失敗作からすると信じられないほどの繊細さを持つ食べ物で、簡単に出来るものと分かりつつも感心する。

「綺麗にできてるな」

「ありがとうございます」

一つ手にとってグラスと中身を眺める。

この家には最低限の食器しかない。

レイダが住み始めても元々家族が利用する時用に揃えていたもので十分だった。

そのためレイダが作ったゼリーは、本当ならばこういった菓子に合う器に入れるべきなのだろう。

そこで、思い出す。

レイダが夕方真剣に眺めていた蝶がついた器。

帰りがけにあまりにもじっと見つめる姿につい声をかけてしまった。彼女にとってはそれほど思い入れのあるものだったのだろう。

「あの器は…買わないのか？」

「え？」

急な言葉とケノワの確かめるような目線にぶつかる。

レイダは首をゆっくり横に振った。

「いいえ、ただ眺めているのが楽しかっただけですから」
「そうか」

いいのか？ と無言で訊ねられた気がしてレイダは微笑む。

「既に大切な蝶は手元にありますから。それにもう蝶がなくても大丈夫なんですよ」

そっと夕方会った時のように胸元に手をやる。

「…蝶になにかあるのか？」

ただ、思ったことをケノワは訊ねただけだったがレイダは目に見えて動揺する。

じっとケノワの顔を見つめるその瞳に何かを訴えるようなものを感じて、考えるがわからない。訴えたいものは“なんでわからないんだろう”というものが多く含まれていた。

半分泣きそうな顔でケノワから視線を外すとレイダは、俯いた。
ケノワはこういう地雷を踏んだのか分からずに反応を待つしかない。
い。

しばらく続いた沈黙を破ったのは、レイダだった。

「ケノワ様、私は蝶が大好きなんです。
それと、アネモネという花も。両方ともとても大切な思い出と想いがあります。それはケノワ様がいてくれたからあるものなんです」

明るいしっかり口調で真っ直ぐに自分を捕らえるレイダ。

「私が？」

身に覚えがないケノワは思わず聞き返す。

「はい。ケノワ様が覚えてくれていなくても、今ここで一緒にいられる事がとても大切なことです。私は、ケノワ様の事を本当に好きですから」

レイダと出会ったばかりの頃に告げられた言葉、それはケノワも忘れたわけじゃない。

しかし、真剣に向き合ってこなかった。

それはレイダがその告白に対しての回答を要求してくる事が無かった為で、彼女は辛抱強く我慢していた事もあるだろう。

改めて自分に向けられた思いにケノワは自分の甘さを感じた。

「ありがとう」

今、自分が返せる精一杯の言葉にレイダは、切なそうに微笑んで頷いた。

「…どういたしまして」

二人はグラスを再びキッチンの冷所へ戻して、それぞれ自室へ戻った。

穏やかな昼下がり

「へー、綺麗じゃん」

キフィはグラスを持ち上げて窓側の光に晒した。

レイダの作った果物のゼリーを彼女がキフィにも渡したいと言
い出したのは今朝だった。

朝から食べてみたそれは意外なほどさっぱりしていて食べやすか
った。

使った果物の量が多かったためゼリーも大量生産されていたのだ。

レイダはエレノアとライフに渡すと言い、ついでにキフィの分の
準備も当然のようにされていたのだ。

嬉しそうにゼリーをつつきキフィはにこりと笑う。

率直な感想としてこういう時はあまり良い前兆ではない。

ケノワは自席で眉を顰めた。

「可愛い彼女が出来てよかったな」

それにはあからさまな揶揄が含まれている。

「…」

何も答えないケノワにキフィはグラスにスプーンを延ばしながら
更に続けた。

「なんだよ、まだ認めてないの？」

何が、と聞き返せないくらいの自覚はもう出てきているためケノワは口に出さない。

彼に言葉を返せば言葉尻を取られる事は明らかだからだ。

「でも、レイダちゃんがない生活とかもう考えられないんじゃない？」

レイダが居ない生活、そういわれて自分が彼女と暮らし初めて随分経つ事に気付く。

思えば、いつの間にか帰りの食料は二人分を買い、残った仕事は残業にせずに自宅へ持ち帰るようになっていた。

彼女とのやり取りも他の人間とのように嫌になる事は無い。

でも、それは彼女の言う“好き”と一致するものだろうか？

考えに没頭するケノワにキフィは面白いものを見るように目を細めた。

昼食が終わると、キフィは残る休み時間と共に姿を消す。

彼の破天荒な性格上、始業の定刻に戻ってくることは無いのだが、出て行くときに手にしていた書類をちゃんとこなしていたりする。

彼にしてはとても奇妙なことだ。

「どこに行かれるんですか？」

昼食の麺を口元に運ぶキフィに尋ねる。

普段、部屋以外では滅多に口を開かないケノワが話しかけてきたことにキフィは片眉を上げる。

そこは軍内の食堂。

それも能力士官用ではなく一般兵用の食堂で、キフィは色が違う黒の制服で奇異の目で見られることに一切注意を払っていない。

もちろんケノワも能力士官付きの士官制服だ。

今更、人目は二人とも気にしないが、わざわざここに来るのはキフィの我が儘だった。だってこっちの方が安くて美味いから。（キフィ談）

激安のお昼のランチAセット（デザート付き）の最後の一口を頬張りながら、キフィはにこりと笑う。

「ひ・み・つ？」

そう告げると立ち上がる。

彼が去る前にケノワは手元にあった書類を渡す。

「秘密ならあえて追求する事を今はやめておきますが、これは読んだ上で定例会までに戻ってきてください」

「うえ、面倒くさ」

文句を言いつつもキフィは受け取った。

よほどこの後の行動を追及されたくないらしい。

事実上の監視役のケノワもキフィが素直に従うなら何も問題だとは思っていない。どんなに彼が怪しくても、逃亡さえしなければ。

まあ、この事については意外な所から彼が居なくなる理由を知ることになるが、それはまた別の話だ。

部下

キフィを見送ってケノワは能力向上・研究科学局から居場所を奪われた“キフィ”の部下の元へ向かう。

彼らは、軍の通常の仕事に従事する一般兵の別館支部に間借りしている。

本来、特別上級能力士官付きの特別隊員は一般兵の中でもエリートばかりだ。

能力（ついでにプライド）が高いもの達で構成される特殊補佐隊。そんな彼らが一番恐れている事、それが『キフィ・クレイ』の部下になるという人事。

彼がこなすサキヨミ量は並みの者の5倍、精度も数倍上に行く。

そして、俺様、我が儘、破天荒な所は他の100倍。

かくして、キフィの部下⇨精神的墓場の図式が出来上がるらしい。しかし彼らは“あのクレイ”の下で働けるほどのキャリアとしてその後認められるという矛盾を抱えているのだ。

キフィに泣かされているのもちろんパスだけではない。

実の所、キフィが自室に部下を置かないという我が儘は部下にとっても都合の悪いことだ。

出来れば近くにいたくない。

まあ、その事情で一番の割を食うのは他でもないクレイ能力士官付き特殊補佐隊長・正補佐官、ケノワなのだ。

別館の奥にある彼らの部屋の扉を開けると、ピタリと皆が動きを止める。

一番奥の窓際で茶を啜っていたパースも硬直している。

「お、お疲れ様です。リュウ補佐官」

入り口近くにいたシャルルが目泳がせながら言った。

ケノワは、ほぼ毎日この部屋に顔を出し必要であれば朝礼なども行なうし、部下たちがキフィの部屋まで来る事もあるのだが最初の緊張感は毎度抜けない。

「これを」

表情を一切動かす事無く、シャルルに持ってきた書類を渡す。

昨日キフィがこなしたサキヨミだけで十数件ある。

重要な戦況報告以外は二日の猶予があり、正式な書類作成・検証作業などを彼らに任せている。

渡された書類にはケノワの几帳面な字でメモがあり、ある程度の指示が既に入っている為この事について会話はよほどの事がない限り不要だ。

意図が良く分からない会話などケノワには無用なのだ。（ケノワが鈍感ともいう）

「今日は先日のサキヨミ結果の報告書が出来上がり次第、本室へ持ってくるように」

「了解しました」

パースが相好を崩しながら返答した。

パース以下4名の部下がいるが、皆あからさまにホッとしている。

それは、つい先日だ。

キフィはケノワが私用の為だったの半日彼をパースに預けただけで他の能力士官を巻き込んで問題を起こしてくださったのだ。

その後、フォローをケノワが行なったが副官であるパースの悲惨な様子を皆が見ている。あれから、ケノワからキフィに関しての依頼をされるのではないかと警戒されているのだ。

「ただ、本日は鐘三つから定例会がある。もし彼が姿を見せなかった場合、敷地内の搜索を頼む」

間々ある事だが、キフィはよく定例会をばっくれようをする。

今日の様子からすると大丈夫そうだったが。

ケノワの言葉に確か、ケノワと同じ歳だったはずのシャルルはがつしりした大きな体のくせに半分泣きそうになっている。パースも苦い顔に戻っていた。

彼の搜索はよほど嫌らしい。自分だって嫌だ。

しかしこれはもう、ケノワが悪いわけでもないので他の者も抵抗もできないのだった。

「それと、これを」

ケノワは手にしていた紙袋をシャルルの反対側の机に居たトーコに渡す。

彼女はきょとんとして受け取り袋の中を覗き込む。

「あ、あの、これどうされたんですか？」

普段、なにがあっても比較的冷静なトーコが言葉を上ずらせて訊ねる。トーコの隣に居た眼鏡のシーグが奪うようにして紙袋から

それを取り出す。

持ち上げて眺めた所で動きを止める。

それは花柄の布巾にそれぞれ個装されていて、鉄仮面のケノワには到底結びつかない可愛らしいものだった。ちゃんと人数分揃っている。

「ゼリー？」

シーグが、呟くと。無表情のままケノワが頷く。

「この前のお礼だそうだ」

ケノワは表面上いつもの口調のまま告げる。

「私たちに、ですか？」

パースが怪訝そうな顔で首を傾げる。

「筋は違うがこの前の様子を見て隊にも迷惑を掛けた、と」

レイダはキフィの分も準備しつつ何人の部下がいるのかを訊ねた。何も考えず人数を教えるとゼリーの包みが増えていたのだ。

訊ねるとパースはキフィを追いかけて来たにも関わらず、それはレイダの問題↓ケノワが仕事を離れる↓キフィに別の部下がつく↓パースと他の人に迷惑がかかる、という図式が出来たらしい。

あながち間違っていない所が、彼女の勘の凄い所だ。

「この前…」

パースは一瞬考え込み、娼館で見た少女の事を思い出したようだった。

他の四人もなんとなくケノワにゼリーを渡した人物が“噂の彼女”である事を察して頷く。

「わざわざ申し訳ないです。それも本当にあの方は関係ない事だというのに」

「おいしそうなのでいただきちゃいます。ありがとうございます。送り主の方にもお礼をお願いいたします」

パースの言葉の横からトーコがお礼をいうとケノワは、どうしても良さそうに頷いて部屋を後にした。

ケノワが支部を出て行った直後、部下5人がいつも無表情の上官の面白いネタに微笑んだのは言うまでもない。

定例会議に定刻どおり戻ってきたキフィは、やはりおかしいことに全ての書類に目を通していた。
やる気満々で会議室に入る。

やっと仕事をする事に目覚めたかと感心するが会議中横目で彼を見ると、ぐっすり寝ていた。

そんなものだ。

部下（後書き）

補佐隊メンバー登場です（笑）

断固拒否

雨季が終わった。

それは、この国にとってあまりいいことではないのかもしれない。

この国は他国と地続きになっており丸い大陸のちょうど下のほう南側にあるのがマム＝レム王国だ。

大きさはちょうど全体の10分の1ほど、大きな大陸のため小さい国とは言えない。

この国の北側には大きな山岳と国境がどこあるのかさえもあやふやにさせる原生林がある。

そちらからの侵略は現在ほとんど無く、今は南の戦地と呼ばれる隣国ラディス・デュ・パストとの国境が紛争地域だ。ラディスは科学発展が著しく新しい兵器のほとんどがこの国から出来ているほどだ。

そんな戦力と真っ向から対抗できているのは他でもない国庫管理している能力者がいるからだ。

雨季がこの国のアマゴイの力を助け優勢になるのに対し、乾季は火器を得意とするラディスを助けるのだった。

ケノワは不機嫌に椅子に深々と体を預けているこの部屋の主にちらりと視線を向ける。

先日、臨時の作戦部隊管轄の特別上級能力士官会議によって新たに南の戦地へのサキヨミ士官の派遣が決まった。

3ヶ月間、従事していたサキヨミとの入れ替わりだ。

そこで、一番に指名されたキフィは猛然と遠戦行きを拒否したのだ。

そのことで作戦部隊の指揮官と決裂した。

もちろん彼の監督不行き届きとして指揮官にネチネチとケノワも叱責されたのだが、そんな事はケノワにとってはどうでもいいことだった。

それよりも、キフィがある程度はふらふらしつつも仕事をこなしてきたが、今回ばかりは戦地に行く事を断固拒否を示している事が問題だ。

会議中、指揮官とやりあった中で大胆にも自分が行かない代わりに他の能力士官が行なうサキヨミを自分がほとんど受け持つと大見得を切ったのだ。

そのとき複数の作戦部隊の幹部たちから失笑を買ったがキフィがこういったことを言い切るときは本気だと五年目の付き合いのケノワは知っている。

「本当によろしいのですか？」

確認のために分かっている事を聞いた。

派遣を任命された士官たちは既に部下たちと共に遠戦への準備を始めている。

「ん？ いいんだよ」

仏頂面で答えるとキフィは頭を乱暴に掻いた。

「俺は、南の戦地には行かない。これはもう決めた事だ。行かなくてもいいのなら俺はここでなんだってするさ」

皮肉に吊り上げられた唇はやはりどこか苛立っているようだった。

「…村の事が心配なんですか？」

前回の遠戦時には故郷の村が自軍から襲われることを察知して、遠戦先から逃亡し村に帰るという能力士官の中では前代未聞の事をやってのけた。（彼としてはちよっとお出かけ）

しかし事実、彼はほとんど村を守るための人質のように軍に来ているのだからあの時の怒りは分からなくも無い。

「それもある。けどさー俺にだって色々あるっての」

なるだけ穏やかに言葉を返していたが、だんだん指揮官とのやり取りと思い出してきたらしく顔が曇る。

「しかし…くそっ、だからってあいつマジでこんなに仕事振ってくるか普通っ!？」

あえて二人して目を背けていたが、キフィの目の前にはこれでもかというほどサキヨミ予定案件が積まれていた。

ケノワもぼんやりとその山を眺めながら、これは自分の隊5人では決して捌けないなと思っていた。

キフィが司令官への呪詛を吐きながら行なわれたサキヨミは今回派遣される、サキヨミ士官が到着するまでの戦場経過と今後の大ま

かな予測ガイドラインを作るための目安サキヨミだった。

結局キフィとしては遠戦などせずにもこの基地内で当面のサキヨミをさせられているのである。

彼の能力の高さが今ここで彼を苦しめている所だ。

そして彼の部下たる特殊補佐隊の暗黒時代になったのだ。

ケノワがこの仕事を告げた時の彼らの顔は今にも死にそうだった。

現在は臨時で彼らがキフィの仕事場に机を置く事を許されている為いつもよりも部屋が狭く感じる。

窓側の中央奥にキフィの机が添えられ、その両脇にそれぞれ机を並べる。

一番近いところにはケノワと反対側にパースが控える形だ。重厚な配列だと思う一方で、それと比例して空気も数倍重い状態だ。

「そろそろ時間です」

キフィの机の前に立ち告げた。

キフィが机に頬をつけながら青白い顔で吐き捨てた。

「せめてこの場でサキヨミさせろ」

普段の仕事にプラスして徹底的に予測される戦況は、自室ではなく彼が苦手なアングリッド統括の研究室で行なわれている。

「あの場所にいるほうが効率悪いっての」

「事実ですが、決まりです」

この場に居る全員が思っている事だがもうしょうがないのだ。

「何が決まりだよ…今、絶対俺らは労働基準法から外れた過剰従事だったの。あのクソじじいふざけんなよ、いつかあのぶよぶよの腹に蹴りを入れてやる」

キフィの毒舌をはっきりとここで聞いてきたのはこれまでケノワのみだった。

しかし、今は部下たちが激しい言葉に顔が硬直している。

今更ここでどう発言しようが上層部からはなんのお咎めもなくなっているが、初めて晒される彼らからしたら落ち着いていられるものではない。

パースの顔が青を通り過ぎている。手にしている資料が力なく机に落ちていくのを視界の端に捕らえた。

「クレイ殿、いい加減にしてください。あまりごねてると…」

一旦区切るとキフィが面倒くさそうに顔を上げる。

「なんだよ？」

「力ずくで連れて行きます」

一瞬、部下たちが首を捻る。この破天荒なキフィという上官がこんな言葉でどうにかなるのかと。

しかし、予想を裏切りキフィが体を起こして立ち上がる。

「い、いけばいいんだろ…」

嫌そうな表情をしつつも支度を始めたキフィにケノワは、まるで飼い主のようにゆっくり頷いた。

「よい心がけですね」

黒い能力士官用の上着を羽織ながらキフィが頬を引き皺らせる。

「お前の力ずくは俺を殺しかねないんだよ」

部下たちがそつと後姿を晒すケノワを窺った。

「そうでしたか？ 忘れました。貴方にも記憶能力があるのですね」

あっさりと返された言葉に理解する。

このクレイ特別上級能力士官がここまで軍の為に（彼の性格からして）真面目に働く理由がこれなのか、と。

「そーかよ」

キフィは頭を乱暴に掻くと上着のポケットに手を突っ込みすたすたと扉に向かう。

その後ろについて資料の入ったファイルを手にしたケノワが続く。ちょうど二人が扉の前に立った時キフィが振り返る。ちよつと恨みがましい顔だ。

「お前らさぼんなよ？」

「わかってます」

パースが慌てて敬礼しながら答える。

「せいぜい働け」

ぱつと手を振ってキフィは出て行った。

断固拒否（後書き）

お読みいただきありがとうございます。
評価などいただけるとなお嬉しいです。

恋愛色しばらく薄れて、主人公ケノワとキフィのお話が続きます。

頼んでもいいか？

二人が扉から出ると、扉の両脇にそれぞれ一般兵が立っていた。ちらりと一瞥するとキファイが呟く。

「うざい」

ケノワもそう思っていた為、何も言わずに歩き始めた。無言で扉から離れた二人がついてくる。

このサキヨミの案件を受けて始めた途端にキファイに対する逃亡策が強まったのだ。

つまりケノワだけではなく他の監視をつけられた。

特別にケノワは監視役としての自尊心があるわけではなかったが、こういった過剰な人員配置はキファイの神経を逆撫ですることが分かっていた為、直属のサキヨミを司る作戦部隊には取りやめを訴えていた。

しかし、彼らからの答えは監視続行だった。

最近、ケノワとキファイが親しくしている事が上層部から警戒されているのは分かっていた。元々、冷静沈着なケノワならばキファイの逃亡に情や感情に左右される事がないだろうという人事だ。

それがある事か二人は五年の内に信頼しあう（？）相棒になっていた。

それでも、二人がばらばらに配置されないのは我が儘の猛獣と化したキファイに首輪をして手綱を持ち続けられるのがケノワのみになってしまったからだ。

「ケノワ、昼飯どうなの？」

自室からでて砕けた口調でキフィが訊ねる。

様子も少し荒んだ感じが消えた。彼なりに自室に居た部下たちを
氣遣っていたのだろうか？ それともただ単に彼らがいる事が氣に
入らないのか。

「昼食は、自室か今から行かれる研究室でしょう」

「うげっ」

キフィは眉を顰める。

歩きながら後ろを気にするようにして顔を窺われてケノワはキフ
イの顔を何かと見つめる。

「なあ、少しだけ抜けらんない？」

少しトーンを落として言われて彼が真剣に告げている事が知れる。

「しばらくは難しいかもしれませんが」

ケノワもトーンを落として言葉を返す。

後ろにいた二人がその様子に距離を近づけてくる。

この二人さえいなければ、ケノワとしては今までのように少しく
らい見逃してやろうと思えるのだがどうにもできない。以前に比べ
て自分がキフィに甘くなっているのは分かっているが、特別それが
悪いこととは思えなかった。

「そうか…」

キフィは納得いかない顔をしつつも頷く。

四人は能力向上・研究科学局の司令部棟から廊下を使いアングリード統括をはじめとする軍の能力者たちの研究棟へ入った。

一番立派な研究室を持つのはもちろんアングリード・アルファンで、嫌々ながらキフィはその扉をくぐる。

「遅かったな、早くそちらへ」

キフィとケノワを見とめるとアングリードはキフィがいつも座られる一人掛けの腕掛けのついた椅子を指差す。

キフィは何も考えていないような顔に変わっていた。

いつも思うのだが、キフィはこのアングリードの前に来ると表情が無くなる。

そう、まるで自分のようだとケノワは思う。

普段の彼からすると驚く事だが感情を消し去る事をするようだった。こうやって研究室でサキヨミした反動が大きすぎて自室ではいろいろすごい事になるのだが。

プロジェクトが準備されてキフィの目の前にいくつかの南の戦地の情報が映し出される。

念写などの能力者が得てくる風景や環境などを見た上でキフィはサキヨミをしていくのだ。

それもキフィがどの資料を見た上でサキヨミしているのかなどの統計が取られ、研究材料とされていくのだ。

そのくせ、サキヨミした内容の詳しい報告や立証などの資料作成をするのは自分たちなのだからキフィが自室で言っていた『効率が

悪い』というのは事実だった。

今回はサキヨミする内容が多く、それも折角サキヨミしたものが自身の告知で変わっていくことがあるのだ。

そうなればそこからまた変わった未来を読み直さなくてはいい。

通常であれば十人以上のサキヨミを集めて交代に少しずつ読むものを一人でこなすキフィには負荷が大きすぎる。

きっと大見得を切ったキフィが根を上げるのを上層部は待っているだろう。

しかし、ケノワの予測だがキフィは指示が出るまでやめないだろう。

そう思えてならない。

「リュウ補佐官」

キフィが一時的に取られた休憩でケノワを改まって呼ぶ。

サキヨミされた内容を聴取・筆記し資料を揃えていたケノワは手を止めてキフィの元へ行く。

「どうされました？」

「マジでここから出さない気だな」

呟かれた言葉とキフィの目線でアングリードのことを指していると分かる。

「そのようですね。残念です」

本心で答えると、キフィは研究員らに見えないように溜め息を漏らした。

「お前、今から俺の部屋に戻るんだろ？」

「そのつもりです」

既に普段なら一日分のサキヨミをしており、一度部下たちに渡すつもりだ。

さらに上層部へは訴えていつも部下たちが使う部屋に臨時で他のサキヨミから借りた補佐隊に指示を出す。それはほとんどパスに任せているが。

「じゃあさ、頼んでもいいか？」

「頼む？」

「しょうがないだろう、俺が行きたいけど行けないんだから」

キフィが不貞腐れてポケットに入れていたメモ帳の切れ端を差し出す。四つ折にたたまれた手紙のようだ。

一応、二人は休憩の為に部屋の隅にいるが、更に人が周りにいない事を何気ない素振りで確認する。

「これは、誰へ？」

「：一般兵の食堂に：アゲハっていう子がいる。その子に渡せばいい」

キフィの声はほとんど擦れるようにして耳に届く。
本当にキフィは他人に聞かれたくないようだ。

「分かりました。一つ訊ねても？」

「なんだ」

ほとんどあさっての方向を見ながらキフィは促した。

「恋人ですか？」

今までなら一切興味が無かったが、（本当のところ今もだが）少し干渉してみたくなったのだ。自分が彼から干渉され過ぎているからかもしれない。

「んあ？ 聞こえない」

プイツと体を完全に反転させるとキフィは先ほどの質問を無視する。

感情を抑えたままの顔だった為表情が窺えない。執拗に確認する事項でもなかった為、そのまま後姿にかしこまりました、と答えた。

「早い内に届けろよ」

小さく呟くと入り口近くで昼食を配り始めた研究員にキフィは歩み寄って行った。

それを見送り、ケノワは集めていた資料をファイルに分けて研究室を出た。

全ての指示を終えたらまたこの場所に戻ってこなくてはいけない。それは早ければ早いほどいい。

キフィの一人で研究室に居る精神状態を考えると。

秘密の王子様

ケノワは部下たちの元へ戻り指示を出し終えると簡単な昼食を取り、その足で一般兵たちが利用する食堂へ向かう。
最近キフィのおかげで行く事が多くなった建物だ。

食堂の従業員用の扉がどこにあるのか、それが分からずに昼時で賑わう空間を見回した。

そのときちょうどエプロンをしたどう見ても軍人ではない茶髪の少女が横を通り過ぎる。

その少女の肩をとっさに掴んだ。

少女は忙しく働くのを引き止められて剣呑に振り返った。

「ちょっと！ なにすんの…よ…」

自分の顔を見て少女がトーンダウンする。

「すまない、人を捜しているんだが」

「あのリュウ特別補佐官様…ですか？」

少女が妙に改まった顔で自分を見ているのに気付いて頷く。

「そうだ」

「握手してください！！」

「は？」

妙にきらきらした顔で真剣に言われて一瞬マヌケな声が出る。頬を染めて少女は恥ずかしそうにしている。

なんの冗談だろうかと真面目に考えたケノワは知らない。
その見た目と役職だけが一人歩きして一般兵の中で憧れの人として有名である事を。

「人を捜している」

いつもの鉄仮面の愛想無しのまま同じ言葉を繰り返した。この際、
変な相手の様子は無視することに決定した。

「あっ、はい。誰を捜していらっしゃるんですか？」

少女はハツとしたように頷いた。少し残念そうに手を引っ込めた。

「この食堂にアゲハという人はいるのか？」

「アゲハ…ですか」

少女が怪訝そうな顔をして繰り返す。

「いないのか？」

「いえっ、います。すぐに案内します」

少女はくると体の向きを変えて歩き出す。

その後ろをついていくと従業員用の出入り口があった。配膳口の
端にあり見えにくい位置にあった。

中は薄暗い。

廊下を歩いていくとその奥に休憩室のような扉があり、その前で
少女は立ち止まる。

「あの、少しここでお待ちいただけますか？」
「ああ」

扉の中に入ってしまった少女は少し扉を開けたままにしていた為、
中の声が聞こえた。

何やら揉めているようだった。

「えっ…知らないよお。なんで私なの？」

「私だって知らないわよ、あんたがリュウ特別補佐官様と親しいな
んて聞いてない！ それこそどうなわけ？」

「だから知らないってば」

「いいから行きなさいって」

扉の奥から困惑顔の少女が顔を出した。

年齢は先ほどの少女と変わりがない。

きっとキフィとも同じくらいだろう。

胡桃色をした髪と紺桔梗の瞳は意思の強さを主張しているようだった。

「あの…？」

アゲハは困ったようにケノワを見上げる。

「クレイ殿からこれを預かってきた」

「えっ、あの…特別上級能力士官のクレイ…様ですか？」

キョトンとした顔でケノワが差し出した紙を見る。

「そうだ」

「私、クレイ様と面識がないんですけど…」

アゲハは首をしきりに傾げる。そのたびに腰の辺りまで伸ばしている髪がさらさら揺れる。

「…私は確かにキフィからこの食堂にいるアゲハに渡すように言われたんだが」

つい、最近繰り返し呼び捨てにする彼の名前をそのまま告げた。この少女との会話くらいでは何も問題ないだろうが。

しかし、ケノワの言葉に少女の瞳が大きく見開かれる。

「あの、キフィって…私くらいの年齢で金髪に変わった褐色の瞳をしててここら辺にホクロがある？」

彼女はしっかりとキフィの泣きぼくろの位置を示しながら早口に言った。

「ああ、そのキフィ・クレイだ」

なんだ、知っているじゃないかと思いつつ頷いた。

「なによアゲハっ、クレイ特別上級能力士官様の事知ってたんじゃないの」

アゲハの後ろに居た少女が声を上げる。

「嘘…っ！ だってそんな事キフィから聞いた事なかったんだもの…特別上級能力士官だなんて」

本気で驚いている顔にキフィが少女とどういった付き合い方をしたらこの展開になるのかを不思議に思う。

まあ、彼だったらいつもの飄々とした顔で過ごしてそんな階級にいる事を悟らせないことも可能だろうが。

「これを」

改めて手紙を差し出すと少し躊躇いつつアゲハは受け取った。
その場で広げる彼女の後ろから後ろに居た少女も覗き込む。

「なあに、これ？」

「おまじないだと思う…」

ぺらりと紙が折れて見慣れたキフィの悪筆で走り書きがあった。

「『道を歩く時は真ん中を歩け』っていうのがおまじないなの？」

少女が不審げに言う。

「だって、キフィはいつも私におまじないをくれるから…」

信じきった顔でアゲハが呟く。

「おまじないとはなんだ？」

キフィはそんな殊勝なことを言わない。分かっているからこそケ
ノワは訊ねた。

「ほとんど毎日同じように一言教えてくれるんです。本人はお抱え
の占い師がいるって言ってましたけど、言葉通りに動くといい事が

ある気がします」

「どんな？」

「上から物が落ちてきてもよけられたり、おまじないがなかったら私が歩くはずだった道で事件があったり、いろいろあります…ほとんど毎日」

キフィの意図がわかりケノワは頭を抱えなくなった。

これはおまじないなどではない。

「そうか…」

キフィがあえて言わない本当のことを自分がどうするつもりも無く。ケノワは頷いた。

「それでは失礼する」

アゲハに出来るだけ早くメモを渡すという仕事は終わった。

また急いでキフィのところに戻らなくてはいけない。

アングリード統括の研究室にケノワが戻った時、研究室はぴりぴりしていた。

今日まで大まかなガイダンスを作りあげて、明日以降は補足に入る事になっている。

ケノワが現れたことでほとんどヨミ終えていたキフィがふらりと立ち上がる。

「遅い…殺す気か」

「申し訳ありません。昨日までの報告書で確認が必要だったので」

とりあえずキフィを宥め、研究員などと確認を行なった上で研究室を後にする。

二人再び歩き出すと往路と同じように二人の一般兵が後ろをついてくる。

静かな目でケノワが二人を一瞥すると近かった距離が少し置かれた。

一般兵からしたらケノワなどは雲の上の人と言うものだ。上層部からの指示だとしても本人を前にするとある程度は下がることは予測していた。

再び前を向いたままケノワは言った。声も抑える。

「渡してきました」

短い言葉だったが、だるそうな様子だったキフィが顔を上げる。

「そうか…助かった」

「あの…」

何も考えず口をついて出てきそうになった言葉に一瞬躊躇う。

「なんだ、言えよ？」

「彼女は貴方のことを知りませんでした」

隣りでああ、とキフィは呟いて頷いた。

「必要ない事だからな」

ついでに続けられた、やっぱりカツコイイ奴には秘密はつき物だろっという言葉は無視した。

多分キフィも返事を必要としていない。

焦心のティラミス

少し前からすると多忙を極める生活に疲れを感じながらアパートメントへ帰る。

いつもの様に部屋へ入るとレイダが嬉しそうに出迎えた。

「お帰りなさい」

ケノワの夕食を温めたレイダは私服に着替えたケノワへと皿を運ぶ。

「今日のスープは凄くおいしかったです。私にも作り方を教えてください
ださいね」

「ああ、今度」

目の前に出された夕食を口に運びながら思う。

以前までであれば一人帰宅したあとは疲れていればあえて夕食を作ることもせずに寝てしまっていた。

しかし、レイダが居ると面倒は増えるのに疲れていた気持ちが軽くなる。

ケノワが食べ終えるまでじっと向かいに座り見つめていたレイダは、ケノワの皿をひくと手に小さな皿を持って戻ってきた。

「これ、食べてください。」

白い皿の上にはふんわりしたスポンジとカスタードやクリームが

交互に何層にも折り重なっている。

一番上のクリームの上にはそのケーキのかなさを示すかのよう
に茶色の粉がまぶされていた。

「今日、作ったんです。疲れたときは甘いものです」

少し照れて笑う自分を氣遣うレイダを見つめた。

「あ、一人じゃないですよ？ エレノアさんに教えてもらいました。
大丈夫です、ライフさんもおいしいって言ってくれたので。」

ケノワの目線をどう受け取ったのか慌ててレイダが補足を入れた。
別にケノワはこの食べ物物の安全性を疑ったわけではなかったのだ
が…。

「これはなんと言うんだ？」

「ティラミスらしいです。王都で最近流行ってるお菓子らしいです
よ」

手元をみた。

ティラミス、繰り返し折り重なるそれはキフィのようだと連想さ
せた。

この国のサキを見つめながらも、僅かに残る体力さえも惜しみな
く焦れた様に一人の少女の為に使おうとする。

そんな余裕なんて本当は無いだろうに。

そうして行なったサキヨミの結果が再び未来を変え、自分へ戻っ
てくる。

そうなることなどキフィは承知なのだ。

彼の覚悟なのだ。

「そうか、ティラミスか」

レイダの返事に短く答えると、ケノワはフォークをそのケーキに入れる。

少しの力で掬い取れる。

口に運んだそれは、ふんわりした外見からの想像よりも甘さが控えめで僅かな苦味が混じっていた。

まるで自分の考えを読んだかのような苦味。

「エスプレッソの豆を挽いてトッピングしているんです。だから、きつと甘すぎないと思います」

レイダの顔が感想を求めるそれでフォークを止める。

「食べやすいな。…ありがとう」

素直に礼を言うとは瞬大きく目を見開いた後、レイダは一気に頬を染めた。

「どういたしまして」

作戦部隊の半数以上を送り出した後も南の戦地のサキヨミを続けたキフィの試練は一月ほど続き、あっさり終りをむかえた。

神憑り的なサキヨミは前線に居る時よりも冴えていて、手伝いで

増員されていた補佐隊のメンバーはもとよりパースたちさえも彼の
実力を認めざるおえなかった。

彼の実力であれば、本当に王都で十分だったのだ。

キフィの事をただ単に我が儘なガキで自尊心が高いだけだと見く
びっていた上層部も舌を巻いた。

キフィが根をあげる前に一般兵の方が通常と違う情報処理量に根
をあげた。

既に前線に通常通りのサキヨミ部隊が着いている以上、キフィに
無理にサキヨミをさせなくてもいいと切り上げられた。

「信じらんねえ…」

キフィはのんびりとした声を上げた。

「何がでしょうか？」

自席に座りケノワは訊ねた。

特殊補佐隊は通常の人数に戻されて、パースたちも分室に戻って
いった。

本当のところあのままキフィの部屋に隊を置くのが一番楽なのだ
が、キフィが嫌がったのだ。

しかし、それは以前と全く同じ理由ではないようだった。

キフィと隊のメンバーはお互いに実力を認め合った事で、キフィ
が彼らを部下ではないということも無くなった。

理由を直接確認した時にキフィが「俺は、静かな所にいたいんだ
よ」と呟いていたのはきつと本心だったと思っている。

「んあ？ あれだな、俺の仕事ってこんな楽だったのかと認識してる所だ」

「それは私も思います」

通常業務に戻されたキフィの仕事はそれまでの強行的な仕事からすると気が抜けるくらい簡単だった。

パースたちも今回の仕事の経験できっとキャリアのステータスが上がっただろう。仕事を仕上げてくるのも効率が良くなっている。

「これで思う存分さばれるな」

にんまりと今では血色の良くなった顔で笑う。

「：キフィ、それは了承できかねます」

「適度に仕事はするって、一人でぶらぶらしたり俺だってしたいところ」

言いたいことは分かるが、堂々と言ってしまおう彼にちょっと頭痛を感じる。

「ケノワもいい運動になるだろう？」

訂正、完全な頭痛で間違いない。

気遣い

直前に告げられた言葉に思わず声を上げた。

「そ、そんな事してもいいんですか？」

レイダは途惑った顔でエレノアを見た。手にしていた箒を壁際に置いた。

「もちろんよ」

「でも…」

笑顔でその言葉を告げていたエレノアの顔も怪訝になる。

折角のプレゼントにレイダの反応が予想と違い不安そうにエレノアは後ろに居たライフを見上げる。彼も意外そうな顔で片眉を上げた。

「なんだか、嫌そうだね」

「そんなことないですっ！」

二人の顔色に気付いてレイダが声を上げた。

「ただ…ビックリしちゃって。ありがとうございます、お二人にそんな気遣いしてもらうなんて嬉しいです」

レイダの顔にはいつもの笑顔が戻りにっこりとお礼を告げた。

「ライフさんも、情報ありがとうございます」

「いや…俺の場合はキフィの奴が…」

ライフは言葉を濁しながら呟いた。
なんだか嫌な事を思い出したようだ。

「でも、本当にもし私が抜けるとしてこのお店は大丈夫なんですか？」

「平気よ。元々、一人でやってたし、ライフも手伝ってくれるしね」
その言葉はなんだか、自分がここには本来必要無いことを指摘されたようで一瞬卑屈な考えが頭をよぎる。

「まあ、レイダちゃんがない間は寂しくなってしまうけれどね」
そのエレノアの口ぶりが本心からの物と分かりレイダは頭から先ほどの考えは振り切った。

「今日帰ったらケノワ様にも話してみますね！　どうなるかは後で報告します」

片づけを終えると足早に夕暮れの雑踏の中に消えていったレイダを見送って、エレノアはちらりとライフの顔を確認した。

「ねえ、レイダちゃん達がどうなってるのか聞いた？」

ライフは不満そうなエレノアの瞳を見つめてその滑らかな髪に指を滑らせた。

「いや、特には聞かないな。リュウじゃなくて相手がキフィなら噂

が沢山入りそうなものだけどなあ」

「ああ、そうねえ」

少し会ったなんとなくのイメージだけだが、キファイという少年は確かに注目を集められるカリスマ性を備えていた気がする。

「けど…同棲させてるのって不安…」

ぽつりとエレノアが呟くとライフが苦笑する。

「彼女と対して変わらない歳で自分も王都へ出てきたんじゃないかなかったっけ？ それにそれこそキファイじゃなくて相手がリュウでよかったよ」

「そうかも知れないけど寂しいなあ…」

レイダが働き始めて数ヶ月の間で、ライフとエレノアの二人にとつていつの間にか可愛い妹になってしまった。

二人とも実際に妹などがいた経験が無い分本当に大切に思っているのだ。

「なにかあった時にはいくらリュウでも許さないわよ」

エレノアは大真面目に告げた。

くしゅっ、隣りでケノワがくしゃみをしたのが聞こえてそちらを窺う。

「大丈夫ですか？」

「ああ、別に風邪ではない」

そう答えたケノワの顔が続けてレイダは見つめた。

それに気付いてケノワが不思議そうにする。

「なんだ？」

手にしていた書類をテーブルに置きながらレイダの方へちゃんと向き直ってくれる。

早い夕食を済ませて二人ともリビングにあるソファに腰掛けていた。

特別な理由は無いのレイダはケノワの隣りに座っている。

それは少しでも近くに居たいレイダの気持ちの表れなのだが、ケノワに伝わっているかは分からなかった。

「…はい、えっと…」

ケノワ自身から聞いた事で無いものを確認するのには凄く勇気が必要だった。こんな事を聞いてケノワが嫌がらないかと不安にもなる。

じっと待ってくれるケノワに勇気を出して訊ねる。

ケノワはレイダの言葉をないがしろにしない。

「今度お休みがあるって聞きました、ケノワ様はヤサへ帰られるんですか？」

一気に言ってからやっぱり怖くなり顔を俯かせる。

「休み？ ああ、あれか…考えてなかったな、実家なんて」
「えっ」

ケノワがあっさりと答えたことに拍子抜けして彼の顔を窺うと、ケノワは背もたれに腕を預けながらリラックスした様子で考える仕事をしている。

「休みといってもせいぜい取れても7日くらい…とり損ねていた休暇を消化する為に取りえられるだけだ。レイダは、戻りたいのか？」

二人の出身地ヤサはこの国の南部に位置し、国を東西に横断する鉄道で東に向けて一日乗りある駅から更に馬車などで二日程かかる場所にある。きっと往復にほとんどを費やすだろう。豊かな資源を持っているが、場所自体はそんなに恵まれた場所にあるわけではない。

「…エレノアさんとライフさんは、ケノワ様がご実家に帰るなら一緒に帰れるように私にもお休みをいただけると…」

帰りしなに言われた言葉をそのまま感情を込めずケノワに告げた。ケノワは少し眉を寄せて言葉を重ねた。

「…レイダが、どうしたいのかを訊ねているんだが」
「私、ですか？」

二人は自分が喜ぶと思い用意してくれた好意、それなのに自分にはとても喜べるものではなかった。そう思った自分が凄く醜く感じて苦しかった。自分が疎ましい。

「…私は…」

エレノア達の前でのように笑顔を作って彼の意見を聞くのが一番だと思っているのに、あの時のように上辺だけの笑顔さえ浮かばない。

「レイダがヤサへ本当に帰りたいというのであれば、自分も戻ってもいい。もう数年実家へは帰っていないからな。しかし、レイダはそれを本心では望んでいないんだろう？」

トスッと真ん中へと投げかけられた言葉が全てを見抜いていて、レイダは自分が動揺しているのが分かる。

心がぶれる、何とか両手で抑えこんで掴んでいたのにボロボロとこぼれ落ちるのを感じた。

優しさの音階

「本当はどうしたいんだ？」

その言葉には今回の休暇についてだけではないものが込められている。

ケノワの目は静寂に満ちていて真剣だった。それに気付いてレイダは目を見開く。

急かされるように小さくレイダの唇から震える言葉が漏れた。

「私：は、嫌です。今、故郷にあの町に戻ってしまふことが怖い：売られて：私はヤサを一度捨てたんです：りよ、両親も妹も捨てて王都へ：」

苦しい、胸が苦しい、苦しい：それは心が苦しがつているのだと知っている。

もう何度も味わってきた苦しみだから。

「一生戻らないって、一生戻れないって覚悟をしたんです。それなのに：あの時あっさりと私は許されてしまった：あんなに辛かったのに：っ」

「：」

一気に視界が歪み頬を涙が伝うのを感じる。

それでも言わなくてはと唇を動かす。ケノワはじっと聞いているから。

「私をきつと誰も待ってくれていないんです：両親も町の人もこんな私の事なんて」

：怖い、お前なんかいらないうて言われることが、それだけの価値なのだと自分は知ってしまった。

「ごめんなさいっ：エレノアさんたちの好意を素直に受け取れない、私は醜いんです」

思考と言葉が入り混じり自分でも何を言っているのかが分からなくなつて、唇を噛み締める。泣きたくないのに涙はこぼれ、溢れる感情が彷徨う。

「それでいい」

急速に近づいた声にハッと顔を上げた時には言葉を告げたケノワの唇がすぐ近くにあり、触れた。それは一瞬涙に濡れる目元に触れて、レイダの体ごとケノワの腕の中に引き寄せられる。

背中に腕を回してケノワは自分の中に閉じ込めるようにレイダの背中を強く抱きしめる。

「思うまま言えればいい。誰もレイダを責められない、これはレイダ自身が決めてきた事だ。全ての好意を何も考えずに受け取ってしまう愚かさを持っていない」

「それでも、私は…」

自分で選んだことだと言ひ聞かせても割り切れない。

「レイダがいて良かったと思っている。それはレイダが選んでここ

に來たから成り立っている。苦しむなとも取り繕うなどは言わない、それでも嫌な事を押し隠してしまわなくても良い」

ゆっくりと頭に添えられた手のひらがレイダの感情を落ち着かせていく。ケノワの頬に頭が触れていて言葉が直に響く。

「レイダがここに必要だ。この場所に」

言葉が出ずに何とかこくんと頷いてケノワに知らせる。

愛する人に必要だと認めてもらえた、それだけで先ほどまで深い井戸の底でもがいていたレイダに助けの手が伸びてきたのと同じだった。

密着したケノワから彼の匂いを感じてレイダもケノワの体に腕を回して抱きついた。

もっと近くに居たい、もっともっても一つになる事なんてできないから力いっぱい抱きしめる。自分は沢山の優しさの中にいる。

ケノワがレイダの背中を優しく撫でながら言葉を漏らす。

「正直、実家には戻りたくない。実家にいると折角の休暇が休養ではなくなる…この部屋で過ごした方が幸せだ」

それは自分を慰める言葉にも、本音のようにも聞こえた。

次の日、花屋にいつもの様に出勤してきたレイダは前日と比べてスッキリした顔で告げた。

「私はヤサには帰らない事にしました」

「えっ、でもレイダちゃん王都に来てから一度も帰って無いじゃない。リュウが駄目っていったの？ レイダちゃんは帰りたいでしょう？」

心配そうにエレノアが訊ねるが、レイダはゆっくり首を振った。

「：エレノアさん、その気持ちだけいただきます。少しお休みはもらえたら嬉しいけれど、ヤサへ帰ることはしたくないです」

「帰りたくないの？」

「そうです。実家に帰ることは私には必要無いことだから、ケノワ様と一緒に居られればいいんです。ケノワ様も私のしたいようにすれば良いって」

レイダの瞳には一切の嘘が含まれて居ないことがわかり、エレノアは頷いた。少し苦笑する。

「分かった。レイダちゃんが決めた事だもの、私達が少し押し付けすぎたかも知れないね。休みも欲しい日数あげるから決まったら行って頂戴：くやしいけどあっちの方が一枚上手だったなあ」

「ありがとうございます」

レイダは嬉しくて微笑んだ。

昨晚のように思ったことを素直に明かすだけでお互いなんのしこりを残す事無く解決できた。

ケノワに帰ったら報告しようと思うと更に嬉しくなって笑みを深める。

エレノアも嬉しそうなレイダにつられて笑い、難しそうだった顔が笑みに変わった。

薄紅色の頬

それは一瞬で自分へ柔らかく与えられて、確かめる暇さえなくすぐ去っていった。

呆然と立ち尽くしていたレイダは閉じられた扉の音に我に返える。少女趣味な彼女の言葉で表すのであれば、心の中まで薔薇色に染まった、とても表現しよう。

「う…そ」

レイダ・ゼイライス、18歳。

数ヶ月前からずっと恋心を持っていたケノワ・リュウの家に転がり込んで居候をしている。しかし、彼に思いを告げてそれも同棲しているにも関わらず彼からのそういった反応が全く得られていなかった。

ケノワはレイダが売られていた娼館から救い出してくれた。

そのときの彼は自分に対して凄く優しくかった。だから嫌われてはいないだろうし、彼の上司のキフィ・クレイも以前自分がきてから彼が変わったといってくれた。

それを心の糧に日々過ごしていたのだ。

ケノワから紹介された（キフィが脅したとも言う）花屋の仕事は王都唯一のレイダの知り合いでもあったエレノアの店だ。

エレノアは恋人であるライフと言うアマゴイの特別能力士官と同棲をしている。もうすぐ結婚するという二人の幸せそうな雰囲気

職場で見ってしまうと羨ましくてならない。

そんな中でケノワはレイダを辛いときには抱きしめてくれて必要と言ってくれ、時には手を繋いでくれる。それだけでも平民の自分の立場からすれば、故郷ヤサの辺境伯の弟であるケノワの家に住んでいる事自体が奇蹟。

しかし欲が出てしまうのだ。

彼に愛されたいと。

少しでも、彼の特別になりたいと。

…そしてそれを確かめたいと。

その朝は平日でケノワはいつも通り仕事のある日だった。

ケノワは出勤の二時間前には起きて朝食を作り、その日に行なう仕事の資料を整理する事を日課にしている。そんな彼に合わせてレイダも同じ時間に起きて過ごす事になっていた。

本当は凄く朝が苦手な彼女も好きな人のためなら努力というものができるのだ。

早く起きた分、ケノワはレイダに構ってくれる。

余裕があれば朝から朝食の作り方を教えてくれるのだ。

レイダは不器用なりに真剣に朝食に食べるフレンチトーストの焼き目をつけている。それを横目に、既に資料整理を終わらせて制服に着替えているケノワは実に手際よく夕食の下ごしらえをしていく。帰ってきてから焼く特別なハーブの入ったソースに漬けた肉など、時間が経っている分感動的なおいしさになるのだ。レイダは大好きだった。

短時間で二人分の夕食の準備を済ませると、ケノワは確かめるようにレイダの手元を覗き込んだ。

「もういい」

短く指示を出されてレイダは火を止めケノワが差し出した皿にそれをうつした。

彼女にしては上出来な焼き加減だった。

「どうですか？」

レイダが窺うようにして訊ねた。

「ちょうど良い」

以前の彼女ならケノワがほかの事をしている間に火の調節などせずにパンが丸焦げになっていただろう。

レイダが嬉しそうに笑って貯蔵庫から牛乳を取り出した。

カップひとつ分だけ移す、もうひとつ準備したカップにはドリツプされていた珈琲が既に出来上がっているのだ。

既に運ばれていたフレンチトーストの隣りにそれぞれカップを置いた。

短い間に手にしていた資料から目を離すと二人は朝食を食べ始める。

レイダの焼いたフレンチトーストを一口、口に含んだケノワ一瞬動きを止める。

それを感じて思わず訊ねた。

「…あの、変な味がしますか？」

自身もそれを口に含んでみるが何も変なところは無い。首を傾げるとケノワが二口目を食べながら首を振る。

「いや、変なところはない」

そのまま食べてくれているがさっきの違和感が気になる。表情に変化は無いが雰囲気に関しては少しずつ分かってきていた。

「…何か他にあるんですか？」

じっと彼を見つめるとケノワは、短く息を吐いて言った。

「ちゃんと作れるようになった、と思ったただけだ」

「本当ですか!？」

レイダが顔を輝かせて訊ねると頷いてくれる。

「ああ」

「嬉しい! また作れる料理が増えたんですね」

自分の作った料理を褒めてもらえるなんて凄く嬉しくてレイダはフレンチトーストを一気に食べてしまった。

食べるのが早いケノワもほぼ同時に食べ終り珈琲を口に運んでいく。

決して嫌じゃない沈黙の中、レイダは牛乳を飲みながら考えていた。

こういう時ってエレノアたち恋人同士はどう過ごすのだろうか。自分たちもそうなるだろうか…?

そこで、また事実を再度思い出してレイダは息を大きく吸った。

まだ自分は彼にとっての存在の意味を聞いていないのだった。必要な存在であっても友達でもそれ以上の恋人でもないのだ。明言されてない。

目の前で珈琲をまだ飲んでいたケノワを見る。ちょうど飲み終えたのか皿などをまとめてキッチンに運ぶために立ち上がった。

レイダもそれに倣ってキッチンへ向かった。

今の彼なら答えてくれるだろうか？

「あ、あの」

「ん？」

ここで勇気を振り絞り訊ねるしかない。勢いが大切だ。

「ケノワ様は、私の事嫌いじゃないですよね？」

「ああ」

蛇口から水を出し食器用の桶の中に皿などを水につけていく手のひらを見つめる。

慣れた様子で自然にレイダの手からも皿を取って同じ様にしている。

「じゃあ、私の事好きなんですか？ その…異性として…」

「ああ」

全て浸け終わり掛けてあった布で手を拭くその動作のように、自然に返ってきたコトバにレイダは意味を考えるより前に反射的に口に出していた。

「だったら、キスしてくれますか？」

「ああ」

「え？」

そのまま同じ言葉で返ってきた肯定のそれに、ずっとケノワの手元を見ていた目線を上げる。

自分が言った内容と彼が返してくれた言葉がやっと脳内で一致したのだ。

ケノワと目が合って一気に頬が熱くなる。

対するケノワはいつもと同じ表情のままレイダの頬にかかっていた髪をそっと払った。少し冷たい指先が顎を捉え近いところに彼の綺麗な瞳がある、と思ったときには唇に彼のそれが重なっていた。軽く触れるようにして唇を奪ったケノワはすぐに離れていく。

「行ってくる」

「あ…いってらっしゃい…」

パニックを起こしている脳で習慣でいつも通りの言葉を返すと、ケノワはソファの近くにおいていた資料と鞆を手に取り玄関の方に消えていった。

呆然と立ちすくんでいたが、玄関が閉まるパタン、という音にレイダは我に返った。

そう、これこそ薔薇色に彼女が染まった理由である。

新しい知人

乾季の太陽はとても日差しが強い。

じりじりと身を焦がすような熱を降らせる。

このまま溶けてしまうのではないかと一瞬頭をよぎった所で自分が影に入った事感じて顔を上げる。そこにはケノワの背中がありレイダの日除けになってくれている。

嬉しくなり微笑む。

「ケノワ様、ありがとうございます」

歩きながら繋いでいた手を強く握りながら告げると少しだけこちらを見たケノワは頷いた。

「かまわない。あと鐘二つでも越せばアマゴイがあるはずだ」

目を細めてケノワは背後にある軍の建物を見た。通りを一つ挟んだ商店街からもその威厳溢れる建物は見えるのだった。

ケノワの長期休暇は結局、七日ではなく五日になっていた。それは上層部からの命令では無く、ケノワ自身で判断したものだ。

ケノワが居ない間にキファイも休みを取る事になっているが、外出制限と共に特別上級能力士官にのみかけられるシステムの違いで数日をキファイ付きの特殊補佐隊に預ける事になりそうだった。

いくら両者の認識が変わったからといってキファイの破天荒と天邪鬼が改善される事などはない。それを考えると自身がきつち

り彼と過ごした方がマシだった。休暇の後に彼に荒らされた職場を目にしたくない。

レイダもケノワにあわせて休みを取る事ができ、休みを利用して普段買えていなかった物を買出しに出かけていた。

「アマゴイが定時にされるのって凄いですよね…」

レイダと一緒に軍のほうを見ながら呟いた。

出身地のヤサは南部にある事で比較的スコールが自然にやってくる事があり、干ばつが予想される状況になるまではアマゴイが呼ばれることが無かった。それと比べ国の中央に位置するレアムドザインは毎日のように一定時間、雨を降らせる。

「アマゴイが無かったらここは砂だらけだ」

乾燥した大地に立つ王都は、建国後王家繁栄により今の場所へ移された。国の中央にて政権を取る為に。

「そうなんですか…でも、エレノアさんはアマゴイの雨が嫌いだって言っていました」

彼女も王都の出身ではないのだが、本当に体調が悪くなるらしく恨めしげに空を見上げている。

「だが、ライフはアマゴイだったはず」

「ふふっ、そうなんです。エレノアさんは『ライフの奴め、一生怨んでやる』ってよく言ってます」

恋人の仕事で降らせる雨に悪態をつくエレノアは少し子供じみていて、レイダを意外な思いにさせる。たまに呟く言葉も気になる『雨が降らないように、って思う事も大変なんだよねえ』嫌いなアマゴイの雨なのにエレノアは絶対降るなどとは思わないようにしているらしい。

やっぱり恋人が降らせているからだろうか？

「あ、リュウ特別補佐官さん！」

前方から声を掛けられて二人は顔をそちらへ向ける。

そこには落ち着いた雰囲気を持つ長い胡桃色の髪の少女が立っていた。

「ああ」

ケノワも返事をして二人は近づいた。レイダも少し後ろから近づく。

「休みか？」

「はい。リュウ特別補佐官さんも今日はお休みなんですねぇ、キフイも休みだって言っていました」

「ああ、そうだな」

ケノワも顔なじみなのか先ほどのまでの雰囲気のまま頷いている。彼女が後ろにいるレイダに気付いて笑いかける。

「彼女さんですか？ 初めまして、私は軍の中の食堂で働いてるアゲハっています」

「初めまして…レイダです。Sブロックの花屋で働いています」

更にアゲハが微笑んだ所で、彼女の腕の中から小さな声が聞こえる。

「アア」

ケノワの影に立っていたレイダからは視角になる所にその小さな生き物がいた。レイダが身を乗り出して呟く。

「赤ちゃん：アゲハさんの子供なの？」

自分と同じくらいの少女だけれど、子供がいてもおかしくない年齢だ。

「まさかあ、一番下の弟なの。ほとんど私が面倒見てるから親みたいなものだけどね」

一生懸命小さな手のひらをアゲハに伸ばすその仕草は可愛らしくてレイダも微笑んだ。

「可愛いっ、私が抱っこしてもいい？」

アゲハは手馴れた様子でレイダに弟を差し出した。レイダもそっと抱きしめる。赤ちゃんを抱きしめるのは昔、妹の面倒を見て以来だ。

なんだか赤ちゃんからは柔らかい甘い匂いがして嬉しくなる。

「名前は？ 何ヶ月？」

「アーフィ、今8ヶ月」

アーフィはレイダの顔を見てきゃっきゃつと声を腕の中で上げている。

「ケノワ様もアーフィ君を抱いてみませんか？」

妙に感心した様子でレイダを眺めていたケノワは自分に話を振られて首を横に振る。

「遠慮する」

レイダはケノワへ少し近づいてアーフィを見せる。

一瞬、ケノワと目が合ったアーフィだが「ふにゃう」と声を出して笑うが、ケノワは一步後ろに下がった。

アゲハは笑いながらアーフィのふっくらした頬をつついて、レイダからアーフィを受け取る。

「大人しいね」

「この子人見知りしないの、滅多に泣かないしね。まあ、誘拐とかされてもけろりとしてそうで怖いけど」

ケノワではなくレイダと言葉を交わしアゲハは去っていった。

今度、レイダの花屋に遊びに来てくれるという。

王都での友人が増えそうな予感だ。

彼女への思い

「ケノワ様：赤ちゃんの事嫌いですか…?」

ぼんやりと窓の外を眺めていたケノワはレイダにそう唐突に訊ねられて、目を瞬く。

「赤ん坊か?」

「そうです」

目の前に座るレイダはコクンと頷いて自分を見つめている。

「嫌いではないが…」

「苦手?」

「そうだ、私が近づくと大抵は大泣きされる」

「アーフィ君は笑ってましたよ」

「ああ、そうだが…」

「可愛かったですよねえ」

ただ、経験上は甥や姪など身内の子供達にはすこぶる印象が悪いらしく、できれば近づきたくないのは事実だった。

彼らの両親にさえ辟易しているのに、あのまん丸の瞳いっぱいに助けを呼ぶように涙を浮かべて訴える姿にこれ以上慄きたくない。

「…どう思う?」

レイダにどうしてもこの苦手意識がばれてしまったのか分からない。

「気付いて無いと思ったんですか？ アゲハさん達が居なくなつた時ホッとしてるのが分かりました。アーフィ君の前で緊張してましたよね？」

「まあな」

「ケノワ様の弱点ですねえ」

レイダはくすくす笑いながら窓の外へ目を向けた。

ケノワも再び外に目線を戻す。そこは速い速度で町並みや森が通り過ぎていく。

二人は国を横断する鉄道の汽車のボックス席に乗っていた。

向かう方向は西。

ヤサへ向かう汽車とは逆方向だ。

故郷へ帰ることはしたくなくても少しの遠出をレイダが望んだ。これまで王都に出てくるまでは、ほとんどの者がそうであるようにヤサでしか生活をしたことが無く、他の土地がどうなっているのか全く知らない為、観光をしたいようだった。

何故、西へ向かうのかというとエレノアのアドバイスだった。

ほとんど仕事以外のことに興味が無かったケノワは遠戦やキフィについての出張以外の土地にはいったことが無い。それだけでも十分な国内旅行ではあったが、レイダに案内できるような平穏な場所ではない。

今回はエレノアがどこかに行きたがったレイダに自身が住んでいた地方の観光地を教えたらしい。

休みの前日にきらきらした目でその場所へ行きたいと言ったレイ

ダはこれまでのどんな時よりも生き生きした歳相応の顔だった。
ケノワにはレイダが望むことを否定する選択肢は最初からないので、そのままこれから向かうメーティア行きの計画を立てたのである。

まだ薄暗い早朝からケノワたちを乗せていた汽車はメーティアの中心部にある駅に昼過ぎに停車した。二人は汽車から対して多くない荷物を手に降り立つ。

他の都市がそうであるように、メーティアも鉄道沿線に町が発展している。

「：綺麗な町ですね。森と町が共生してるみたいです」
「ああ」

レイダが心底感心した声で言った。

ケノワも同じ事を考えていたので相槌を打つ。

駅の建物自体はわざと木造の重厚な造りになっており、ホームから駅舎の奥に見えるのは駅前の道路から緑鮮やかに彩る街路樹だった。その隙間に主要な建物が鎮座していてさすが観光都市。

二人の出身地ヤサへ行く為に利用する都市の駅は沢山の建造物に囲まれ、工場なども多く見られた。

その雑多な雰囲気を知っているだけに一層思えることだった。

「ケノワ様もメーティアは初めてですか？」

「そうだ。この近辺は比較てき安定をしている地域だからな」

駅舎を出てレイダは街路樹の下に植え込まれている花々を確認す

るようにしながら歩く。

ケノワからすると、紫と黄色の二色のいく種かの花々がバランスよく並べられている事を把握することが精一杯なのだが、彼女のその瞳は真剣で歩みを止めてじっと観察を始めそうだった。

レイダの一直線は愛すべき所だが、真剣すぎていつの間にか逸れかねない。

「レイダ」

彼女を掴まえておくために右手を差し出すと、顔を一瞬にして明るくして腕に飛びついてくる。

「嬉しいですっ！」

本当に嬉しそうに手を繋ぐと幸せそうに笑みを広げる。

駅の近くにある宿もエレノアから教えられていたため、二人はまず荷物を置く為にそちらへ向かった。

エレノアのセンスは悪いものではなく、レンガ造りの牧歌的な建物の外装と思わずレイダが飛び跳ねた優しい家庭的な内装は素晴らしかった。

窓の外を見るとちょうど宿の裏に広がる森の入り口が見えるようになっていた。

二人分の荷物を持ってきていたケノワが窓際にある台の上に乗せると外を見るレイダの隣に立つ。

今日はこの部屋に泊まるのだ、隣りに居るケノワと。

——同じ部屋に。

今まで同じ家に住んでいても、同じ部屋で寝たことなど無い。それもこの二つ並ぶベッドの近さなど…そう考えてレイダの心臓は跳ね上がった。心の中で考えるな、考えるなと念じて平静を装う。なんでもない様子で外を眺めていたケノワはレイダに顔の向きを変えと言った。

「この森はヤサを思い出すな」

「は、はい」

声が一瞬変になったが何とか答えた。

「リュウ家のお屋敷の奥にある森と同じ種類の木が多い気がします」

「レイダ、屋敷の近くに來た事があるのか？」

ヤサ地方は広く幾つかの町が集まり形成されている。その中で一番発展している場所がヤサの豊かさの源であるが、そこを納めるリュウ家はその街からそれて外れの集落の町に屋敷を持っていた。ヤサの中でも自然が多い場所だった。

「…はい。私の実家もあの町にありますから、お屋敷に入った事もありますよ」

レイダはやはりケノワが思い出してくれない事に切なくなりながら頷いた。

「そうか…だからレイダからは故郷を感じるんだな」

ケノワはレイダの頭を撫でながら僅かに微笑みながら呟く、その

仕草と言葉だけでレイダの気持ちから一気に切なさなど消え失せる。過去など無くてもケノワは確かにレイダのことを思ってくれている。それが普段、人前では出さない表情で分かる。

目の前でころころと表情を変えるレイダが、あまりにも真剣な顔で自分に尋ねてきたのはつい数日前だった。

自分を異性として好きなのか、と。

ケノワとしては、この前から意思表示はしてきていた気がするのだが彼女に伝わっていなかった事が意外に思った。

そもそも何とも思わない女を自室に何ヶ月も滞在させるほど金銭的余裕も心も広くない。彼女を助け出す為に普段関わりが無い者たちにまで助けをもらい、奮闘する事も無い。

キフィやライフたちが揶揄するくらいなのだから伝わっていてもおかしくないはずなのだが…。

何故伝わってないのか、それが自分が普段からちゃんと喋ることをしないからだ、という事を相も変わらず分かっていなかったりするのが彼らしいところだ。

「レイダ」

呼ぶと嬉しそうに顔を上げる彼女を見ると何度も名前を呼びたくなる。今も思いに耽っている様子だった彼女が微笑む。

自分を見上げている小柄なレイダに軽く口付ける。

なんとなく言葉にするより彼女にはこちらの方が伝わる気がした。

「ケ、ケノワ様…」

耳まで真っ赤になってしまったレイダは途惑った様子でたじろく。

「嫌だったか？」

レイダは慌てて首を横に振る。

仕事に行く為にすぐ出てしまったが、先日もこうしてレイダは真っ赤になったのだろうか。以前自分を抱けとまで言っていた彼女と同一人物の反応とは思えない。

あの時は相当切羽詰っていたのだろう。

今の反応が本当のレイダだ。

「そろそろ外にいこう、観光するのだろう」

「はいっ、行きたいです」

何とか頬の赤みをひかせたレイダを連れて部屋を出た。

洞窟

宿を出て歩き始めた方向は町の中心部ではなくそこから逸れていく郊外のほうだった。

何度も自然に差し出されるケノワの手ひらは、無骨な手ではなく軍人のものとは思えない優しいものだ。

いくら避暑地であるメーティアでも、乾季の今の時期ではきっと手を繋ぐのも暑苦しいはずなのにしっかりと自分を引っ張ってくれる。

宿の裏に広がる森の中大きく散策する遊歩道があった。そこを歩くと森からの少しひんやりとした風が頬をくすぐる。

淡々と森の中を歩く。

ただそれだけでなんだかとても幸せな気持ちになっている自分にレイダは驚く。何にも悩まずただ今を噛み締められる幸せさ。ここ数年味わった事がなかった。

「もう少しで日が暮れるな」

「…はい」

赤みを含んだ木漏れ日がキラキラと足元を揺らす。

顔を上げて空を見上げると高い木々の枝の狭間から朱色に染まり始めていた空が見えた。

立ち止まったレイダにあわせて歩みを止めたケノワも空を確認しながら今歩いてきた道を見返した。

二人の横を同じように観光なのか、人々が二人の向かっていた方向へ歩み去っていく。

「疲れてないか？」

レイダは目を瞬かせて頷く。

「大丈夫です」

幸せそうに、にこりと微笑みレイダは答えを返す。

「これからがこの観光の本番ですから」

レイダが再び歩き始め、ケノワも引かれるようにして足を動かす。二人が再び森を歩き始めて四半刻ほどたった所で立ち止まった。ちょうど完全に日が暮れたタイミングだった。

宿の主人から借りてきていたランプへ火を入れるかどうか話していたところだった。

目の前に洞窟が大きく暗闇の口を開けて出迎えている。物々しい雰囲気にはレイダが怖じけて一歩後退さる。

「だい…」

ケノワがレイダに声をかけようとしたタイミングで大きな声が響く。

「あっ、お客さんですかぁー？　だいじょうぶですう？」

振り返ると大きめのランプを持った若い男二人が洞窟の中から出てくる。彼の持ったランプは明るく、全員の顔を浮かび上がらせた。

「この洞窟の案内人のバンです。今日はお客さんが少ないですら、ゆっくり見れますよ」

この地方の衣装なのか黒い大きな布を器用に巻きつけたかのよう
なゆったりしたズボンと頭から被る様な白いシャツをきてバンは快
活に笑った。一緒に出てきた男は目礼すると洞窟の入り口にある事
務所のような小屋に入っていた。そのことで明かりが灯り洞窟前
が少し明るくなる。

「この洞窟は初めての人が入ると危険ですから、メーティアの公認
ガイドが案内してるんですよ。今回は僕が案内させていただいても
？」

「ああ、頼む」

ケノワの返答に目を輝かせてバンは元気によりしくお願いしま
すっ！と頭を下げる。

二人を連れて大きなランプの明かりを頼りにバンは歩き始めた。
洞窟の入り口は整備されてるのか歩きやすかった。

「お二人はどこからいらっしゃったんですか？」

バンは無邪気な調子で尋ねる。

「レアムドザインからです」

レイダが答えると、バンが凄い勢いで振り返った。ランプが揺れ
てカランカランと音を立てる。

「王都?! 本当ですかっ、彼女さん! 王都からっ!？」

「そ、そうですけど…」

バンの大きな声が反響するのでレイダはびくびくしながらケノワの陰に隠れるようにして返答する。

あまりにレイダが怯えるので、ケノワも思わずレイダを背後へ隠して彼を見返す。

「何だ？」

ケノワのキフィさえ凍らせる冷たい視線にバンは一瞬怯んで興奮していた体を落ち着かせる。因みにレイダは背後に居てこの顔を知らないままだ。

「…すみません。思わず…」

バンはしどろもどろで答えてしゅんとしてしまう。

「あの、本当に何かあったんですか？」

大人しくなったバンにやっとケノワの背後から出てきたレイダが訊ねる。しっかりとケノワの腕にしがみついていたが。

「…はい。ああでも、帰りに歩きながらお話します。すみません本当に騒いじゃって」

反省しながらランプを持ちなおしバンは歩き始めた。

「あ、お二人のお名前伺っても良いですか？」

「ケノワとレイダ」

ケノワが短く答える。

「わかりました。」

：そこ、気をつけてください。これから少し地下に潜っていくので足元が険しくなります」

的確にランプの明かりで照らして注意を促す。その顔は既にプロの顔だった。

足元は少し湿り気を帯び始めている。

洞窟の入り口はかなりの大きさがあったが奥に行くほどに天井が近づいて離れてを繰り返していく。バンやレイダは小柄でまったく影響なかったが少し平均より高いケノワはたまに頭を打ち付けそうになりながら歩いた。

誰しものが無言で歩く音が反響していく。

「到着しました」

唐突にバンが足を止めて二人を振り返る。

「え、着いたって…？」

まだ二人には洞窟の途中にしか感じない。

ランプのみが唯一の光となりほのかに三人の周りを照らすだけだ。

「ここからはランプの灯りは消します。そうしないと見れませんから。お二人とも目を閉じていてください」

バンの言葉にレイダは躊躇いながら瞼を下ろした。

カチャンというランプの灯りを落とす音が響く。それと一緒にピチョーンという水の落ちる音を聞いた気がする。

「どうぞ目をあけて見てみてください。」

光源

飛び込んできた光景にアツという間に引き込まれる。

「幻想世界へようこそ」

意識の外でバンが小さく囁くのが聞こえた。

青白い光りの粒。

降り注ぐようなきらめき。

まるで星空が目前まで迫るような美しさ。

頭上、少し高めの位置にあるすぐ横のむき出しの岩の隙間で繰り返し呼応するように明かりを灯す、すぐ足元にまで迫っていたこの洞窟の宝石たちを抱く泉。

ただそこ輝くだけでなくそれはふわりと舞い上がり、水面をすーっと移動さえしていく。

泉は不思議な色に発光している。

自らの周りを優雅に照らし出す彼らに夢を見せるように、美しい青碧色の濃淡に染まる。

ピチヨン：

遠く上の方から水滴が泉へ落ちる。

幾重もの波紋を広げていったそれに反応をするように一斉に沢山の光たちが飛び立つ。

光の洪水。光、光、光。

見えていなかった高い泉の上が明らかになる。
首が痛くなるほど上を見ても天井に当たる部分は見えなかった。

呆然とその光景に魅入られていると、右手を強く握り締められ隣に立つ彼女に視線を向ける。

一心に目の前の光景を見つめるレイダは興奮した様子だった。

「綺麗…です」

レイダもケノワを見上げて微笑む。

「こんな素敵なるものをケノワ様と見れて本当に幸せです」

「ああ」

ケノワもゆっくりと微笑んだ。

薄っすらと泉の不思議な色が移りこんだ幻想的な微笑みにレイダの頬が一気に染まる。

飛んでいた光が再び戻ってくる。

その中の一つがレイダの肩の上に乗る。一つだけだと儂い光をなんとか感じさせるだけだ。

「…ど、どうしましょう？」

肩に乗ったそれに動揺して声を出すと、後ろから声が飛ぶ。

「そのままにしてあげてください。ここから僕達が去るときには勝手に飛び立ちますから」

バンが声を落としてアドバイスする。
レイダが振り返ってみるとバンが頷く。

「あの、この子たちは一体何なんでしょうか？」

レイダも光たちを刺激しないように訊ねる。

「あれ、ご存じないですか？」

「はい。メーティアの洞窟で凄く綺麗なものが見られるとだけ聞いてきました」

「そうですか……彼らは土蛍の一種です。

ただ、珍しい種類でこの泉のみでしか生息しません。まあ泉は地下で繋がっていて他の洞窟にもいますが、結局はこの水があるところだけです」

「土蛍なのに水のある所に居るんですか？」

レイダは首を傾げる。

彼女が知る蛍の認識は広大な草原の土を生息地とするというものだ。実際レイダは蛍を見るのは初めてだったが。

「ええ、それもこの蛍の特殊性ですね」

バンの説明を受けて更に目を凝らすようにして二人は蛍を見つめた。

「そろそろ、行きましようか？」

「え、もうですか…？」

レイダが名残惜しそうにする。

「ええ、すでにここに入って半刻は経ってますからね」

バンが簡単に答えた言葉にレイダはギョツとする。

「そんなに…まだ見たかったのに」

あまりにも夢中でまだ四半刻も経っていないつもりだった。

「また、いつか来れば良い」

隣りからケノワにそう言われて頷く。少し甘えて訊ねてみる。

「連れて来てくれますか？」

「ああ」

すんなりケノワが頷いて嬉しくなる。

「わかりました。我慢します」

「では…失礼します」

バンが手元に持っていたランプにさっと擦ったマッチの火を入れると、一瞬にして先ほどの光の洪水は掻き消えてしまった。

「…消えてしまった…」

ぱたりと蛍たちは瞬くのを止めて息を殺すようにしている。

「彼らは光に敏感です。僕らが歩き去ればまた元に戻るんですよ」

バンが誘導しながら再び歩き始める。来た道を引き返すこと無くそのまま歩き始める。

「引き返さなくても大丈夫なんですか？」

「ええ。入り口から入ってくる他の人たちと擦れ違う事無くこちらから出られるようになってますから…」

レイダをちらりと振り返りながらバンは答えた。

しばらく険しくなった洞窟の道のりを淡々と歩き、やっと歩きやすさが出てきた頃バンが二人に訊ねる。

「あの…行きがけの時の話なんですけど…話しても？」

二人が頷くと声を落としてバンが話し始める。

洞窟の先は既に薄暗い程度で前方に出口がある事を示していた。

「お二人は、王都で何の職業をされてますか？」

二人は一瞬目を合わせてレイダが先に口を開いた。

「私は、花屋で働いてます。まだ仕入れとかは任されてませんけど…」

「花屋ですか…いいですね。ご実家の花屋なんですか？」

「いいえ、私はヤサから出て来たばかりですから」

「そうですか、王都で職に就くことができるって事ですね」

うんうんとバンはしきりに頷いて、ケノワの方を窺う。

「ケノワさんは――…軍の方ですよね？」

レイダはぎょつとしてケノワを見上げたが、平然とした様子でケノワはバンを見返していた。

「…」

「その身のこなしや雰囲気は普通の仕事をしてる人ではないです…僕はこれでも沢山の人を案内して来ましたから職業なんてすぐ見分けられます」

洞窟の入り口まで辿りついたところで、バンは足を止めてケノワと向き合った。

「そうなんですよね？」

「…どうして、そんな事が知りたい？」

淡々と返されて、それでも否定の言葉ではないことを悟りバンの顔が輝く。

「僕、軍に入りたいんです」

早口にバンが告げた。

「軍人に…？」

レイダがケノワの手をしっかりと握り締めながら訊ねる。

「ええ。それもこのメーティアの自治軍じゃなくて王都の本部に入

りたいと思ってます」

「何故？」

「それは――…」

「バン！！」

大声でバンを呼ぶ声が聞こえて彼は口を噤んで振り返った。

「お前まだ言ってるのか、軍人になりたいなんて」

「いいだろ、僕が何になりたくても。ニックはこのメーティアで観光案内してればいい」

「何?!」

ニックといわれた男は先ほど入り口で会った男でバンより少し上に見えた。

バンを睨みつけたが、二人の目の前だという事を思い出したのか振り上げかけていた拳を広げた。

「…ここは暗いですから移動しませんか」

夢見るオトコ

洞窟を抜けると先ほど三人が入った所よりも少し距離を置いた所に出てきていた。

入る時は暗闇になっていて気付かなかった場所だ。

ちょうど入り口と出口の中間に事務所は配置されていた。

数人常駐している案内人はレイダたちと入れ違いで洞窟に入っていた。

事務所に通された二人は、普段休憩室に使われているだろう奥へ案内された。

「ここで話すより…僕、早番でちょうど仕事上がりなんですけど、お二人は夕食取られました？」

「まだですけど」

「じゃあ僕がいいお店を案内しますよ。そこでさっきの話の続きを聞いてもらえればと思うんですけど」

少し考えた様子でケノワはレイダをみた。

「どうする」

「えっ、ええっと…ケノワ様がよければ私はバンさんのお話を聞いてもいいかと思えます」

急に意見を求められて答えると、バンが嬉しそうに笑う。

「私は構わないが：店も地元の者が一番知ってるだろう」

「ありがとうございます」

「じゃあ、俺も参加させてもらいます」

後ろにいたニックがそう告げるとバンは顔を顰める。

「なんでニックが来るんだよ」

「お前が何考えてるのか聞こうと思ってな。ケノワさん、いいですか？」

「まあ、どちらでも」

ケノワの一言で決着がついたのか四人はそのまま、メーティアの繁華街に向かう。

来るときに使った森の遊歩道ではなく最短で森を抜ける小道を歩き、多くの観光客で賑わう食堂街を通り抜ける。

喧騒を離れ路地の少し奥まった所にある年季の入ったケノワたちの前にいた二人は足を踏み入れた。

「ここです。すっごくおいしい料理を出してくれるんですよー」

バンが嬉しそうにメニューから幾つか選んで早速四人分頼んだ。

すぐに四人分の飲み物が届き、ニックとバンがこの地方で出来たぶどう酒を手にした。

「ケノワさんも飲みませんか？」

「いや、私は遠慮しておく」

レイダ同様にアルコールの入っていない果実絞りを飲みながらケ

ノワは冷静に断りを入れる。

そうですか、といいつつケノワとレイダの前に座った二人はおいしそうに酒を口にする。

ほとんど一気飲みをしたバンは上機嫌に話し始める。

「あの、さっきのどうして軍人になりたいのかって事なんですけど」
「ああ」

「ただの軍人じゃなくて、能力者と関わる仕事をしたいんです」

じっとバンの瞳を見つめるが、嘘は含まれていないようだった。

「能力者」

レイダが繰り返すとバンは頷く。

「そうです」

「またそれかよ、お前なんかが上級士官と働けるかよ」

「うるさいな、俺は聞いたんだ一般兵でも優秀だと能力者と働く事が出来るって。本当なんですよね、ケノワさん？」

「機密情報を教えてくれるはず無いだろ」

ニックは馬鹿にしたように口を挟む。

「能力士官の補佐は能力を持たない一般兵がこなす。機密でもなんでもない事実だ」

あっさりとケノワは答えを返し、奥から運ばれてきた子豚の丸焼きをテキパキと切り分ける。

子豚の丸焼きには地元で取れた新鮮な根野菜が蒸されて一緒に盛

り付けられており、肉と一緒に別に運ばれた小麦を水と練って焼かれた皮で包んで食べられるようになっていた。

憎らしいくらい完璧に切り分けた中からケノワはレイダに一つ包んで手渡した。

「ありがとうございます」

満面の笑みで受け取ったレイダは嬉しそうに口に含んだ。

「僕達が食べ方教える必要無いですね…」

ケノワの手捌きに話を中断してバンが感心する。

「運ばれてきて物を見れば分かる」

四人とも次々と運ばれてくる食料に手を伸ばす。

サラダに何か怪しげな紫色のドレッシングを振りかけながらバンがケノワを見る。

「ケノワさんは王都からきてる軍人さんなら、本部に所属してるんですよね？　どんな仕事をしてるんですか」

「それは機密だ」

「えっ、そんな事言わずに教えてくださいよ」

バンが情けない声を出す。

「…無理だな。ただ、能力者と働くと危険な場所に派遣されるだけだ。安易に勧められないな」

ケノワが自身の経験も多大に加味して告げる。

「ほらな、ルカが心配するだけだぞ。バンお前はここにいるのが一番だ」

バンの背中をニックが叩く。

「ルカだって僕の話なら聞いてくれる」

「あの、ルカさんって誰ですか？」

突然出てきた名前にレイダが二人に質問すると声をそろえて言葉が返ってくる。

「ルカは、俺の妹」

「僕の奥さん」

「…つまり、ニックさんの妹さんでバンさんの奥さん」

レイダはまどめながらもついバンを見つめてしまった。

バンはどう見ても結婚しているように見えなかったのだ。ニックでさえケノワよりも少し上くらいにか見えない。

「あは、やっぱり僕って頼りないのかな？ これでも二児のお父さんなんだけど」

バンの言葉に今度は本当に驚く。

「ルカとバンは若くてそそっかしい夫婦だけど、何とかやっていくくらいにはなってます。まあ、こいつが王都に行きたいと言いださなければ、ですけど」

「ニックは分かってない。僕はどうしても王都の軍に入りたいんだ」

「どうして、能力者との関わりにこだわる？」

「関わりたからです」

ケノワが再度訊ねても、切り替えしも早く真面目にバンは答える。

「運動神経などはもとより：一般兵の中でも補佐する能力や行動予測の部分が評価されて、能力者付きに選抜されると聞く。もし、本部の軍にはいる事が出来たらそこに重点を置く事だな」

ケノワが、バンの知りたかった答えを魚の素揚げを取りながら言う。

バンがケノワの言葉を咀嚼するまで一拍遅れる。

「ありがとうございます。僕、必ず王都へ行きます！ その時はよろしく願いしますね！」

かなり元気にぶどう酒のおかわりを頼むバンの顔にはやる気が浮かんでいた。

現実

「あーあ、こいつ酒そんなに強くないくせに」

呆れた声を出してニックはバンの頭を突く。

バンの体はテーブルの上に乗っており少し幸せそうな顔で眠っている。

起きないバンを確認するとニックはケノワを見る。

「どうして、ケノワさんはバンに危険な軍へ勧める言葉を言ったんですか？」

「…バンが望んだ事だ」

「それでも貴方は最初、勧めないと…こいつはただ単に能力者と働きたいんじゃないんです…」

苦しそうにバンの頭に載せていた手を離す。

「バンの…娘がそこにいるからです。

一歳を三月ばかり過ぎた頃に軍の調査員に連れて行かれてもう三ヶ月経ちます。バンはその時から自分も軍に行くと言い続けてるんです。娘の近くに行く為に」

「一歳…」

連れて行かれるには小さすぎる子供の年齢にレイダはショックを受ける。軍はいくら国の為だからと親子を切り離すなんて信じられなかった。

レイダを横目にケノワは口を開く。

「そういう理由だろうと思っていた」

「それなら、どうして」

「軍の能力者付きの補佐官が何も感じて無いと思うか？ 能力者の補佐官や後方支援には身内に能力者がいたものが多い。それはそれだけ彼と同じ環境の者が多いということだ。この思いを分かる者が能力者の近くにいた方がいい事もある」

能力者はこの国に沢山いる者ではない。

ほんの僅かな人口だ。

それでも、その能力者たちにも家族はある。沢山の愛情を注がれて本来は育まれていくはずだった命は軍によって運命を定められてしまふのだ。

「それでも：俺は言って欲しくなかった。こいつにはここにいて欲しいと思う。大事な義弟だから」

再び優しく撫でるようにニックはバンの髪を触る。

レイダも思いを巡らす。

いつも優しいライフや、ケノワの上司キフィもバンと同じように家族達に悲しい思いをされたのだろうか。

高い能力を持つ事は良い事ばかりではないのだと、改めて気付かされる。彼らのあの明るい性格や思いやりとは自らの経験を乗り越えた優しさなのだ。

バンを引きずるようにして抱えて家に帰ると言うニックを店の前

で見送り、彼から教えてもらった順路で宿まで歩く。

少し前を歩くケノワにレイダはいつもの様に手を繋ごうとしなかった。

「どうした」

声をかけると少し思いつめた顔でレイダはケノワの隣りまで来る。

「みんな…そうなんでしょうか？」

何が、と訊ねなくても能力を持つ子供の扱いを指している事など表情を見れば分かる。

「レイダも、子供の頃に何度か検診を受けただろう…それが事実だ」

このマムル王国の子供ならば、1歳から10歳までの間に必ず2年おきに検診が行なわれる。

それは、能力者の館から派遣されてくる調査部の大人たちだった。能力者のほとんどが物心つくころには能力の発現が確認され、遅くても10歳までに感知される。そうして見つけられた国家資源扱いの彼らは徴兵の名の下にレアムドザインに連れて行かれるのだ。

「なんだか、そんなのは悲しいです」

俯き加減に呟いたレイダは、ケノワが何か告げる前に勢いよく顔を上げる。

「それでも、現実になんかそういう子供達や能力者の人たちで成り立っているのならば、そんな辛いことがなくなるように頑張るしかないんですね。ケノワ様は凄いです。そんな人たちとお仕事をされて、ち

やんと分かっているんですから」

「ああ」

真っ直ぐに見つめられてケノワは短く答えることしか出来なかった。

それでもレイダは続ける。

「何も出来なくても、現状を知らないというのは凄く恥ずかしい事でした。これからは何が自分達の生活を支えているのかというのをよく学ぼうと思います」

短い間にレイダが出した答えに、驚きながら頷く。

ヤサの中でも田舎に位置するルンデの町では、どんなに豊かになっても国の根幹がどうなっているかよりも明日どう生きるのかばかりを見てしまう。

そんな所にいたレイダにとって国として行なわれる能力者徴兵に真剣に考えたのだろう。

「そうだな、レイダになれば出来ると思う。よく考えたな」

自分の肩よりも低い所にある頭を撫でると、上目遣いに自分を見上げたレイダが頬を染めて微笑む。

レイダのてのひらを握り歩き始める。

「ふふっ、ケノワ様からこうやって手を握ってもらおうと嬉しくなります」

少し跳ねる様にして歩きながら、上空に広がる星を見る。

「世界は大きい、難しくて悲しい事も沢山だけど、それでも私は今が幸せです。初めての旅行なのに難しい事考えちゃいました」

「ああ、けれど悪いことじゃない」

動揺

宿に戻ってくると受付にいた中年の女、きっと宿を切り盛りしている奥さんがにっこり笑う。

「どうだった？ 洞窟の蛍を見てきたんだろう」

ほとんど初対面なのにその口調が心地よくてレイダは笑って答える。

「とても綺麗でした。それに案内人の方とも仲良くなれました」

「それは良かったね。案内人達はこのメーティアの財産だから、仲良くしてもらえると嬉しいよ」

「いい人たちでした」

レイダの後ろに無表情に立っていたケノワに奥さんの顔が動く。

「旦那さん、お湯は準備してあるからすぐ出せるようにしようか？」

「はい」

ちょっといたずらっぽい顔で奥さんは続ける。

「二人分にするかい？ 可愛い奥さんと一緒に入れるくらいの湯船だけ」

「へっ？ 二人？ 奥さん？」

レイダが驚いて間が抜けた声を出す。

耳まで真っ赤になってあたふたするレイダは泣きそうな顔で振り返る。ケノワは溜め息を吐きつつレイダの頭に手を載せ冷静に言葉を返す。

「いいや、一人ずつ。二人目の時には頼みにいきます」

「そう？ 広い湯船が自慢なんだけどね。じゃあ、部屋の鍵ね。あと五分くらいでお湯は出るから」

少し残念そうに言い、早速後ろの控え室のお湯番に声をかけている。

「行くぞ」

未だに固まっているレイダの腕を引いて二階に上がる為の階段へ向かう。

部屋に入るとレイダはさらに動揺して椅子に座る。
少しランプの灯りが暗めで橙色の暖かな色が部屋の隅々で灯る。

昼間にここに着いた時よりも緊張がする。

先ほどまでは観光やバンたちの話ですっかり自分とケノワが同じ部屋でこれから過ごす事を忘れていたのに、奥さんの言葉でばっちり意識させられた。

それに一緒にお風呂なんて想像しただけでも顔から火が出るかと思った。

今も心臓がいつもの倍くらい働いている気がする。

荷物を解いていたケノワの背中を見ながら、ケノワは本当に大人なんだなあとと思う。

さっきの奥さんのセリフをあっさりとかわすなんて凄い、ケノワ様ってやっぱりかっこいいんだ。

それに：私達って夫婦に見えるのかなあ？ そうだったら嬉しいなあ。

急にくるとケノワが自分を振り返ったので、何事かと思ったが彼はいつもの顔のまま口を開く。

「夫婦に見えたんだろう、そう言われたのだから」

今まさに自分が考えていた事に答えが返ってきて、レイダは一瞬ぼかんとしてしまったが、それは自分が声に出して考え事をしていた為だと気付く。

少し怪訝な表情でケノワはレイダの顔を見つめる。

「そろそろ湯が出るから先に入るといい」

そういいながら部屋の浴室にケノワが入っていった。出るようになった湯を張ってくれているようだった。

溜め息を吐く。

どこまで独り言が聞かれたのが全く分からない。人に、それも本人に聞かせるにはかなり恥ずかしい事を考えていた。

「最悪…」

「何が最悪なんだ？」

「え」

顔を上げると自分の前にいつの間にか来ていたケノワが自分を見

下ろしている。そっと椅子に座っているレイダの目線にあわせて屈むと顔を寄せる。

「体調が悪いのか？」

すぐ近くにケノワの顔があって頬が熱くなる。そして一刻も早くケノワの元から離れる事を体が何故か要求する。

「い、いいえ。大丈夫ですっ！ 凄く元気です！ 少し観光ではしやぎ過ぎちゃったかなあって思っ！」

「そうか、風呂の準備が出来た。使っていい、それから……」
「分かりました！」

立ち上がったケノワの隣りを勢いよくすり抜けると、レイダは荷物から着替えを取り出して浴室の扉に突進していく。

「先に入りますね」

慌てて閉め、前を見た瞬間、

「によええっ——！！?？」

奇声を上げてしまった。吃驚して転倒する。

知らない感情

「レイダー!？」

大きな声ではなかったもののしっかりと扉の向こう側にも聞こえていたらしく、まだ鍵を閉めていなかった扉を躊躇いも無くケノワが開ける。

「どうした？」

「っう、ちょっと驚いてしまって…」

尻餅について涙目でケノワの助けを借りて立ち上がる。

入ってすぐにあった自分を驚かせたものを恐る恐る見る。何度見ても怖い。

「さっき言ったのを聞いてなかったのか？　ちゃんと入ってすぐに絵が描かれた仕切りの布があると」

「すみません」

ケノワから恥ずかしさで逃げる事ばかり考えてケノワの助言は一切耳に入っていないかった。

「でも、なんで蛇が…」

「この地方の守り神として崇められているのが、大蛇神らしい。こ
うやって風呂などから災厄を祓うんだ」

「そうなんですか…」

ちよつと情けなくなつて俯くと、急に肩を掴まれる。気付いた時

にはケノワの腕の中に収まっていた。

「怖がるな」

優しく耳元で囁かれて背中にゾクリと甘い何かが走っていく。

それでも、ケノワの言葉に蛇なんてただの絵なのだから大丈夫と
思うことが出来た。

「はい：もう大丈夫です。布に絵が描いてあるだけですよね、あり
がとうございます」

体を離すと何か言いたげな顔でケノワが自分を見下ろし、小さく
息を吐いて浴室を出て行った。

今度はちゃんと鍵を閉めて服を脱ぐと布を潜り抜ける。

奥さんが言っていた通りに大きな湯船だった。

ケノワの家にある湯船の3倍くらいありそうだった。

「温泉だって言ってたなあ、気持ちいい」

ゆっくりと湯に浸かりながら肩に湯を掛けてビクリと手を止める。
さつきケノワに抱きしめられる瞬間肩を掴まれた。

そこから、彼の声も言葉も体を離れた時の表情も全て違うように
感じた。

それがなんと言う言葉で表されるのか、どういう感情なのか恋愛
経験値ゼロのレイダには分からなかった。

それでもケノワは大人だけじゃなく男の人なのだと赤面し、のぼ
せそうになる位の動揺は残った。

「うう、お風呂から上がったらどうしよう…」

小さく呟いてレイダは湯に頭ごと顔を沈めた。

浴室から出ると、ケノワがスタスタと出て行こうとする。どこかに行ってしまうのかと声をかける。

「あの…」

「疲れているだろう、先に寝てなさい。私は湯を頼んでくるから」
確かに奥さんにケノワがそう言っていたことを思い出して頷く。

「あ…はい。分かりました」

ケノワは先ほどまでと全く変わりなく優しい。

そんな事を考えながら少し伸びてきた髪を乾かして、化粧水をつける。

そうしている間にケノワが戻ってきて、浴室に入ってしまった。

「どうしようかなあ…」

ケノワは寝ているように言っていたけど、自分だけ先に寝るのは少し悪いような気がした。

けれど、起きてるとまた怒られるような…。

「いいや、横になってよう」

本当はいっぱい話がしたかった。

バンの話も今日はいっぱい聞いたけれど、ケノワの事がもっと知りたい。

ケノワが出てきた時に声をかければいいのだ。

怖がるな

少し時間を戻して。

湯を張り終わって一度確認の為に扉から振り返ると、いかにも恐ろしい大蛇の染付けが目に入り眉を顰める。

レイダならば必ず怖がるようなりアルさだった。

浴室から出ると、レイダは先ほどの椅子に座ったまま何かを考え込んでいる。

さっきの様子からすると緊張したままなのだろう。先ほどからかわれたばかりなのだから。

声をかけようと近づくが全く気付いた様子は無い。

「最悪…」

今にも死んでしまいそうな声に驚いて思わず訊ねる。

「何が最悪なんだ？」

「え」

今更目の前に自分がいる事に驚いて大きく見開かれる瞳。

「体調が悪いのか？」

屈みこんで顔色を確認すると、大丈夫や元気という返事をして立ち上がるようにするレイダに告げる。

「そうか、風呂の準備が出来た。使っていい、それから：蛇の絵があるから、気をつけるんだ」

「分かりました！」

勢いよく自分の横をすり抜けながら焦った様子で風呂に入る準備をしている。

避けられてる…？

「先に入りますね」

浴室に入っていくレイダを見ながら考える。

どうして自分が避けられるんだろうか。

先ほど自分を見上げたレイダの顔を思い出す。自分では分からない。そうなるのかなだか、残念な気持ちになる。

「——っ！」

レイダの悲鳴が聞こえて慌てて浴室の扉を開けた。したたかに腰を打ち付けてレイダが涙目で自分を見上げている。

どうやらケノワの助言は役に立たなかったようだ。

立ち上がらせると、レイダは恐る恐るといった顔で蛇の絵を見ている。その顔が先ほど自分に見せていた顔と同じに見えた。

少し燦る物を感じつつ、彼女が疑問を口にした蛇にかけてある理由を説明する。以前、この地域の士官が話していたことをそのまま告げた。

「そうなんですか…」

ただでさえ小柄なレイダがしゅんとして、顔を俯かせる。それはまるで自分に怯えているような気がして思わず手が出ていた。

怖がらせないように肩を掴み抱き寄せる。怯えた顔も緊張した顔も見たくない。

驚いて身を硬くしたレイダに囁くようにゆっくり言う。

「怖がるな」

一瞬レイダが緊張した後、力を抜いたのが分かりほっとする。

「はい…もう大丈夫です。布に絵が描いてあるだけですよね、ありがとうございます」

「…」

レイダの言葉にほとんど、いや全く意味が伝わっていなかった事にやるせなくなる。

ここで、この意味はな、と説明するわけにもいかず溜め息をついて浴室から出るしかない。

自分が充分人付き合いが苦手である事は自覚していた。

そして色恋について疎い事も。

日常生活の大体のことは諦めて受け流してきた。

けれど、まさかその自分がこんなにも身近な人に対して愕然とする事があるとは思わなかった。キフィに対してだったら悩みもせずに速攻で忘れ去れるのに…。

浴室から出てきたレイダと入れ違いで、ケノワは部屋から出るために扉に立つ。

「あの…」

温まったのか頬を上気させて、濡れた仔犬のようにレイダが自分を見る。

「疲れているだろう、先に寝てなさい。私は湯を頼んでくるから」
「あ…はい。分かりました」

レイダはこくと頷く。

素直な様子にやっぱり良く分からなくなる。

受付から戻って来た時に顔に化粧水らしきものを付けていたレイダは、ケノワが浴室から出てくる頃にはベッドで丸くなっていた。顔を覗き込んでも全く起きる気配が無く、相当疲れていたのだろう。

顔にかかる髪を取ってやる為に手を伸ばしかけて、そのあまりにも無防備な寝顔に思わず長い溜め息が漏れる。

念のため、と思いつつレイダに背を向けて隣のベッドに入ったケノワだった。

たまごの扱い方

遠くで鳥が鳴く声で目が覚める。

薄っすら開いた瞼の先には、窓側を向いて横になっていたのでカーテンの隙間から森が広がっていた。薄暗くまだ夜が明け始めたばかりだった。

「…」

布団に潜りながらぼんやり自分が居る状況に関して考える。

昨日、自分がケノワを待ちながら寝てしまったことを思い出して呆然とする。

おやすみなさい、と挨拶さえ出来ていないなんていつもより酷い気がする。

くるりと寝返りを打つとすぐ目の前にケノワの顔があり驚いてしまう。

けれど、ケノワの瞼は閉じられたまま。

明るい栗色の髪と同じ色合いの睫毛や綺麗に通った鼻筋を見つめる。普段ケノワの顔を長い事直視する事なんて恥ずかしくてできない、改めてみれば見るほど整っている。

自分のあまりの平凡さが恥ずかしい。そんな事を考えていると、すっとケノワが目を開いた。

ブルーグレーの瞳とぼつちりと目が合って逸らせなくなる。

「…起きたか」

「お、おおおはようございます」

すぐ近くで見つめ合ったまま何とかレイダは挨拶をする。

少し呆れた様子でレイダを見つめたケノワが先に目が逸らした。体を起こしベッドの横にあったランプに灯りをつけてケノワはレイダを見下ろす。

「あの、なんで同じベッドに寝てるんでしょうか…？」

レイダも恐る恐る訊ねながら体を起こすと、ギシッとベッドが音を立てる。

「覚えてないのか？」

「えっ」

昨日、ケノワを待ちながら布団に入った所から今、目を覚ますまでの記憶は一切無い。

記憶に無い何かがあったのだろうか？ それこそ一緒に寝るような…？ そこまで想像して顔が一気に熱くなる。

狭いシングルベッドに大人二人が居るのでかなり窮屈な空間になっている。

ケノワがベッドから足を下ろすと立ち上がる。

なんだかまた置いていかれそうな気がして早口に答える。

「ごめんなさい。覚えてないです…」

「だろうな」

小さく息を吐いてケノワは隣りのベッドに腰掛ける。

「昨日の夜、自分がどちらに寝たか覚えてるか？」

言われて首を傾げる。ケノワを待ちながらベッドに入った。確か…

「あれ？ ケノワ様が今、座ってるベッドです」

どうして自分がここに居るのだろうか？ 寝起きとは思えないし
っかりした顔でケノワは自分を見つめている。

「私がそのベッドで寝ていたらレイダがトイレに行った後にそこに入ってきた。一度こちらに移ったんだが…」

自分が座るベッドを叩くケノワにレイダは嫌な予感がした。

「…レイダが付いてきた。ぐっすり寝てるから隙をみてまたそこに移ったが、同じだった。だから、諦めた」

つまり寝ぼけてケノワを襲っていたのは自分と言う事になる。

「ごめんなさい…」

記憶に無いとはいえ恥ずかしさに身を縮めるとケノワの長い手が
伸びてきて両頬を包む。

ぐいっと上を向かされる。

「そう思うなら無闇に同じ布団に入ってくるな」

「は…、んっ」

返事をする前にケノワに唇を塞がれて硬直する。

昨日までの軽く触れるようなキスではなく、その感触に思わずびっくりとケノワの腕を掴む。

すぐに解放するとケノワはレイダの髪の毛をくしゃくしゃになるように撫でる。

「今度入って来たら何もしないなんて保障はしない。私を眠らせてくれ」

ケノワはそう言うのと腰掛けていたベッドに入りレイダに背を向けて横になった。

その背中を見つめながら硬直したままだったレイダは、バクバクと大きな音を立てて動く心臓を押さえてそのまま布団に入った。

ケノワの宣言に目が冴えてしまいレイダは、寝付くことが出来なまま外が白んでいく。

レイダとケノワの恋愛は今始まったばかりで、恐ろしい事によく擦れ違いやハプニングが起こる。

今、生まれたばかりのこの卵をちゃんと温めていけるかは二人次第となりそうだった。

たまごの扱い方（後書き）

ケノワは一晩起きてたんでしょね^^

ここまでで2章は終わりです。

秘密のお茶会

「さて、どうしたのもかな…」

高尚な香りを放つ紅茶を啜りながら、ぽつんと呟かれた言葉が静まり返った部屋の中に霧散した。

紅茶を入れたカップといわず、その部屋は一般家庭にはまずありえない豪華絢爛な家具調度でそろえられている。それらにはこの王都に住まう貴族にもなかなか手に入らないだろう価値があることが分かる。

扉もこの国で最高の建材を使用しており、その奥に続くはずの部屋はもっと重厚さやきらびやかさを持っている。

「うーん、あいつも余計な話を持ってきたものだなあ」

言葉を紡いだ男はどこか陽気な雰囲気を持っている。

年のころは中年と初老とどちらを選ぶべきかと悩む所だ。陽の光をたっぷり受けたような金髪には少しだけ白いものが混じり年齢を感じさせるが、綺麗に整った顔、特にそのブルーグレイの瞳に光る好奇の目は純粹な子供のように見える。表情は柔和で優しいに微笑む形で固定された目元と最上級の安心を与える口元の笑み。

「父上…」

呻くようにして彼を制したのは亜麻色の髪を持つ青年で若干顔が青白い。彼と同じ面差しをした息子が改まった形で自分を呼び、眉を顰める。

「なんだ、いつもの様に父さんと呼んでくれよ、気持ち悪いな」

「父上：ここをどこだと思っっているんですか？ 言葉を慎んでください」

自分をたしなめる息子に彼は少し口を歪ませると隣りに座る彼に尋ねる。

「ふむ、家長の言う事は聞かなきゃいけないな」

青年は凄く微妙な顔を作ると肯定するようにゆっくり頷いた。

彼はこの一番上にあたる息子が成人し、自分の仕事を教え込んだ後すべて彼に権利を委譲した。爵位も何もかも。年若い息子だが十分な実力を持っていると思う。

きつと領地の中を改善することばかりに手を尽くそうとしてしまいう自分より善き働きをするだろう。

「待ち時間くらいは真面目に過ごしてください」

「おう」

一旦は息子の言葉に同意したものの、どうしても聞きたい事がありそつと言葉にしてみる。

「ところで、うちの三男坊には恋人はおるのかね？」

その瞬間、いつも息子の顔に浮かぶ笑みが深くなる。

それなのに耳元に届いたその声は底冷えするような怒気を含んでいた。

「…今更、それを訊ねないでください父上様」

その恐ろしさに何も言えずに彼はそつと息子から視線を逸らしたのだった。

「すまぬ、待たせたな！」

その時、勢いよく奥の扉を開けて初老の男が現れた。

「おお、待っていたぞ！」

遅れてやってきた人を元気に出迎えてやる。

一瞬だけ現実には厄介ごとの元凶であるはずの男の登場を神の助けのように思ったのだった。

もちろん直後に見えないテーブルの下で足を息子に思いっきり踏まれたのは言うまでも無い。

※ ※ ※

穏やかな笑い声が花屋から漏れる。

昼と夕方のちょうど間にあたる時間、小旅行から戻り早速仕事に復帰したレイダのところに先日出会ったばかりのアゲハが訊ねてきた。

友人の少ないレイダにできた知り合いにエレノアが意気投合して、花屋の奥のテーブルを囲んで雑談をすることになったのだ。

「どうして今日私がいることわかったんですか？」

「キフィがリュウ特別補佐官さんが帰ってきたなら、レイダちゃんもいるはずだって」

エレノアの入れた紅茶を飲みながらアゲハはにこりと笑う。

「あら、あのキフィくんとお友達なの」

「彼の事、知ってますか？」

「もちろん。会ったわよ、お家の旦那様とご一緒に仕事をサボってね」

そのときのことを思い出したのかエレノアは苦笑する。

「ああ、やりそう。キフィは軍内でもよくサボってるもん」

「ケノワ様に聞いたら探すのが大変らしいですよ」

皆が共通の人物を知っていることで和やかな雰囲気が漂う。
このときまではレイダもそう思っていた。

しかし、ちがったのだ。

「それで、レイダちゃんはケノワさんと旅行に行ってきたんだって？
どうだったのか教えてよ」

無邪気にアゲハが訊ねるとエレノアも頷く。

「そうそう、私もまだ聞いてないのよ。メーティアは楽しかった？」
正面に座っていた二人に促されて答える。

「はい、とっても楽しかったです。汽車で旅行に行くなんて初めて

何もかもが面白くて」

「汽車かぁ、いいなぁ私も行ってみたい。それで何を見てきたの？」

「洞窟に棲む土蚩を見ってきました。まるで光の洪水の中に入ったみたいで、凄く幻想的だったんです。こう、白い光の玉みたいな…雪のような…」

にこにこしながら親指と人さし指で丸を作り大きさを示して説明していたレイダにふと、顔に翳りが生まれる。

「あれ、どうしたの？」

アゲハが不思議そうに首を傾げる。

「…洞窟ではもう一つお話があるんです。エレノアさんは知ってるかもしれないけれど、アゲハさんは知っていますか？ 能力者がどうやって軍に行くのか？」

「え、あれでしょう？ 小さい頃から受けてる検診で見つけるんでしょう？」

「そうです。けど、それが見つかったら親から無理矢理引き離して軍に連れ去ってしまう事は知っていましたか？ それも弟のアーフィ君くらいのまた小さな赤ちゃんでもそうなるって」

幼い弟をたとえに出されてアゲハの顔色が変わる。

「一歳にもならない子供を引き離してるの？」

「そうです。洞窟の案内人の方：バンさんって言うんですけど、娘さんが誘拐同然に連れて行かれてしまったって話を聞いて、私何も知らなかったなって思ってたんです。

ただ、軍に居る人たちはみんな自分から進んであの中へ入ってい

るような錯覚をしていた自分が凄く恥ずかしかった。軍に守ってもらってる自分達が事実を知らないなんて……」

レイダの言葉が途切れると短い沈黙が訪れる。

その沈黙を破ったのはエレノアだった。

「……そうやって事実を知っている人が少しでも居ると、能力者たちは凄く勇気付けられると思うよ。アゲハちゃんも今の話を聞いて考える物があるでしょう？」

「はい。キフィもその能力者の一人だってことだし……アーフィみたいな小さな子が軍にいるって考えるとなんだか悲しい」

「それでいいんだよ。でも、私は能力者が軍にすることを全部反対はしないよ。だって、ライフがアマゴイでなかったら仕事で私の町まで来る事は無かった。そうなれば、私が彼を追いかけて王都まできて結婚したり、レイダちゃん達に会う事も無い。そんなのは寂しいことだと思う」

頬杖をつきながらエレノアは言い。

レイダとアゲハは静かに頷いた。

そして、この時初めてアゲハはエレノアのご主人ライフがアマゴイである事実を知ったのだった。

スズメたちのお茶会

「その真面目なお話もいいけど、私はレイダちゃんとリュウの関係の方が知りたい」

「か、関係？」

エレノアが出してきた話題にキョトンとしながら聞き返したレイダ。

「あ、そうだね。一緒に泊まったんでしょ？ 何かあったはずだよねえ？」

恋愛については女の子の友人の多そうなアゲハがうわてのようでレイダに迫る。優雅に紅茶を啜りながらエレノアが告げる。

「甘いわね、アゲハちゃん。レイダちゃんとリュウは同棲してるのよ」

「えっ！ そうなの？ じゃあ大人な関係ってこと？」

「そこがねえ、私が見る限りじゃあそこまでは無いような気がするのよね。それに相手がああ何考えてるか分からないリュウだしね」

「うーん、推測が難しいですね！」

「難航中よ。レイダちゃん答えてくれないし…」

「手を繋ぐってことはしてますよ。この前会った時そうだったはず！」

「私もどうも口づけも怪しいと思うんだけど…でもリュウも二十歳過ぎた大人だしねえ」

「そうですよお。同棲してるんならそれくらいは！」

本人を目の前に勝手にあれこれ推測して盛り上がる二人。
レイダが展開される推論に顔を赤くしながら呟く。

「大人の関係って…」

本当にかすれるくらい小さく漏らされた言葉だったにも関わらず、
二人はレイダに注目する。

「それで本当のところはどうなの？」

「口づけくらいはしてる？」

期待の目に仕方なくコクンと頷くとアゲハが何故かガッツポーズ
をする。

「それで、旅行中はどうだったの？ 同じ部屋だったんでしょ」

「同じ部屋でしたけど…」

あの日の早朝の失敗を思い出してうろたえる。
今思い出しても顔から火が出そうだ。口づけされただけでもドキ
ドキするっていうのに、この二人はもっと進んだ関係を聞きたがっ
ているようだった。

「それで？ どうなの？」

「ここで口閉じるのはズルイと思う！」

二つの顔がきらきらした状態でずいっと自分に近づいてきて、レ
イダは体を後ろに引いた。

「そ、そんな事言われても…」

真っ赤になった顔で言葉を返すが二人は全く気にしていないようだ。

「あのねえ、私とライフがどーんな思いでリュウにレイダちゃん預けてると思ってるのよ。それこそ断腸の思いってやつよ！ これくらい教えてくれてもいいと思うわ」

なんだがハチャメチャな理由をもっともらしく告げるのは、エレノアだ。

「謎多きリュウ特別補佐官さんのことなんて恋人のレイダちゃんしか分からないんだから教えてくれてもいいと思う！」

にやにやしているエレノアの横で激しく同意していたアゲハも拳を握りよく分からない事をいう。

「でも…」

なんとか反論の言葉を捜すが見つけ出せない。

なんでこんな展開になったのか、途方にくれてレイダは手元のカッパを見つめた。

「…何もないですよ…」

固唾をのんで答えを期待していた二人が一緒に肩を落とす。

「あーもう、リュウはレイダちゃんの事を大事にしてくれてるんだってことにしておこう」

「そうよね、これはもう男によるわ。こんな奥手なレイダちゃんからじゃ迫れない…」

「…そんな顔で二人とも私を見ないでください。それにきつと私がまだまだ子供だからだと思っています」

あまり様子に少しいじけて言うと、アゲハが首を振る。

「子供だって恋愛するんだからそれは関係ない！」

「うっ…そうなんですか」

自分の考えとは違う新たな情報にただただ怯む。

「女の子だって戦う準備が必要よ、レイダちゃん！ 進展する為の作戦会議が必要！」

「アゲハちゃん、いい事言った！」

またしても二人で勝手に盛り上がる姿をレイダは見守るしかなかった。

「…疲れた…」

とぼとぼと夕焼けに染まる通りを歩きながら呟く。

あのあと、アゲハが帰る時間まで二人はいかに自分とケノワが進展するべきかを熱く語り合い、大量の注文をつけていった。

どれもがレイダが真っ赤になるような内容で丁重に断ったが、アゲハと結託したエレノアがこれからどうでるのかが不安だ。

その中でも最低限これだけはしておけといわれた言葉…

「…あれは普通の女の子ならみんな言う事なのかな…やっぱり子供な私が悪いのかなあ」

「何が？」

急に耳元で声が聞こえて振り返る。

そこには仕事帰りのため制服姿のケノワが立っていた。考え込んでいて彼が近づいてきていたことに気付いていなかった。

「ケ、ケノワ様…」

先ほどまで冷たくて憂鬱でいっぱいだった顔が一気に熱くなるのを感じた。

「どうした？」

レイダの様子の違いにケノワはすぐに気付いたらしくさらに訊ねてくる。

「なんでもないです！ ケノワ様、今日は早いですね！」

自分の様子に注意が向かないように元気に首を振る。

「ああ、今日は対した仕事があったわけじゃないからな」
「そうなんですな」

混雑のなかを歩きながらケノワは通りに出ている食料品の屋台を抜け目無く観察しているのが分かる。きっと今晚の食材を探しているのだろう。

そっとケノワの空いている左手を握った。

その手を握り返されてほっとしてついていく。そこで二人の言葉

を思い出して強く手を握り締める。ちらりとケノワが目線を寄越してくれるが、なんでもないと平静を装って首を振った。

やっぱり恥ずかしくて言えない、もっと勇気を貯めてからにしよう。まだ自分たちは今のままで十分なんだ。そう言い訳すると心が軽くなった。

この判断が後にどういう結果を生むかなんて事をレイダは全く考えずに微笑んだ。

『いい、レイダちゃん。最低限のことだと思って聞くのよ、恋人同士なら一日一回でも抱きしめてもらって愛を確認すること！ これってとっても大事なことだと思うのよ？』

キューピッド

———コーン

仕事があと半刻で終わることを告げる鐘が鳴る。

「あーめんどくさっ」

隣りで放たれたそれは独り言には大き過ぎ、ケノワは報告書から顔を上げる。そこには頬を机に置きながら、ペンを指先で器用に回すキファイが不満そうにしていた。

「これが貴方の仕事でしょう」

「そうだけどさ…お前はいいじゃんか、可愛い彼女と旅行とか行って遊べてるんだから。その間、俺が何させられたと思ってんの？」

「基礎訓練ですね、貴方が普段からサボるからそのツケです」

「げっ！ ひどーそんな事言うか？」

頬を膨らませるキファイに溜め息を吐く。

通常、軍に所属するどの地位のものでも行なわなくてはいけない基礎訓練、それをキファイはよくサボっていた。そのことについて作戦部隊の担当官には目をつけたれていたらしく、本当ならケノワと同じように休みだったはずのキファイは最初の一日以外は全部が訓練に引っ張り出されたようだ。

「あーあ。いいなあ、俺もどっかに行ってしまいたい」

全く冗談に聞こえない言葉に書類に戻していた顔を上げる。

「それを実行した場合、地獄に送りますので」

「…そんな顔で言われたら、俺はお前に出会う前に死んだほうがマシなんじゃないかって思う」

こちらに引き攣った笑みを向けたキフィは、逸らしていた目線を戻すとまた口を開く。何かを思いついた顔だ。

「あ、今度俺をレイダちゃんに会わせろよ」

「何故ですか？」

「何でって、話をしたいからに決まってるだろう。お前の生態については一緒に暮らしてるレイダちゃんがいっぱい知ってるだろ。アゲハもなんかいつの間にか知り合ってるしさあ。おまえらばかりずるい」

何だか色々嫌な理由で会わせたくなくなる。

「これはキューピッドである俺にもっと敬意を払えというものだよ」
「遠慮したいんですが…そもそもキューピッドって…」

にこりと笑みを広げるとキフィは告げる。

「だってお前らって結婚とかするだろ？」

「は？ 何を言い出すんですか…また何か勘違いサキヨミとかしてるんですか」

言い切りの言葉に呆れてキフィを見るが、首を振られる。

「いや、別にサキヨミとかしなくても同棲しておいて結婚考えてな

いってことはないだろ」

「結婚…ですか」

今まで恋愛ごとにさえ疎かったケノワには一切そういった現実を考えた事が無く、今そういうものなのかと思っただけ。

そもそも、レイダを保護するために部屋を提供していたわけで、そのまま何故か恋愛に発展してしまったのだからなんとも言えない。彼の言う一般常識が通じるのかが分からない。

「なんだよ、考えてなかったのか。現実を見つめなおす為に、これこそやっぱレイダちゃんに直接会わなくては！」

「そのこじつけは必要無いです」

ちえつと舌打ちしたキフィにケノワも思い付きを率直に訊ねる。

「…キフィは、アゲハと結婚したいと思いますか？」

その途端、キフィのポーカーフェスの顔が一気に赤く染まる。これまでの付き合いで初めてのこともかもしれない。

「俺とアゲハはそんなじゃないし！ 行きがかり上、知り合っただけだし！」

「そうなんですか…」

「本当だからなっ！」

「はあ」

半分くらい嘘が含まれてる気がするが、そこら辺については未知の領域でわからない。

ケノワとしてはキフィとアゲハは付き合ってるのかも不確定なので引き下がるしかなかったのだが。

お誘い

目の前の光景を見て一番びったりな言葉は何だろうか、と嫌に冷静に場違いなことを考えた。

一見無表情に見える彼も実の所、完全に頬を引き攣らせていた。軍正門前、大通りに面するそこは自宅から通いである軍人達が終業の時間と共に出てくる場所だ。

その前に横付けされたのは、それはそれは豪華な馬車だった。そこら辺を走るような賃走のものでも貨物用のものでもなく、貴族の使用する重厚な造り。窓には高級なビロードのカーテンまでついている。

「お疲れ様です。ケノワ様、お迎えに参りました」

注目の中、目の前の老人が恭しく頭を下げる姿に手にしていたものを取り落としそうになった。彼はリュウ家に使える執事だ。もう随分会っていないかったが間違いないだろう。

「何故、わざわざお前が迎えに来る」

「ロッド様のご配慮により」

ロッドの配慮？ 前回軍に書簡を送りつけてきたときにはこんな状況にはならなかった。

なぜ身内の自分に馬車を準備する？ 華美や無駄を嫌うリュウ家の中でもロッドは一番儉約家だ。こんな馬車は貴族同士の行き来や王宮に何らかの理由で行かなくてはいけないときのみのはずだ。

「ロッド様がお待ちです。お乗りくださいませ」

「…」

このままここに居ても好奇の的にかなりえない。この行動の意図を聞くのは気が重いがやはりロッドに直接会うのが一番だろう。

素直に馬車に乗り込むとすぐに動き始める。

やけに座り心地が良い座席でケノワは目を閉じた。兄が何を考えているのか気を揉むのはとても無駄なことだと知っている。ならば彼の家に着くまでは眠っていたほうがマシだ。

以前と同じように家族のみが使うリビングに通される。

そこは先ほどまで乗っていた馬車から比べれば庶民の家か？　と思わせるほど質素だ。ロッド自慢の大きなソファも特に金をかけたものでもない。そしてその環境に居心地の良さを感じているのも事実。

「やあ、悪かったね。仕事が終わって疲れてるところに来て貰ってすまない」

「いえ」

「そうか…」

向かい合ってソファに座ると兄は微笑む。元々微笑んでいるのに一層深めたその笑みにケノワは眉を顰める。

「何か話があるんですか？」

「えっ、どうしてわかるんだ」

ロッドが驚きの顔で自分を見る。

いくら人間観察に興味が無いケノワでも自分の兄妹の癖くらいは

把握している。ロッドはいつも重大な事をする時、笑みが深くなるのだ。そしてあの地獄の矢継ぎ早の言葉数が減る。その事を指摘するとロッドが苦笑する。

「なんだ、ケノワはちゃんと長い話が出来るんだね」

「はあ」

いつも会話の成立の前にロッドが一方的に話す事がケノワの口数を減らす要因なのだが。

「じゃあ、遠慮なく聞いてしまおう。ケノワ、数ヶ月前に君が助けた女の子と付き合いはまだ続いているかい？」

「ええ」

出された珈琲を折角だからと口に含む、何だか居心地も悪くなってきた。

じっと自分の顔を見つめる兄にケノワは疑問の目を向ける。

「その子と君は――結婚するつもりあるのかい？」

「！」

前回に続き今日も口に含んだ珈琲をふきだしそうになった。今回はケノワの動揺が伝わったらしく、それでも無表情の弟にそっとハンカチを差し出してくれる。

ケノワは受け取りながら何を言われたかもう一度反芻する。

先ほどキフィが同じような事を聞いてこなかったか？ 彼はやはりサキヨミをしていたのだろうか？

「どうなんだい？ 私やリーガル、リアは君の年齢には結婚を決め

ていたんだが…」

「……」

そういうものなのだろうか。

キフィやロッドの言うように自分もそういったことを考えなくてはいけない時期に来ているのだろうか？　でも自分はこのことについて今考え始めたばかりでロッドの質問に答える事ができない。

「まだよく分かりませんが…結婚については考えていません」

「そうか…考えていないのか」

なんとも言えない顔で頷くロッドにケノワの疑問は更に増える。

レイダと自分の関係について彼がここまで真剣な顔で尋ねてくるとはいったいどう言う事なのだろうか？　ケノワ自身いつも家からは何事も自由にさせてもらっていた。家督についてもロッドが継ぐ事が決まっていたし、政界などではなく軍に入ることも賛成してくれた。何事もマイペース過ぎる弟を兄は心配しているのだろうか、婚期を逃してしまうなどと言う理由で？

ケノワが珍しく素直に怪訝な表情を作っていることに気付いて、ロッドは咳払いをする。

「無粋なことを聞いてしまつて悪かつたね。家長としてケノワがちゃんと将来のこと考えているか知りたくてね」

「はあ」

自分の推測が合っていた事を示す言葉にケノワは若干安心しながら頷く。

あまりにもロッドが真剣な顔で呼び出すのできつと何か大事が起きたはずだと予想していたからだ。

「今日も彼女と夕食を食べるのかい？」

「そうします」

「仲はいいんだね、毎日一緒に夕食を取るのかい？」

「ええ」

「そうかそれはいい」

ロッドは嬉しそうに今度こそ本当に微笑んだ。

「じゃあ今日もうちの厨房から何か夕食になるものをもって行きなさい。この前、本宅から来てくれたシェフのアルドの料理は本宅の味を出してくれるんだ。彼女もきつと気に入るさ」

「ありがとうございます」

いつもの調子戻った兄はいつも通りの優しく長い言葉をくれた。

ただ、彼がその時何を考えているのかなどは全くケノワには予測できていなかったのだが。

襲撃

洗濯物を干しながら隣りで高い所にシーツを掛けるケノワの顔を見上げると、目が合って微笑む。

少し前までなら恥ずかしくて顔を俯かせていたのだが、今は素直にケノワの顔を見たい。

ケノワは空いた手を頭に乗せ撫でてくれる。

「やっぱりお休みが一番いいですね」

「ああ」

全部干し終わって一緒にスッキリした気分で建物の最上階である窓から外を眺める。

レイダはエレノアの好意からケノワにあわせて休日をもらっていた。

前回の休みは長期の旅行に行った後だったので久しぶりにゆつくりと洗濯や掃除をする事ができたのだ。

勢い良く太陽が上昇し始めて熱を感じる中で風が開けた窓から吹きぬける。

——コン！

急に部屋の中に響いた音にビクリと体が跳ねる。

ケノワはいつもの無表情のまま玄関の方を見つめていた。どうやら玄関に取り付けられているドアノックの音らしい。

「お客さまですか…？」

——コン！ コンコン！

「そのようだな…」

「私、出てきますね」

足をそちらに向け玄関に近づくと音が凄くなる。

——コン！ コンコンコンコンコンコンコンコンコン！

「ケ、ケノワさま…」

怖くなって振り返るとケノワが既にすぐ後ろに立っていて結局ケノワが手を伸ばして玄関の鍵をあける。

その途端ドアノブが勝手にまわされて乱暴に扉が開かれた。

その大きなバン！ という音に再び驚いて思わず後ろのケノワに抱きつく。

「……」

ぎゅっと閉じていたまぶたを上げるとそこに立っていた男女二人が驚いた顔で立っていた。

何故、こちらを驚かした本人たちが驚いているのか：何事なんだろうかとケノワを見上げると傍目にはわからないけど呆れた顔で二人を見ている。

「何？」

短く訊ねるケノワの言葉は冷たく二人はその声に固まっていた表

情を少し動かす。目線はどうも自分に集中していることをレイダは感じ取った。

「え——と、ケノワ…お邪魔だったかしら？」

「だ、だよな…」

「・・・」

不自然に告げたあと二人は黙ってしまった為、異様な沈黙が続くもはや冷戦に入るのではないだろうか？ とレイダが思った頃にケノワが口を開く。

「入ったら」

リビングのソファでは席が足りず、四人は食事用のテーブルに向かい合って座る。

「どうぞ」

綺麗な金髪に緑の瞳がとても似合う貴族だろう女性におずおずと紅茶を出すと、女性はにっこりと笑う。

「ありがとう、急にきて驚かせてしまつてごめんなさいね。まさかケノワの家に女の子が居るなんて思わなくて」

「いいえ、こちらこそすみません」

レイダがなんと言っているのか分からずにケノワを見るが、彼は女性をちらりと見ただけでレイダの入れた紅茶を飲んでいる。

「隣に居るのがリーガル・リュウ。ケノワの兄よ。私はリア・シュトレーナ、ケノワのすぐ上の姉」

「本当に怖がらせて悪かったな、リーガルだ。よろしくな」

ちょうどレイダよりも10歳位年上だろうか。ケノワと同じ甘栗色の髪を持つリーガルの顔つきは、ケノワとはあまり似ていない。それでも好青年である事には変わり無く、レイダは慌てて頭を下げる。

「はじめまして、レイダ・ゼイライスです」

「レイダちゃん。いつでもケノワと何かあったら私に相談してね、ケノワのことだから何でも鈍いでしょう？ それに無口で無愛想だし：兄妹にでもそんな風だから困るのだけどあなたみたいに可愛い彼女にそんな思いをさせちゃいけないと思うのよ」

リアが一気に話きりレイダは何とか相槌を打つ。

「はあ：」

「ところで、二人はどこで出会ったの？ 俺達の知る限りケノワに彼女が居るのを把握できたのが初めてで凄く興味があるんだけど」

さらりとリーガルも笑顔で核心をつく質問を投げかけてくる。

「え、あのそれは、えっと：」

「何しにきたんだ？」

しどろもどろで言葉に詰まっているとケノワが鋭く言葉を放つ。
馴れ合いを一刀両断する言葉に二人が口を噤む。

「そうだったわ。今回はケノワに話があったんだって…ついレイダちゃんに興味が出ちゃって」

リアとリーガルが顔を見合わせる。

「レイダちゃん、悪いんだがケノワと話がある。少し席を外してくれるかい？」

「はい」

リーガルが頷くとリアがレイダに向かって笑いかける。

「レイダちゃんはこの家に住んでいるの？」

「そうです」

「じゃあ部屋を見せてくれる？」

リアに促されて席を立つとレイダはリアと共に自分の部屋に入った。どんな話をするのか興味があったが、家族間の大切な話に自分が入るわけにはいかないのは分かっている。

心配

「ふふ、この部屋は相変わらずなのね」

頭一つ分レイダより高い身長のリアは小さな部屋の中をぐるりと見回す。

「以前にいらっしゃったことあるんですか？」

「ええ、随分前ね。去年までは妹達がよく利用してたみたいね、嬉しそうにこの部屋の改装計画を話しているのを聞いた事があるわ。最近はあまりこちらに来なくなったようだけれど」

「そうなんですね…」

そういえばケノワにもこの部屋は家族のものだと聞いた。

派手ではないが上品さのある花柄の壁紙にレエスのついたカーテン、どこか可愛らしさが見える家具。今やレイダの部屋として馴染んでしまった。

ゆっくりと清楚なドレスでリアはベッドに腰掛ける。レイダはその綺麗な面差しに陰影が作る幻想を観察してドキドキする。

「レイダちゃん、ありがとう」

「えっ？」

急にリアに頭を下げられて見とれていたレイダは驚く。

「私が王都に嫁いでいるし、ロッド兄様もいるというのにケノワは全く私たちと関わろうとしないわ。だから、レイダちゃんのような子がケノワにいるって聞いて凄く嬉しかったわ」

「いいえ、そんなっ：私は迷惑を掛けてばかりです」

「それでいいのよ。ケノワは基本的に人に興味が無いのか関心が薄いと思うの。反応もほとんどないし：それが、さっき玄関でレイダちゃんと居る所を見て思ったの、貴女の事が本当に大切なんだわって」

レイダは思いにもよらないことばにただただ真っ赤な顔で立ち尽くした。

レイダとリアがリビングから出て行くところを見送ると、笑顔で二人を見送ったリーガルが顔を真面目なものに改める。

その兄に無表情に相對するケノワは、出していた焼き菓子を齧る。長兄のロッドに比べるとこの次男のリーガルは言葉数も普通の上に温厚で、昔からケノワが会話をする事が出来る人物だった。他の兄弟は一方的なお喋りの為あえてケノワから口を挟むことはない。

「ケノワ、この前ロッドに呼ばれたんだろう？」

「ええ」

リーガルはロッドの補佐のような仕事をしており、故郷ヤサと王都をよく行き来している。その中でケノワが呼ばれたことを知った

のだろう。

「…その時にお前、ロッドにレイダちゃんとの事を聞かれたんじゃないのか？」

「そうです」

「その時、結婚は考えてないと」

「言いました」

「なんでだ？ 一緒に住んでまで居るのに」

「何でと言われても…」

リーガルの顔が会話を進めていくほどに苦りきったものになっていく。それは先日見たロッドの顔と良く似ていた。

「俺はレイダちゃんが彼女などでもなくて、それも一緒に住んでなんかないと思っていたんだが…これじゃあ話が違いすぎる…」

深く溜め息を吐いたリーガルにケノワは手にしていた焼き菓子を置く。何かよくない事がある気がしたのだ。

すっと顔を上げると口を開く。

「…どうせまだ聞いていないと思ったから、リアと言いにきたんだ」
「何を」

「王家からリュウ家に求婚の話がある。第二王女のマラ様を知ってるか？ 今年、十八歳になれる。ちょうどレイダちゃんと同じくらいだな」

「…」

「俺が、言ってる意味分かるか？」

確認され頷くしかできない。

リュウ家には息子は三人しかおらず兄二人は既に結婚をしている
のだから、どう考えても話が自分に来ているということだ。

思惑を知る

「私はお断りします」

「…そんなに簡単に出来ると思うか？ 父さんが届いた書簡勝手に読んでほしい送り返したんだ」

「父上が…」

凄腕の辺境伯であった父だが何事も笑顔で勝手に押し進める事があり、ある程度の無茶は通ってしまう。引退してヤサを中心に公共事業に精を出しているはずの父が何故このタイミングで…。

言葉を失ったケノワにリーガルがダメ押しをする。

「その上、先日確認のために呼ばれたにもかかわらずお前はレイダちゃんと結婚を考えていないと言ったんだぞ」

「そういう事とは聞いてません」

あの何かを探るように自分を見ていた兄を思い出してケノワは憮然とする。

「ロッドはお前の素直な気持ちを知ったかっただろう」

「…とにかく断ります。兄上からもそう伝えてください」

「一応伝えてみるが、お前からもきちんとロッドに示せ。これから何もしなかったらどんどん話が進む。特にロッドも父さんもこうと決めたらどんどん進めていく人たちなのだから」

「：はい」

ロッドたちが何を考えているのかと憂鬱になりながら冷めた紅茶を啜っているとおもむろにリーガルが告げる。

「レイダちゃんには、どうする？ 俺かリアから話そうか、お前はわかってないだろうがややこしくなるぞ」

「いいえ、私から伝えます」

「そうか」

兄の心遣いは嬉しいがこれは自分で伝えなければ意味が無いものだろう。

「リーガル様もリア様も良い方たちですね」

レイダは楽しそうに二人に出したカップをテーブルから片付けている。

「ああ」

「辺境伯のロッド様も楽しい方なんですか？ 私は噂話しか聞いた事が無いんですけど」

「顔かたちは私とよく似ているが、リアと同じかそれ以上によく喋る」

レイダはくすり、と笑う。

「沢山喋るケノワ様なんて…想像できませんね」

「疲れるだけだ」

「それだけ沢山伝えたい事があるんですよ、きっと」

そういわれると何だかもっともな気がする。ソファに座り、考えてみる。

先日からやけに自分に対して結婚という現実が突きつけられている。それに対して正確に答えられるほどこれまで考えた事が無い。結婚と言うのはどうも形式上の物のような気がしてしまう。

決められているからそうしているだけのよう。一緒にいることで兄妹を見る限りでは夫婦でいることで幸せそうではあると思うが、何事も無関心だった為その裏で彼らが苦勞していたとしても自分にはわからない。

今までのように一緒に居るだけではいけないのだろうか？

そこまで考えて、先ほどリーガルが伝えに來た内容を思い出す、王族との婚姻。そんな物を押し付けられても本当に困るだけだ。

そもそもその事を伝えたときレイダはどうするのだろうか？

「ケノワ様、今日の夕食はヤサのトリスープを作りませんか？ お二人がいらっしゃって何だか久しぶりにヤサのものが食べたくなりました」

声を掛けられて顔を上げるとレイダが屈託無く笑っている。

「…そうだな、今日はヤサの郷土料理をつくろう」

「はい。ありがとうございます！」

レイダの笑顔を崩したくなくて、様子を見ながら先ほどの事を伝えようと決める。

翌日の午後、リーガルが予告したとおりロッドから書簡が軍のケ
ノワに届き王家との婚姻の話が来ている事が記されていた。

ロッドはやはり先日の呼び出しで自分を試していたのだ。苦い思
いで書簡を握りしめた。

斜めの考察

「なあ、これどういうこと？」

キフィが心底嫌そうに呟いた。早朝の急な招集で会議室に早足で向かいながらの言葉にケノワは首を振る。

「分かりません」

「…本気で知らねえの？　こんな最悪そうな先行きだっていうのにさ」

どうやらキフィはサキヨミをした上でケノワに訊ねていたらしいという事が分かり、逆に訊ねる。

「何があるんですか？」

「聞かなくても、いいんじゃない？　そのほうが面白そうだし」

一瞬考えたキフィは既に会議室の扉を開けケノワには教えず入っていく。先に席に着く時のキフィの顔は思った通り何か悪巧みを考えている時の顔だった。

何がこの緊急招集にあるのか気になったが、他の上級士官や補佐官が居る中では二人共会話をしない習慣はそのままだ。これからはキフィが進行役や他の上級士官達にちよっかいを出さないように牽制する事に集中しなくてはいけない。

二人が席について5分もしないうちに会議は開始された。作戦部のメンバー以外にも複数の部署から能力者が集められてい

ることで会議室は軍内一番の大きさだ。沢山の椅子が並び机は出さず前方に招集をかけた上官が立っている。

ずらりと並ぶ能力者や補佐官たち、その背中に紛れてあろう事かキフィは睡眠をとろうとしている。まだ会議が始まって何についても語られていない状況にも関わらず、だ。

ケノワはここでやたらに起こして騒動を起こされるよりマシだろうと、キフィをしばらく観察して正面に顔を向けたところで作戦部の上官デフェリスと目が合う。他の人々の視線もいつも以上に感じ、やっぱり起こしておかなくてはいけなかったか…と後悔した。

「リュウ補佐官、今の話は聞いていたか？」

「…いえ」

キフィをどう押さえるかばかりを考えていた為、今までの会議内容は把握していない。大体いつも同じ内容を重複して確認するので最初の方は聞き流す事が多いのだ。

ケノワの正直すぎる答えに一瞬怒りを表す片眉を上げ、デフェリスは口を開いた。

「そうか、ではもう一度言おう。本日鐘4つちょうどに我が国、第二王女のマラ様がこの能力者の館に付属するこの施設に視察にいらっしゃる事が決まった」

なんだ自分たちには特に影響は無いじゃないか、と思ったが次の言葉に思わず隣に座るキフィを蹴りたくなった。

「その案内をケノワ・リュウ特別補佐官とキフィ・クレイ特別上級能力士官にして欲しいと直々に依頼があった」

「俺、面倒くさいから嫌。俺様の能力が素晴らしすぎてカッコイイからって忙しいし、他で適当にやってくださーい」

つい先ほどまで閉じられていた瞼は上がり、デフェリスの言葉にふざけた言葉遣いで反抗している。本気でそう思っているのが解る分ケノワは頭痛がするのを感じた。

「クレイ殿、言葉を慎んでください」

「なにいつてんだ、このままじゃ俺達が、超面倒な王女様ごあらんなぁーいをしなくちゃいけなくなるんだぞ」

「そういうことでなく」

ケノワの牽制は効果を示さず、キフィは更に何かを口にしようと不敵にこちらに顔を向けた。しかし、キフィの言葉は続かなかった。

「クレイ特別上級能力士官」

前方のデフェリスがその髭の生えた顔にこれまで見た事が無いくらいに笑みを浮かべてキフィの名を呼んだからだ。

※ ※ ※

本部正面玄関。

「超最悪……あそこでもっと俺様がああしていれば……デフェリスの狸ジジイめ……」

口がうまいデフェリスに攻防で負けたことを後悔しぼそぼそと呟く言葉が耳に届く。

「キフィ、きますよ」

ケノワが振り返ると能力士官を表す真っ黒な礼服を完璧に着込んだキフィが扉に片手をつきながら何かまだ呟き続けている。

「キフィ」

その背中を叩くと恨めしそうにキフィはケノワを見る。

「そもそも補佐官のお前があそこで抵抗しないから俺がこんな面倒なことをさせられるんだ。それも、王族なんて生物学上で一番最悪なものの案内を」

「その割には完璧に礼服を着てますね」

「当たり前だろ、いくら不本意でもこの俺が完璧な着こなしをしなかったらそれはこの美貌を与えた神がゆるさない」

一分のすきも無い着こなしに突っ込みを入れるが、よく分からない返答にケノワは無視を決めた。

「…すぐに王女が来ます」

「お前に全部任せるからな」

「わかっています」

そもそもキフィに主導権を与えた場合のリスクを考えるならば、自分でどうにかするのが一番だ。

ケノワ自身も特別補佐官の濃い灰色の礼服を身に着けており、案内の詳細をまとめた書類を手にしていた。表紙に記載された賓客の名前を見つめる。

よくこんな偶然があったものだと思う。全く気にも留めていなか

った王女マラが、自分の婚約者となる話が出た途端に軍施設の視察だなんて。

先日の婚姻の書簡をもらってすぐにケノワはロッドへ拒否の書簡を送り返したが、家長としての兄の意見は変わらず、この決定を受けることを促がす返答が戻ってくるばかりだ。そんなことではレイダに落ち着いて話す事が出来ずに未だに何も伝えられていない。

溜め息を漏らしたところで前方から蹄の音が聞こえて顔を上げた。

すぐに馬車が現れて玄関へと近づいてくる。

目の前に止まったそれは先日ケノワを迎えに来た馬車を数倍豪華に作られた物だった。

横を見るとキフィが澄ました顔で立っている。王女マラの視察に出迎えをするのはたったの二人、通常であれば盛大に上官のお偉方が並ぶのであろう。

しかし、今回は王家側から指名二人以外の出迎えさえ拒否されていた。ケノワにはいったいどうなってるのか分からない。

馬車から降りた業者が扉を開けるとそこからゆっくりと濃い茶髪をした男が降りてくる。

貴族のような高価な服装をしているが、付き人だろうすぐに振り返ると手を差し出し続いて出てくる小さな手を取り、馬車から降りる事を手伝っている。

降りてくるマラは赤毛の髪を綺麗に編み上げ、その優しげな面差しを包んでいた。

伏せ目がちな瞳は緑色をしており長い睫毛に囲まれている。軍視察に来る事を意識してか、華美すぎないシンプルな紺色のドレスに身に着けていた。

「ありがとう、お兄様」

きつちりと二人の前に降り立ってからマラは手を貸していた男にそう言った。ケノワの予測ははずれ、どうやら男は王子様になるようだった。

これではキフィの機嫌が更に落ちる気がする。そう思ってもう一度キフィの顔を確認するが、相変わらず澄ましているどころか口元に笑みが浮かんでいた。

覚悟しとけよ

「お忙しい中ようこそいらっしやいました、マラ様」

穏やかな口調でキフィがそう切り出して、ケノワはまたキフィが何か企んでいることに気付く。止めようにも既に二人に取り入ろうとする彼を制止する手立てが無かった。

「いいえ、急に視察を申し出ってしまった事申し訳なく思いますわ」

マラは優雅に首を振り言葉を返している。

ふとこちらに目線を移したマラと目が合い慌てて口を開く。

「…遅れましたが、本日ご案内を賜りました、作戦部所属のサキヨミ、キフィ・クレイ特別上級能力士官と私が補佐官ケノワ・リュウです」

あくまで定型句をそのまま淡々と告げ、隣りに立つキフィの紹介を入れると相変わずにこやかに頭を下げるキフィ。頷くとマラもお辞儀を返す。

「わたくしはマラと申します、視察も本分ですが、リュウ様との縁談が出たことで一度お会いしたいと思いこのように押しかけてしまいました。わたくしだけでは不安でしたので第二王子の兄、オーウエンにも付き添っていただいたのです」

「マラ、それを今、言うのは…」

馬鹿正直すぎる妹にオーウエンはたしなめたが、「まあ」と口元

を押さえてマラは頬を少し赤らめただけだった。

「そうですか、このリュウとの縁談ですか。とても喜ばしい事ですね」

最上級の笑顔でキフィは頷いた。

「よかったな、リュウ」

「・・・」

肩に手を置き自分をわざわざ見ながら言ったその瞳はそこだけ何か剣呑としたものを映していた。

「さあ、せっかく視察にいらっしゃったのですから、普段見れないような施設もご案内します」

能力者の館の大きなホールを抜け廊下の先を歩きながら、キフィはそう言い進んでいく。

先ほど言った、「全て任せる」という言葉は彼の中では忘却されたようだ。

驚いた事に二人の王族は護衛もつけずにケノワたち二人についてきた。

それは無防備と言うのか、信頼されているのかなんともいえない物だ。特にキフィと時間を共にするのに二人だけで大丈夫だろうかと心配が必要になる。二人が指名された時点で上層部はなぜ悲しくもこの危険性を伝えていないのだ。

マラの隣りには何故かキフィが並びエスコートしている。
もちろんケノワとしてはどうでもいいことだが、マラの訪問の理

由がケノワ自身ならば本来あの立ち位置に自分が居るべきだろう。

「能力者の方は本当に力を使ってお仕事をしているのですか？」

「ひどいなあ、我々を疑われるんですか？」

ふふっ、と微笑みながらキフィは訊ねる。

それはちょうど子供が聞き返すような純粹さを含んでいるように見える。・・・実際は全くの腹黒なのだが。

「いいえ、そんなことは」

「本当ですか？」

キフィは真偽を確かめるように顔をマラに近づける。

キフィの顔を見慣れていて忘れがちだが随分整った物をしている。年のころも同じ美青年に顔をずいっと近づけられてマラは顔を赤くする。

「ええ、あなたの力を信じます。ですから少し…」

「分かりました。マラ様は信じてくれるんですね」

ひょいと体を引くと腕を組んでうんうんと頷く仕草をした上で人さし指を立てた。

「でも、私が何も見せずに信じてもらうのはフェアじゃない。どうせだから何かサキヨミを行ないましょうか？ 例えば、あなたの未来など」

くるりと体を回転させて後ろから並んで歩いていたオーウェンを指差す。

「私か？」

「ええ、そうです。お嫌ですか？」

「いいや、そんなことは無いが…」

ケノワと共に前方の二人を傍観していたオーウェンはぎこちなく頷く。

「クレイ殿、あまり勝手な事は…」

「まあまあ…」

口を開きかけたケノワの腕を無理矢理引いて廊下の隅で王家兄妹に背を向けてキフィは耳元に囁く。

「お前さ、俺様に縁談とか黙っておいて無事で済むと思ってんの？」

覚悟しとけよ」

「…それとこれは」

「違いますんっての。まあ、おっさん達の計画した案内場所はパパーッとやって王子達と遊ぼうぜ」

「遊ぶって…」

「これ決定な。よろー」

言うだけいってキフィはケノワから離れていった。

振り返った先に居たのは楽しそうな様子で二人の所に戻ったキフィの後姿だった。

豆鉄砲

上層部の指示した施設を尋常ではない適当さで案内したキフィは、全く予定に入っていなかった自室に二人を招きいれた。

通常怒り出してもいいだろう対応なのに二人の王族は気を害する事無く、それどころか好奇心溢れる顔で楽しんでいる様子だった。途中案内予定に入っていた施設の人々はキフィが真面目に王族に対応している事と、大まか過ぎる説明に啞然としているうちに通り過ぎられていた。

普段から、提出の書類が山ほど置かれているキフィの机も、今日は部下の部屋に全部渡しに行っていたため奇跡的に綺麗だ。そして二人分の机にしていた事で応接用のソファと机が出ていたこともまさに運が良かったとしかいえない。

つい先日までこの部屋はぎっしりと机が入り修羅場と化していたのだから。

いつもならキフィの昼寝くらいにしか使われないソファにマラとオーウェンを座らせるとキフィはにっこりと微笑んだ。その顔を見てマラも笑みを返す。案内していくうちにキフィとマラはすっかり仲良くなったように見える。

「それでは、オーウェン様のサキを見せてもらえますか？」
「ああ、構わないが：何かする必要があるのか？」

オーウェンは少しだけ慎重にキフィに訊ねる。

「それじゃあ…」

「何もありません」

ケノワが答えると何かを楽しそうに告げようとしていたキファイが不満そうに自分を見るのが分かる。王族に対してキファイが何か無茶を要求しようとしたのは一目瞭然だ。

「クレイ様、本当に何もしなくても？」

マラが興味津々の顔で首を傾げる。

「…ええ、何もされず座っていただだけで十分です」

笑みを戻すとキファイは向かい合うようにして座りじつとオーウェンの顔を見つめる。

ケノワはそちらに注意を向けながら何とかまともそうな紅茶の葉を引き出しから見つけ出し準備をする。

キファイの能力を使っている姿は無防備に近い。

それでも彼の雰囲気にかけて誰も触れないのは数年来の経験で把握済みだ。そもそもぼんやりしていたのかと思ったらサキヨミをしていたりする事もあるのだから、真面目に儀式的な物を行なうわけでもない。

それでも真剣な顔で王子兄妹はキファイを見つめている。

入れたての紅茶を二人の前に並べている所で「へえ」と思わず、といった感じでキファイから言葉が漏れる。

口元にかすかに笑みが浮かぶ。微笑と冷笑どちらとも取れるがこの場合ケノワは冷笑をとる。

二人はどう取っただろうか？

「リュウ様、クレイ様は何かお分かりなのですか？」

マラがうつとりした瞳でキフィの顔を見つめたまま訊ねる。
ケノワはただ首を振った。自分がキフィの考えてる事など分らない。

そつとキフィは閉じていた瞼を上げると楽しそうにオーウエンの顔を見た。いや、面白くてたまらないといった顔に訂正。

「オーウエン様、貴方の考えていらっしゃる事はきつと良い方へ転がるんでしょうね」

「それはどんな…？」

抽象的な言葉にオーウエンは首を傾げる。

「貴方の一生を決めるような一大事がこれから予定されているのでありませんか？ とても綺麗な人と関わるような…」

一瞬、オーウエンがキフィの後ろに控えていた自分を鋭い目で見ただことに首を傾げる。

「…ええ。そうです」

「まあ、お兄様本当ですか？ 良い方へ行くと？ 喜ばしい事ですわね！ いったいどんなことですか？」

マラが嬉しそうに隣座るオーウエンに言葉をかけるが彼はにこりと笑ってマラに告げる。

「この事はきつと私の将来を左右する事だ。彼から詳しく聞きたい…出来れば二人だけで」

「それはいいですね、貴方のこの未来について少しお伺いしたい事

がごきますので是非お願いしたい」

キフィも賛同し立ち上がる。

「悪いけどリュウ、しばらくオーウェンと私で話してくる。お前はマラ様のお相手を」

「…それは…できかねます」

「大丈夫、王子いじめたりしねーし。お前は婚約者のマラ様とお話でもしとけばー？」

耳元に囁かれてケノワはキフィを思わず睨む。傍目では分からない変化だがキフィには十分伝わったらしく肩をすくめてオーウェンを促す。

「リュウ殿、私からもお願いしたい」

彼からそういわれてしまえば自分が止めることもできない。

「オーウェン様、気をつけてお行きください」

「ああ、大丈夫だ」

ケノワの言葉の意味をオーウェンが分かっているかは不明だがその言葉を返され見送るしかない。

二人が扉から出て行くと、ケノワは今一番会いたくなかった人間ナンバーワンのマラ王女と二人きりになる。

「…」

「リュウ様、こちらでわたくしとお話をしてくだらない？ お兄様はいつでも大事な事をわたくしに隠したがるのです」

マラに促されてケノワは覚悟を決めてマラと相對するようにソファへと腰掛ける。

「…今日は、急に現れてごめんなさい」

少し改まった様子で彼女が告げる。

「いいえ」

「私も驚いているのです。お父様がまさかこんなに急に縁談を進めようとされるなんて…一度もお会いした事が無い方と」

「そうですね」

自分だって驚いているし、本当に厄介だ。何故父上がこうやって自分の生き方に急に手を出してきたのかが未だに不明なのだ。理由を聞くためにヤサまで帰るわけにも行かないのだから、兄に抵抗するしかない。

「リュウ様は…边境伯様と本当に良く似ていらっしゃるのね」

マラにそう言われ顔を上げると彼女は微笑む。

「よく言われます」

そうなの、と首を傾げる仕草でマラの豊かな赤毛が揺れた。しかし、その動作でケノワに浮かんだのは、いつも朝から一生懸命巻いているレイダの赤い柔らかい髪の毛とはにかなだ顔。

「リュウ様はクレイ様とずっとご一緒なのですか？」

「ええ、5年ほど補佐官をしています」

「わたくしと同じ年齢なのにクレイ様は凄い能力者だとお伺いしています。戦地の情報をあの方が正確にサキヨミされると。クレイ様もリュウ様も優秀な方なのですね」

「…」

能力面で見ると十分優秀だが人間性のほうになると微妙なキフィについて何もコメントができない。

「クレイ様は・・・いつもあのように明るい方なのですか？」

「明るい・・・？　そうですね、いつも活発です」

またもや微妙な質問に曖昧に頷く。

「お兄様もなんだか気に入られていらっしゃる様子で、今日はとても楽しい視察でした」

「それは…良かったです」

話が途切れ二人がゆっくり紅茶を啜っているとところに勢いよく扉が開く。

「お待ちせしました」

キフィが元気にそう言い、マラに微笑む。ついでに自分へも何故か笑みを向けられた。

「お兄様、有意義なお話はできましたの？」

「ああ、とてもいい事を彼から聞く事ができた。少しこれからが楽しくなりそうだ」

「そういつてもらえと、とても嬉しいですね」

キフィとオーウェンは、少しの間に友人のようになっており肩でも組みそうな勢いだ。

つい先ほどまで嫌がっていたのに、この変わりよう豆鉄砲を彼の場合は鳩ではなく自分に乱射している気がする。

人付き合いの苦手なケノワからは全くで理解できない、キフィの驚異的対人能力だ。

キフィが部屋へ戻ってきた時点で決まっていた時間がちょうど終り、迎えが現れるはずの本部正面へ送る。

「きつとまた会おう、クレイ殿」

「ええ、是非」

やたらと親しげな二人の言葉にマラも微笑んでいる。

「クレイ様、私からもお礼を申し上げます」

無口なケノワを放置し三人でひとしきり挨拶しあうと、二人は馬車に乗り軍敷地を出る正門へと消えていった。

どうやらその正門にたくさんに従者は待たせてあるということらしい。

「うー、終わった。何あの言葉遣い？ 超疲れんだけどお」

自室に無言で戻ったキフィの第一声がこれだった。

「普段の言葉遣いが間違ってると思いますか？」

「…かたつくるしー話し方なんて日常会話でできるかつーの。王子まで格式ばった話し方でうえつつて感じ」

「オーウェン様とは何を話されたんですか？」

「教えるかよそんなもん。王子もお前に漏らすんじゃないぞって言うってたし」

あえて、雑な言葉遣いでキフィは着ていた上着を脱ぎ捨てる。ソファに放り投げられたそれをケノワはハンガーに掛けなおす。その背中にキフィが少し不機嫌な声をかける。

「それで、なーんでお前はレイダちゃんと付き合ってたのにあのお姫様と結婚する予定なんだ？」

振り返ると声予想したとおりの顔が自分を睨んでいる。

「…そのつもりはありません」

「じゃあどうして、お姫様がここに押しかけてくるわけだ？」

「私は断ることを何度も兄に伝えていきます」

「それが彼女に伝わってなければ何の意味もなさないだろうが。大体、さっきそれをマラちゃんに伝えたか？　そもそもレイダちゃんはこの話を知ってんのかよ？」

「…」

早口に鋭い指摘を出すキフィにケノワは口を噤む。

キフィが大きな溜め息を漏らす。

「お前最低だ。何もかも中途半端になって一番傷つくのが誰か分かってやってるのかよ」

「それは…」

言葉が出てこないケノワにキフィは、半眼で整えていた髪をかきあげると、昼寝をしてくると言い残し部屋から出て行った。

シロップ

シロップ―それだけを舐めるには甘すぎて、苦味の中に無ければ本当のよさは分からない。

家族の記念日に飾るという花束をお客に渡し、笑顔で別れて奥のテーブルに戻ると大量の贈答用の花束を作るエレノアが笑う。

「この前から機嫌、いいよね」

「え、そうですか？」

「気付いてないの、鼻歌うたってるじゃない」

驚いて口元を押さえるにつこりと微笑まれる。

「何かいいことあったんでしょ。何があったのかなあ…あ、実行してみた？ 私たちのアドバイス」

「…してませんよ…ただ、先日ケノワ様のお兄様とお姉様に会ったんです」

エレノアが驚いて手にしていた鋏を取り落としそうになった。

「それって、リュウが会わせたの？」

「いえ、そうじゃなくて…おうちにいらっしゃって」

「驚いたんじゃない？ なんだかリュウって同棲してるって伝えるとは思えないし」

「よく分かりますね、随分驚かれていました。二人ともやっぱり凄く綺麗で、私なんてそれこそ地味な部類ですから異世界…それでもなんだか凄く優しい人たちでした」

思い出してうつとりしているレイダの横で複雑そうな顔でエレノアは口を尖らせる。

「レイダちゃんだって十分可愛いわよ。中身も外見も」

「お世辞でも嬉しいです。ありがとうございます」

自分のことは自分が一番分かっている。レイダはからりと笑う。

「それにしても、ちゃんとアドバイスは実行してよね、せっかく考えたんだから」

話を逸らしたつもりだったが、エレノアは忘れてなかったようだ。

「毎日抱きしめてもらうだけじゃなくて、口づけだって重要なんだからね」

話をする為の職務放棄をして、エレノアはポットから珈琲を作る。それを見ながら再度自分がアドバイスを実行している所を想像して耳まで赤くなる。

「…あれって凄く勇気が要りますよ。それに急にそんなことしたら嫌われちゃいます」

「そうかな、しないほうが勿体ない気がするけど」

さらりと言われて、そうなのかなと一瞬思ってしまう。自分用に差し出された珈琲をそのまま口に含む。

「苦」

「あ、それブラックだもの。ミルクとシロップいる？」
「お願いします」

エレノアが珈琲の中にたっぷりのミルクとシロップを流し入れる。くるくると渦巻いていた白と黒はある瞬間に霧散して溶け合った。レイダにとって丁度良い味に自然微笑んでしまう。

「レイダちゃんはー…リユウとずっと一緒にいたいなの？」

「え、どうしてですか」

「なんとなく、一緒にいることに遠慮してるように見えたから」

「そんな事…無いです。ずっとケノワ様のこと好きだったんです。出来る限り一緒にいたいんです」

「そこまで思ってるなら、アドバイスをさっさと実行しなさい」

「ううっ、それとこれとは違うと思います…」

言葉の最後の方は声が小さくなる。

それは通りの方を向いて椅子に座っていたエレノアが驚いた顔で立ち上がったからだ。何事かと振り返ってレイダも硬直する。

「あれなに…どうして？」

困惑した顔でエレノアが自分の店の前にあるモノを指差す。

「わからないです」

レイダは今までで見たことも無いような大きくて豪華な馬車に首を振る。その馬車から老人が現れて、こちらにやってくるのが見えてエレノアと顔を見合わせる。

「どうしょ」

レイダには大人に感じていたエレノアとて田舎から出てきた娘、馬車で乗りつけるような貴族と会ったことなどない。

それこそリュウと知り合いのレイダのほうが免疫があつたかもしれない。

「失礼いたします。こちらにレイダ・ゼイライス様はいらっしゃいますか？」

名前を呼ばれて怖々とレイダが顔を上げる。

「私です…」

「あなた様をお迎えに参りました」

「へっ？」

何を言われたか一瞬分らずレイダが間の抜けた声を出す。

「どうぞあちらへ」

「レイダちゃんを迎えにって、誰が待ってるの？ どこに連れて行く気？」

エレノアが怪しんだ顔で訊ねる。

数ヶ月前に娼館で危うく貴族に買われそうになったことを思い出したらしく若干憤慨もしているようだ。

「そう警戒なさらずに、わたくし、リュウ家執事のブルクハルトと申します。リュウ家へご招待させていただくだけです」

「しょ、招待…？」

二人は知るよしも無いが丁度ケノワが強制的に迎えに来られた時

の馬車と執事が来ていた。ケノワの時のように執事がレイダを誘導していく。

「さあこちらへ」

「あの、どどどどうしたら…。エレノアさん、私こんな格好で行って大丈夫なんでしょうか？」

自分の着ている仕事着のワンピースとエプロンを見下ろしてレイダは泣きそうな顔で訊ねる。どう鼻屑目に見てもそれは貴族と会うときの格好ではなかった。

きっと自宅にある服のどれを選んでもそうなるはずだが。

「とりあえずエプロンを取って、このカーディガン貸してあげる。助けて上げられなくてごめん」

急すぎる招待にエレノアもどうすればいいのか分からず、取り繕ってやることしかできない。

「頑張って」

「はい…」

エレノアの言葉に半ば泣きそうな声でレイダは頷いた。

「お乗りくださいませ」

言われるがままに馬車に乗り込んだレイダは、座席が家のソファよりもいい素材で座り心地がいい事に驚く。王都に出るまでに乗合馬車に乗ったが、座席は薄っぺらで長時間座るとお尻が痛くなった。それが馬車の常識だと思っていたレイダにはこれだけで異常事態だった。

どうして自分が急にリュウ家に呼ばれたのかが分からない。

そこにはケノワが居るのか、誰か別の人が待っているのか…不安になりエレノアが貸してくれたカーディガンをぎゅっと引き寄せる。どうして乗ってしまったのだろうと今更後悔している。何かを言っただけケノワに相談するべきだったのかも知れない。

しかし、どちらにしても自分はそこに向かっている事には変わりはない。

ちゃんと…伝えます

揺れていた馬車が止まり、ブルクハルトに手を借りて降ろしてもらった。

「ありがとうございます」

こけてしまわぬように地面に向けていた顔を上げたレイダは、顔を強張らせる。

「レイダ様、どうされました？」

「いえ：なんでもありません」

言葉では返しながらもレイダは動揺を隠し切れない。

何故ならば、レイダが想像していたお屋敷と随分と差があったからだ。

故郷ヤサ、ルンデの町にもリュウ家の本宅があったがそこは広さとしっかりとした造りに素朴さを含んだ建物だった。ここでもそういった物を想像したレイダは、リュウ家の屋敷として連れて来られた貴族然としている豪華な様式に驚く。

貴族間の認識では質素に近い家でもレイダには十分な衝撃だったのだ。

レイダは先を歩くブルクハルトの背中を追って屋敷に足を踏み入れる。

大きなホールを抜けて奥にある大きな扉の前でブルクハルトは立ち止まりノックする。するとすぐに返事の声が聞こえ、ブルクハルトが扉を押し開けた。

大きな暖炉と陽の光が大きく取り込める壁一面の硝子戸、壁には最近王都で人気が出始めたヤサ出身の画家の絵がかけてある。

明るい部屋の中央には一枚板からくりぬいてあるだろうテーブルと応接用のソファ。来客時に使用する部屋である事は一目瞭然のきめ細かい調度品だ。

そして、そして――・・・

「やあ、すまなかったね。急に呼び出してしまつて仕事だったのだろう」

こちらに向いてソファに座る人物はそう言つてにっこり笑つた。

淡い栗色の髪に綺麗な彫刻のような顔立ち、すつと通つた鼻に整つた形の目、唇のラインその全てが今朝一緒に朝食を取つたケノワの物と同じだった。

その違いは少し年齢が年上で優しく細められた目とその中の瞳の色がブルーグレイではなく黄色に近い緑というところだけ。

驚きに言葉を返せないレイダにゆっくりと立ち上がった彼は、扉の前に立ちすくむレイダの前までやってくる。近くで見れば見るほどにケノワと同じところが見つかる。

「初めまして、レイダさん。私はリュウ家の当主ロッド・リュウです。ケノワの一番上の兄です。そんなにケノワに似ているかな?」

苦笑してロッドは訊ねる。

「あ! ごめんなさい…」

自分が随分とロッドを凝視していたことに気付いて真っ赤になった。そうだ、ケノワ自身も確かによく似ていると言っていた。本当にここまでとは思わなかったが。

「…レイダ・ゼイライスです。初めまして」

頭を下げた後、手を取られてソファに座らされる。後ろにずっと控えていたブルクハルトにロッドが一言声をかけるとブルクハルトは部屋から出て行ってしまい二人きりになる。

どうしていいのかわからずにレイダは言葉を探す。ここで自分から話しかけるべきなのか否か。その逡巡はすぐ無駄になるのだが。

「改めて御礼を言うよ、今日は無理に呼び出してしまっただけで申し訳なかったね」

「いいえ。びっくりしましたけど、大丈夫です」

「そうか、それは良かった。・・・思ったように可愛い子だね。以前から会いたかった、ケノワに家に連れて来るように言ってもかわされてしまっただけで実現が難しかったんだ」

レイダの背後からブルクハルトが紅茶を持ってきてそれぞれに入れてくれる。それを受け取る。

「ケノワと付き合っているんだよね」

一口紅茶を啜った後にロッドが呟く。それでも静かな室内ではしつかりとレイダにも届いた。その声が先ほどの温和なものから若干鋭くなった気がして、レイダは背をピンと伸ばして答える。

「…はい」

「気難しい弟だが、ちゃんと優しく出来ているかな？」

「ええ、とても」

「あと、同棲しているそうだね」

ケノワから話しているとは思えないが、先日家に来たリアやリーガルがロッドに報告をしてもおかしくない。

顔に出てしまったのだろうかロッドは言葉を続ける。

「独自に調べさせたんだ、リーガル達の話聞く前から知っていた。これから話す事に必要だからね。聞いてくれるかな？」

「はい」

疑問形でありながらも有無を言わせない言葉にただ頷くしかできない。ロッドの顔が笑顔ながらも改まったものに変わり何だか嫌な予感がして逃げ出したくなる。

「よかった、聞いてくれるか。もしかするとケノワからもう聞いているかもしれないが、王家からリュウ家に対して婚姻の申し込みが来ている。第二王女のマラ様の相手として、ケノワが候補に上がっているんだ」

状況を理解しようとしている間にもロッドが続ける。

「その話が来てすぐにケノワを呼び出して訊ねてみた。恋人の君との将来や結婚について考えているのかと」

「え」

自分でさえも訊ねて確認したことがない、ずっと聞いてみたかった事にケノワがなんと答えたのだろうか。自分は彼の中にどのくらいいるのだろうか？ 知りたくても知り得なかったものの、その緊張

感に膝の上に置いた手を握り締める。

僅かな期待を込めてレイダはロッドを見上げる。しかし、対するロッドの顔からは全くと言って読み取る事ができない。

ロッドが殊更ゆっくりと口を開く。

「ケノワは結婚については考えていない、と言っていたよ。とても彼らしい言葉だけどね」

「そう、なんですか」

口は勝手に動いて言葉を返していた。

全身から一瞬にして熱が奪われた気がした。強く握り締めていた指先が痺れ震える。

そんな様子にもロッドは続ける。

「…ケノワには先日、王家からの要請のことを伝えた。真面目に考えるつもりはないようだけど、これは個人的なものではなくリュウ家の問題になるんだ。もしよかったらレイダさん、貴女からもこれからのことについて考えるように話してくれないかい？ これはレイダさんとケノワに関係する問題でもあるしね」

「それは、そうですね」

随分と酷い頼みごとであるにも関わらずやけに乾いた言葉が自分の口から出てくる。

遠回しになんとも思われていない自分から、王女様との結婚を勧めるように頼まれたのだ。そのためにケノワの恋人のはずのレイダは、ロッドに呼び出された。

「ちゃんと…伝えます」

ずっと、どこかで分かっていたのだ。

自分とケノワの間には違う物が多い。

それは生まれでた時からはずきりと分かる物だ、大貴族の息子として育ったケノワと日々細々と生きていく事に精一杯だったレイダ。擦れ違うことはあっても本当は一緒に過ごすことなど叶わないことのはずだった。

それでもレイダはケノワが自分を愛してくれるならばそんな物は関係ないと思っていた。一緒に居て笑ってくれるケノワは自分を必要としてくれていると思い込もうとしていた。

けれど本当は、レイダがケノワの優しさにつけ入り、家に上がりこんだだけだったのだ。

甘いシロップの中に浸かっていた自分は、何も分かっていたなかった。

王家との婚姻なんて庶民のレイダには到底理解できないことだけれど、少なくとも身分も素養も何もかもしっかりしている王女様の方が、自分よりは祝福される結婚となるのだろう。

その上、ロッドは自分がヤサから売春目的で売られてきた娘だと知っているのだ。

汚れても平気な着古したワンピースにエレノアが防寒用としてきている自分が持つものより少しだけ立派なカーディガン、震える指先は花屋の仕事で荒れてかさついている。

自分が急に恥ずかしくなる。

どうしてここに自分は来てしまったのだろうか？ 何も分かっている。ない場違いな自分。きっとこの優しい表情の下では嘲笑われている。

鼻の奥がツンとして涙がこみ上げそうになるのを感じる。それをグツと堪えて立ち上がった。

「あの、私、帰ります。ちゃんと、ケノワ様にはさっきの王女様との結婚の話を前向きに考えるように伝えますから。お邪魔しました」
「え、レイダさん？」

一気に言って頭を下げると、そのままロッドの言葉を何も聞かずに扉へ向かう。勢いよく開けると扉の外にはブルクハルトが立っていて、その横をすり抜ける。

「レイダ様、お送りします」
「いらないです！」

後ろから聞こえる声に走りながら答えると大きなホールに出る。酷い顔を見られたくなくて俯いたまま玄関の扉に向かっていく。

「きゃ」

ドンッと肩が何かにぶつかった。ホールの脇にある階段から降りてきたばかりの女性だったようだ。尻餅をついてしまったその人に手を伸ばす。

「ごめんなさい」

それだけ言ってその人を立ち上がらせる。顔は見なかったが、同じ年齢くらいのその人の手はつるつるで柔らかくて惨めな思いと悔しさが押し寄せる。

「失礼します」

耐え切れずに頭だけ下げると今度こそ帰ろうと扉へと走りよった。あと少しでもこの屋敷にいたら不覚にも泣いてしまいそうだったから。

すっかり日が落ちた裏通りをとぼとぼと歩いていたレイダは足を止める。

そこはケノワがちょうどレイダを拾った場所、ケノワのアパートメントの前だった。そこから最上階を見上げる。

あの時、自分はここに立っていた。

娼館での仕事のあの日はこれからの生活に凄く不安になって最後に一度ケノワに会いたいと強い望みを思っていた。その思いにケノワは応えてくれたのだと思っていた。

けれど今は、どうなんだろうか？

どうして？

目の前の手が止まるのを見てケノワは首を傾げる。

自分より珍しく遅く帰ってきたレイダは、いつもの様な笑顔を浮かべる事無くケノワが準備していた夕食の席に着いた。

残業で疲れているのだろうか？　そういったものとも違うように見えるが、とにかく夕食を食べる手は止まりがちである事には変わりはない。

いつものペースで食べていたケノワが食べ終わった時、レイダは無表情でスープを見つめていた。

「体調が悪いのか？」

「え」

上げられた顔が強張る。

「悪く、ないです」

「どうしたんだ？　疲れてるのか」

「違います」

レイダは頑なに首を横に振る。

「だったら、何があったんだ」

そういった途端レイダの顔が歪む。さっと俯いてしまったが、その表情に何かがある事は間違いなかった。

「レイダ」

「・・・どうして？」

擦れた小さな声が耳に届く。

何が？ と訊ねると勢いよく顔を上げたレイダが早口で答える。

「ケノワ様は王女様との結婚の話があるんですよ。どうして言ってくれなかったんですか？」

「それは、そんな話を受けるつもりなど無かったから・・・」
「そんなのっ！」

言葉の途中でレイダが立ち上がり声を上げる。

「受けるつもりが無いからって、私には教えてくれないんですか！
それって私とその程度の価値の人間だから？」

「そんな事は・・・」

「そうに決まっています！ ケノワ様がそういう風にしか見てくれな
いから、私がロッド様にケノワ様と王女様の結婚を勧めるように頼
まれるんです・・・」

「ロッドがレイダに・・・？ どうして」

思いにもよらない名前が出てきて驚いて訊ねるとレイダの声に湿
り気が混じる。

「・・・今日、お迎えが来てリュウ家のお屋敷に行ってきたんです。そ
の時・・・ロッド様は、ケノワ様が私と結婚は・・・考えてな
い、からって・・・」

嗚咽と共にレイダの瞳からは大きな涙の粒が零れ落ちる。

「っ：ケノワ様にとって、私の事なんか・・・どうでも・・・いいことなんです。だから、ロッド様に言わせるんです」

「そんなことは無い」

「だったらどうして・・・私に一番に話してくれないんですか？ 私なら騙せるって誤魔化せるって思ったんですか？」

「違う」

ケノワは立ち上がり興奮するレイダを落ち着かせようと近づくが、レイダは体を引く。

「ケノワ様は分かってない・・・私がどんなに切なかったか、悲しかったかなんて・・・凄く惨めで・・・っ」

急に身を翻すと、レイダはケノワをすり抜けて玄関に向かって走り出す。

「待て」

「嫌っ、触らないでくださいっ！」

追いかけてレイダの腕を掴もうとした所で振り払われる。レイダを掴みそこなった指の先で扉が勢いよく閉まった。

「どうしてこうなる・・・」

拒絶された手を見つめて小さく呟く。

ケノワは片手を額に当てて大きく息を吐く。

ロッドがまさか自分ではなくレイダを呼び出すとは思ってもみな

かった。散々彼に宛てた書簡は無視されていたのに関わらず彼女にいくとは。

けれどこれは全て分かりきっていたことなのかもしれない。だからこそ、ケノワに対して近しい者たちが警告をし続けていた。リールもキフィも同じように見通す事が出来るからこそ早く彼女に伝えるようにと。

レイダの出て行った玄関で考え込んだケノワは、ハッと顔を上げる。

「まずい」

そのままケノワは扉を開けて外へでる。

どうして自分はこうも鈍感なのだろうか？　こんな夜にレイダのような女の子が歩いているものじゃない。危険だとわかっていないわけではないのに自分はすぐに気付かないのだ。苛立ちを覚えながらアパートメントの階段を駆け下りた。

当然レイダの姿は見当たらず、どこへ行ってしまったのかなどわからない。

「…エレノアのところか？」

レイダの知り合いなど限られているはずだ。

一番親しいのはやはりエレノアだろう。

まだ人通りの多い大通りを抜けてエレノアの店へ向かう。その間にレイダと同じような赤毛探したが見当たらなかった。

エレノアの花屋の前で立ち止まり店の中をのぞくがそこは真っ暗で誰もいないと気配で分かるだけだった。ケノワが知っているのはエレノアの店であって住居ではないのだ。今この時間には既に住ま

いに帰ってしまったているのだろう。二階にも部屋があるようだが、そこにも人が居る様子は無い。

「どこに…」

レイダからエレノアの家がどこにあるのかなど聞いた事が無い。

レイダの泣き顔が浮かんで止まっていた足を動かし始める。もし、エレノアのところにもレイダが行っていなかった場合、どんな危険があるか分からない。

王都の町を走る。

数ヶ月前レイダの為に小雨の中走った事を思い出させる。

あの時自分は、レイダが家にいる事の大切さを実感したのだ。レイダに居て欲しいそう思ったからこそ彼女を迎えに行った、そうだったはずだ。

それなのに自分はレイダが求めるただ起きている事実を話すと言う事さえ上手くできない。

性格で片付ける事は簡単かもしれないが、習慣に近い悪癖なのかもしれない。昔から自分のことに対してあまり興味を持ってこなかった。それは面倒なことから逃げる為に事実から顔を背けた結果だ。だからこそ今、レイダにあんな顔をさせてしまうのだろう。

数時間考えられる場所を確認して回ったが、どこにもレイダは見当たらない。

町は既に明かりは落ち、街灯の明かりを頼りに歩く。

時刻は深夜を回り人通りも皆無に等しい。

もしかしたら、レイダは灯台下暗しで部屋に居るのではないか？

思いつき、一度自宅へ戻ってみようと考えた。

しかし足に向けた直後に、レイダがこのままずっと自分のところ

に戻ってこないという、相反したことを想像し絶句する。

レイダに置いていかれる事への胸が締め付けられるような苦しさに、それが切なさだと気付く。あのいつも自分を信じきった顔で微笑む顔も、遠慮がちに手を繋ぐぬくもりも全てが無くなってしまふのだと、それがどんなに苦しいものでもどかしいものか今更、分かる。

「切ない、か…」

ケノワは苦い顔で呟く。

レイダも先ほど泣きながらそう言った。

きつとこんな感情さえも彼女しか自分には与えないだろう。誰かを愛おしいと思った、居なくなる事に寂しさや切なさを覚える事などこれまで無かった。

どこまでも愚かだと自嘲するしかない。

シャボン玉

シャボン玉　――膨らませすぎてもかまいすぎても弾け飛ぶ

「レイダちゃん、これ使って」

ずっと嗚咽しか漏らさないレイダにエレノアは、複雑な顔でハンカチを差し出した。

受け取ってくれるが上手く言葉が出ない様子で頷く。

エレノアは後ろで心配そうに二人を見ていたライフを振り返る。

ちょうど二人は今日、急に店に現れたリュウ家の迎えについて話していた。

レイダに何かなければいいと心配していた所にレイダが涙でぐしょぐしょになった顔で駆け込んできたのだ。

「落ち着くまでこの家に泊まっていいからね……？」

コクンと頷いたレイダの頭を撫で、ソファに座らせた彼女を置いて二人は寝室に入る。

「どうなってるんだ？」

「分からない。あんな状態で詳しく聞きだすなんて可哀想でしょ。でもレイダちゃんがリュウ家でいじめられたのは事実のようね」

「リュウは何をやったんだ」

「もし、ここにあの人が来ても追い返してよ、ライフ」

「…それって余計に事態が悪化しないか？」

「じゃあレイダちゃんを彼氏だからって引き渡すっていうの!？」

エレノアの怒った顔にライフは首を振る。

さすがに男としてあんな状態に恋人を追い込む奴にほいほい可愛い妹分を渡すつもりは無い。

「やっぱり貴族とか身分違いって難しいのかな…リュウなら軍人だし大丈夫かと思ったけど、止めればよかったのかな」

エレノアはレイダのいるリビングの方を見ながら呟く。

王都にいる数少ない友人にエレノアは少なからずの応援をし続けていたのだ。それが、今の結果ならば彼女の性格からして後悔しない方がおかしいのかもしれない。

「そんなこと無いエレノア。レイダちゃんは自分で選んでリュウと居たんだ。今だって好きだからこそあんなに傷ついているんだから。また元気になるようにいつもの様に付き添ってやるのが一番だ」

「そうだよ…そうする。ありがとう、ライフ」

そっとライフがエレノアの目元にキスを落とすと少し明るさを取り戻したエレノアが寝室の扉を開けレイダの元へ戻っていく。

ひとしきり泣いて落ち着いたレイダは、ずっと隣りに居てくれたエレノアにこれまでであった事をぼつりぼつりと語った。

「ケノワ様が私の事どう思っているのか、分かりません」

真っ赤にはれた目元を冷やしながら呟いた。

隣りに居たレイダはこのとき気付かなかったが、正面に座って話

を聞いていたライフはエレノアの顔が話が進むごとに怒りに満ちるのが分かっていた。

「じゃあ、その辺境伯さまは、レイダちゃんに王女との結婚勧めるように言ったわけね？　・・・最低・・・」

本音をポロリと漏らし、エレノアは一瞬自身の言葉に慌てたがレイダも頷いた。

「最低なんです・・・その程度だって・・・ことだと思っています」

「・・・そんな」

「それなのにっ・・・こんなに辛いのに、私はケノワ様がやっぱり好きなんです」

エレノアが驚いている間にレイダがくしゃりと表情を崩して無理に笑う。

「私馬鹿だから、ずっと好きだったから簡単に忘れられないみたいで・・・けれど、もうわからなきゃいけない事もあるんですよ」

「レイダちゃんっ」

エレノアも半泣きになってレイダを抱きしめる。

「なんて言っているのか分からないけど、私はレイダちゃんを選ぶこと一番応援するからね！」

力いっぱい言葉と抱擁にレイダはまた泣きそうになりながら頷いた。

「ありがとうございます」

なんとも言えない気分でアパートメントまで戻ってくるとその前に人影があるのを見つける。

街灯の所為でシルエットしか捉えられないが、男性のようだった。スタスタとその人はケノワの所まで歩いてくる。この時間帯に歩くような輩に一瞬身構えるがすぐに警戒を解いた。

「帰ってきたか」

その声が聞き覚えのあるモノだったからだ。

「ローガン殿：どうしてここに？」

思わず訊ねてしまう。

「それ本気で言ってるのか」

若干、呆れの混ざる声音に彼が言いたい事がなんとなく分かり首を振る。その様子にライフも肩をすくめた。街灯が照らし出した年上らしい落ち着きのある顔で告げる。

「まあ、外に出てたって事は自覚があるようだな。・・・レイダちゃん、うちに来てる」

「そうですか・・・」

やはりエレノアの元に向かっていた事に安心する。少なくとも夜の街を彷徨うことはしていなかったのだ。

「お前の所へは帰さないつもりだ」

鋭くライフが言い切りケノワが彼の顔を見る。冗談でもなく事実を述べているのだと分かる。

ケノワはしばらく無言で彼を見た後、言葉を返す。

「・・・ええ。レイダが無事ならばしばらくお任せします」

自身が言い出した事にも関わらず怪訝そうにライフはケノワを見る。

「大体何があったかは知ってるが、お前はレイダちゃんと真剣に付き合っていたんじゃないかったのか？」

「・・・」

「お前の出かた次第で本当に会わせることはしないからな」

「わかっています」

力強くケノワは答える。

レイダに対する気持ちも、自身のこれからについてもライフの言葉で完全に決まった。

苦々しい顔でライフが踵を返す。

「店にも当分は来ないでくれ、うちのエレノアがお前に何かしかねない」

「わかりました」

そのまま家へと帰っていくライフを見送り、ケノワは自室へと続く階段をゆっくりと上がり始めた。

後数時間もすれば夜が明ける。

そうすれば闇夜に隠れていた真実が白日の下に晒されるだろう。

朝のあいさつ

勢いよく扉は開いた。

「おはー」

陽気な、なんとも言えない朝の挨拶にその場は凍りついた。

「おはようございます」

パースが手にしていた珈琲のカップを動揺に揺らしながら机に置いて答えた。他のメンバーといえど硬直して動けないようだ。

「朝からなんだよ、辛気臭い顔して」

「…そんなことはないです、今日はクレイ殿自らどうされたんですか？」

とても重要でこの分室の全員が確認したい事に勇気を出しました、という風情でシャルルが尋ねた。がっしりした体つきのわりに弱腰だ。

キフィは鼻を鳴らす。

「ふん、どうって決まってるだろ。仕事だよ、しーごーと！ この素晴らしい能力により今朝視てしまったわけだよ、俺様は。今日、俺の正補佐官は急用で休む。この知らせは一鐘の後には届き、パース辺りが俺の所にやってくるというありきたりなものを」

もうこの彼が言っているので間違いは無いはずだが、嬉しくもな

んともないサキヨミの報告に、泣きそうになるメンバーと血が引き過ぎて真っ白なパースは呻き声を堪えた。

「それは、大変なことですね」

「そう大変だ。よってお前を一日補佐官にする為に迎えに来た。この俺様がわざわざだぞ！」

多大にはた迷惑なご足労によりパースは一日が暗黒と化す事を決定づけられた。

尊大で傲慢に言い放つとキフィはその端整な顔に至福の笑みを浮かべて踵を返した。

「お前ら、速攻で俺の部屋に来いよー？ 一瞬で、光速で。何だかんだでケノワって仕事量多いし、俺そんな事はしたくないし」

すたすたと廊下に出て行ったキフィの後姿に既に揃っていた全員が引き攣った顔で立ち上がる。

「：つまり、全員あの部屋へ舞い戻れという指示ですよね？」

確認の為にシャルルがパースへ訊ねる。出来れば全否定して欲しい。

「お前、逃げるつもりか？ 我らが特別上級能力士官様は“お前ら”と言われたんだぞ、つまりお前もに決まってる！ 全員準備して出向するぞ！」

どこにもやりようが無い怒りを発散するようにパースは投げつけるように命令を出す。

「副長―、準備の中には胃薬要ります？」

どこか淡々とした声でトーコがビンを手をしている。

「当たり前だ！」

「「ですよね」「」

花屋の朝は早い。

昨夜泣いていたレイダも仕事の顔で忙しく動き回っていた。

店で育てている植物の世話は開店してからでいいのだが、切花に
関しては早朝に市場へ出かけて仕入れを行なうのだ。

仕入先から手に入れた花を水を張ったバケツに移し変え終えた時
だった。ちょうど町が動き始めて仕事へ向かう人々が通りを多く歩
く中、店の前に馬車が止まる。

「――レイダちゃん」

先に気がついたエレノアがレイダを呼ぶ。

先日この店に現れた形と同じものだった為、エレノアの顔は険し
い。

顔を上げたレイダの顔は強張ってエプロンの端をぎゅっと握り締
めた。

「：今度は絶対行かせないからね。私が守ってあげる」

エレノアが安心させるようにレイダに笑みを向ける。そのままエ

レノアは店先に出て行く。

「おはようございます」

馬車から降り立ったのはやはりリュウ家執事のブルクハルトで、エレノアの眉が吊りあがる。

「レイダちゃんは渡さないわよ」

ブルクハルトは冷静な執事の顔で首を振る。

「先日は、レイダ様へ大変ご不快な思いをさせてしまい申し訳ありませんでした」

「本当に不愉快な上、最低なこととして下さったみたいね」

「申し訳ありません」

エレノアの毒を含んだ言葉にブルクハルトは頭を下げ、店の奥に居たレイダへ目を向ける。

「レイダ様」

びくりと肩を揺らしレイダは俯く。

「本日は、再度お話をさせていただく為に参りました」
「え」

驚いてブルクハルトを見たレイダの顔には、怯えが混じる。これ以上リュウ家に関わる事で自分に何が起こるのか分からない恐怖に首を振る。

「だから、言ってるでしょう！ レイダちゃんを貴方達のところへ連れてなんか行かせないわよ！ どれだけ苛めれば気が済むの？」

エレノアが怒りのまま告げる。

「リュウに何かをさせたいのなら、レイダちゃんにさせる前に直接あいつに言えばいいじゃないの！ 無神経ね！」

「ですから……」

「待って下さい」

ブルクハルトの告げようとした言葉を遮り、凜とした声が入る。

店の入り口に居たブルクハルトの背後から聞こえた声にエレノアとレイダは顔を向けた。

そこに居た人物にレイダはただ声を失った。

※※※

「…朝か」

眩しい光にまどろみの中から一気に覚醒したケノワは首を振った。なかなか寝付けずにやっと数時間の睡眠を取れたところだった。カーテンを開けるとそこには快晴な空と高い所に太陽が出ていた。

玄関からドアをノックする音が聞こえてベッドから立ち上がる。
もしかすると自分が起きたのはこのノックの音の所為かもしれない
と考えながら玄関の扉を開ける。

そこには意外な人物が立っていてケノワは困惑を示す。

「おはようございます。隊長」

「…おはよう」

玄関先に立っていたのは部下であるシャルルで、ラフな部屋着姿
のケノワに少し驚いているようだった。

「何故、ここにいる」

「あ、はい。今日は休んで良いというクレイ殿の伝言を知らせに来
ました」

「キフィの？」

「ええ」

休む、といっても寝過ごしている為、もし仕事に向かっても遅刻
には変わりない。そして、本当に今日は休みをもらいに行こうと思
っていたのだ。

「…サキヨミか」

「そう言われていました」

「分かった。そうさせてもらう。だが今日の分の仕事は、確か長官
の研究と軍事サキヨミだったはずだが…」

「大丈夫です。クレイ殿自ら副長を呼びにいらして、全員で補佐の
仕事をしておりますので」

意外に気の回るキフィの厚意に感心しながら頷く。

「わざわざ、すまなかったな」

「いいえ、あの部屋に残っているよりは幸せですから。では、失礼します」

シャルルが本心からそう告げて帰っていく。

シャルル含め自分の部下達が思っている以上にキフィへの対応に慣れてきていることに驚く。やはりキフィ・クレイの補佐隊へ入ることは彼らのスキルを上げるのだろう。

他の上級士官補佐の仕事をしたことはないが、もしかすると今より凄くスムーズに仕事が出来のかもしれない。

もし、それでも、自分はきっとキフィといることを選んでしまうような気がするのだが。

「現実逃避だな」

リビングへ戻りながらケノワは呟く。

レイダと作る朝食からすると手抜きで腹を満たすだけにつまみ外出の準備をする。

何よりも語る瞳

適当に羽織った上着で早足に歩く。

人通りの多い軍前の大通りを抜けて、いつもとは逆方向の貴族の住まう高級住宅街へ足を踏み入れる。

先日は柄にも無く馬車などに乗りリュウ家の邸宅を訪れた自分が馬鹿らしい。

自分の考えを伝える為に一番会いたい人物がいる。どう行動しているか詳しくは知らないが、今日行けば確実に会えるような予感があった。

目的地のリュウ家に着くと敷地に足を踏み入れ、対した確認もせずに玄関の扉を押し開ける。わざわざノックをすることもしない。

いつもはどちらかと言うと落ち着いた雰囲気の家敷だが、今日は少し騒がしい気がする。来客があるのかもしれない。

ホールを歩いていると、途中で廊下を歩いてきた男と目が合う。

「いらっしやっていたんですか」

「ああ」

無愛想にケノワが答えると、ブルクハルトは穏やかに微笑んだ。

「あの人は、いるか？」

「ええ、こちらです」

彼が示したのはいつも彼が好む部屋ではなく、応接室だった。

「…誰か来ているのか」

「確認されてはいかがです？」

ブルクハルトは、眉を寄せるケノワに平然と答える。

「わかった」

ブルクハルトがこういった言い方をするときは大抵自分が入って
いっても問題ない人物ばかりだ。

扉を開けると、二人の人物が向かい合って談笑している所だった。
そのあまりにも穏やか過ぎる様子にケノワは顔には出さずに苛立ち
を覚える。

「やあ、ケノワ」

気付いたロッドが明るく声をかけてくる。

その言葉に背を向けていたもう一人も体をケノワに向ける。やは
り笑顔を浮かべている。

この数日間、ずっとケノワが悩んできたものが全て無駄だったの
ではないかと思うくらいに能天気な顔だ。

「いつ、こちらに？」

「いつって…今朝だけど」

「そうですか」

首を傾げながらの答えにケノワは“笑顔”で頷く。とても満足げ
な声音で告げる。

「それは…それはとても良かったです、お父上」

目の前でサッと父の顔色が消え去ったのを見ながら、ロッドは状

況を瞬時に判断した父に感心した。全てあとの祭りだったが。

「ケ、ケノワ？」

スタスタと父・アルツの前に歩み寄ったケノワは、にっこりと微笑みながら優しく告げる。

「ちょうどお会いしたいと思っていました。先日、私の職場にある方がいらっしゃいました。王女マラ様です。もちろん、お心当たりございますよね？」

アルツはこくこくと頷く。

「それは、話が早いです。先日から私に再三の書簡が届いております。全てロッド兄上からなのですが、その内容と言うのが…私に婚姻を王女とするように促すものばかり」

「そうなのか…」

何とか言葉を返し、「ロッド」と助けを求めて長男の名を呼んだが彼は達観した笑みで首を振っただけで援助は断ち切られた。

「何でも、父上が王家からの書状を私への確認もせずに返信をされたとか？」

「…ああ、とても良い話だったのでな」

「良い話、ですか。そうですね、リュウ家にとっては王家との婚姻はここ数十年行なわれていないので、とても良い話になるでしょうね」

ケノワがそつとアルツの腰掛けていたソファの背もたれの上に手を置き言葉を繰り返す。

「父上と兄上の考えには共感できるものがあります。政界の地盤がしっかりすると言うのでしょね」

「そうだろう。王家はいい奴ばかりだし、婚姻も間違いないだろう」

同意しながら、何故彼が怒っているのかが分からない。

普段短い返事があれば奇蹟だったほどの息子から、十数年ぶりに膨大に増えた言葉数をかけられ喜ぶどころか戦慄する。豊かすぎる表情と肩の辺りに置かれた手にも恐怖を覚える。

十数年前、彼がこうやって微笑みで怒りを出した時も確か自分が原因だったのではないか？ あの時はどうやって収めたのだろうか、と焦るばかりで考えるが出てこない。

このままでは何かいけない事が起こるかもしれない。

ケノワの怒りの矛先が自分だけに向けられている事もただけな気がする。

「しかし、そんなことのために私の大切な人に、別れるように告げるのが良い話なら、王女と婚姻などせずに彼女という事を選びリユウ家とは縁を切ります」

「ああ…そうか………ん？」

考えてばかりで上の空で答えた直後、アルツはケノワの言葉の意味を理解して口をポカンと開ける。

何よりも語る瞳（後書き）

父登場です。

兄妹

「…大切な人、それはお前の恋人ということか？」

アルツは慎重に訊ねる。

「ええ、そうですが」

「そうか、恋人か！ 可愛い子か！？」

微笑んだ父親にケノワは一層笑みを広げる。

怒りが一層増した事を示すそれに気付かずにアルツは立ち上がりケノワの手を掴む。

「良かったなあー！ お前はいつも無口で愛想無しだから恋人なんて見つけることは難しいかと思っていたが、大切な人が出来たか！ 嬉しいぞ！」

「あの、父上…？」

力強く握手されて笑みばかり浮かべていたケノワが、はじめて迷惑った顔でアルツを見る。

「くくく」

ロッドの笑い声にケノワは兄に顔を向ける。

「最良の決断だな」

「兄上」

鋭く呼ばれてロッドが顔を上げた時にケノワは再び微笑んでいた。

「どういふことですか？」

咳払いをするとロッドは兄らしく威厳を持って答える。

「この縁談は、リュウ家に来た」

「分かっています」

「王家には成人されて結婚されていない第二王子のオーウェン様が居るのは知っているか？」

「ええ」

試すように訊ねられて頷く。先日、ケノワも会ったばかりだ。

「だったら単純明快だな」

ロッドがにつこりと笑い人差し指を立て――…

「お兄様あ――！」

勢いよく開いた背後の扉から、元気な声が響く。

豊かに腰まで垂らされた金糸の髪、勝気さを表すくると動く青色の瞳は部屋の中を見渡した。

「あっ、ケノワお兄様までいらっしゃるのね！　なんてタイミングがいいのかしら！　私ちようどお話したい事があったの」
「…ノーマ」

結論を彼女の声に掻き消されケノワの怒りも半減する。
無表情に近い顔で妹の名を呼んだ。

「なんだノーマから話をするのかい？　じゃあ任せようかな」
「ええ」

言いかけた言葉をあっさりと投げだしてロッドは妹に譲り渡す。

「兄上」

「いいんだ、ノーマから聞いた方が分かりやすいさ」

ありがとう、と勝手に二人で話を進めケノワに向き直ったノーマは口を開く。

「教えて欲しいことがあるのです。ロッドお兄様から聞いたのですが、ケノワお兄様には恋人がいらっしゃるんですよね？」

「ああ」

「それは、王家と結婚するという利益のために捨てられるような愛ですか？」

「…王家と結婚させられるくらいなら、リュウ家と縁を切ると話していたところだ」

「では、彼女の事がとても大切？」

「何者にも変えられない。共にいて歩むことが不可欠な人だ」

淡々とノーマに答えを返すケノワに、ウキウキと会話を聞いているアルツとロッドは顔を見合わせる。

それは今までのケノワからすると意外にも真面目で真っ直ぐ素直な答えであった。まさに純情な。

「…そう、それは良かった。私も同じ思いを持っていたの」

ふふっとノーマは微笑み扉の外、ホールへと顔を向ける。

「二人ともこちらに来てくれない？」

声を掛けられて現れたのは、ケノワの知っている人物だった。

先ほどロッドが話していたオーウェン王子、先日より少しラフな格好をした彼はケノワを認めると困ったように頭を下げた。

しかし、ケノワにとってはそんな“些細”な事はどうでも良かった。オーウェンの背後に隠れるようにしていた小さな影がケノワが追い求めていたものだったのだから。

「：レイダ」

泣きそうな顔で自分を見つめる彼女に近づく前に声上がる。

「そう、レイダちゃんよ。

レイダちゃん、ケノワお兄様は貴方の事がとっても大切なんですって」

昨日よりも憔悴した様子のレイダは、首を横に振る。

「じれったいわ！ レイダちゃんいい？ ケノワお兄様みたいなタイプを十年以上思い続けられる人って早々居ないと思うわ、それも恋人にまでなれるなんて奇蹟に近いことなのよ」

「十年ってなんだい？」

アルツが後ろから声を上げる。

「幼い頃からの友人として言わせてもらうわ。レイダちゃんはこんなに小さい頃からお兄様の事が好きなのよ」

父の言葉に律儀に答えるノーマは、胸の辺りに手のひらを置いて

大きさを示す。

「おおっ愛が深いな」

「…そんなレイダちゃんを傷付けてまで、お兄様が王女と結婚する必要全くありませんわ！ 年功序列は無視して私が結婚します」

妙に元気に胸を張るノーマは真面目そのもの。

「…でも…ノーマちゃんそれは…」

突然の宣言にレイダが、か細い声で反論する。

「これはしょうがなくではないのよ、レイダちゃん。縁談はリュウ家のケノワお兄様と私に来ていたんですもの」

「えっ?!」

「…なんですかそれは、聞いていませんが？」

驚く二人をよそに他の四人は当然とばかりの顔だ。

「そのままなのです。父は私がノーマ嬢を妻に迎えたいと思っています。ことを知り、ついでにケノワ様にも縁談を提案するような人なのです」

オーウェンは申し訳なさそうに告げる。

「私とオーウェンは王都の上級学校にいますときからずっと交際してきましたものの、結婚をしても問題ないはずよ。ロッドお兄様、お父様お許しくださいますよね？」

反対される事など露と考えていないノーマの言葉に、アルツは首を傾げる。

それまでの冗談を言うようなゆるんだ顔ではなく、じつとオーウェンを見つめる。辺境伯という重役についていた重厚な威厳を持つアルツの思考は長かった。

あまりにも真剣な雰囲気への変化にその場に居た全員が息を呑んで見守る。

「：オーウェン王子は、ノーマのことを愛してるのかい？」

「もちろんです」

「そうか、可愛いノーマを傷付ける事がないようにするんだ」

「はい」

「それと、ノーマ。王家というのは家のように何でも大らかに過ごす家柄ではない。お前には格式と歴史を持つ王家に耐えられるのかい？」

「覚悟の上です」

「私が、全力で守ると約束します」

ノーマとオーウェンが緊張感を持ちながらも頷くのを見てアルツは微笑む。

「それならば、私は反対しない。家長であるロッドお前はどうかだい？」

「私は、最初から賛成です。我が家は基本的に政略結婚よりも恋愛結婚ですし」

あっさりとOKをだしたロッドにノーマとオーウェンが安心したように笑顔をだす。

そこに固い声が響く。

「…だったら、どうして私だけ王女との縁談が進められたのですか」

ケノワの納得いかない様子の言葉にロッドは答える。

「ケノワを焚きつけようかとおもって」

「焚きつける？」

ロッドが何を言いたいのかが分からず、ケノワは苛立つのを感じる。

「そのままだよ。リーガルやリアだってケノワは可愛い彼女を大事にしてるって教えてくれるのに、私に会わせてくれないし結婚もわからないなんて言う。縁談の話でもすればはつきりするかなあと思っ
ってね」

「そんなことでレイダを傷付けてまで…」

視界の端でレイダがびくりとするのを捕らえながら溜め息を吐く。
ロッドのそんな思い付きのためにレイダを泣かせていい理由など無い。

「それは、悪かったと思っている。話の順序を間違ってしまったんだよ、本当は彼女にも協力してもらおうと思って事情説明したんだけど誤解を招くような話をしてしまった。

申し訳なかった、レイダさん」

「…いえ」

擦れた声でレイダは答えたきり相変わらず顔色の悪い様子で部屋の入り口に立っている。不安げに揺れる瞳にケノワは立っていた父の側を離れ、レイダに歩み寄る。一歩後ずさるレイダを感じながら

家族を見やる。

「今日はもうここで失礼します」

「えっ！ そんなのひどいわ。私、レイダちゃんとお話をしたいわ」
「そうだ。折角ここで会えたのに」

ノーマとアルツ抗議を冷めた目で見やる。

更に何かを言おうとしていた二人は思わず口をつぐんだ。

「話は終わりました」

ケノワはぼっさりと切り捨てると抵抗しようとしたレイダの腕を
掴んでそのまま応接室を出て行った。

ついでとばかりに彼によって乱暴に閉められた扉がバタンと大きな音を立てた。

告白

早足に歩くケノワの背中を追うようにレイダは足を動かした。

掴まれた腕には力が込められるばかりでいっこうに緩めてもらえない。

昨夜、当分彼とは会えないだろうと思っていたのにたったの半日で再会するとは……。どういう顔をしているべきなのか分からずについていくしかない。

貴族たちの高級住宅街を抜けた広場でケノワの歩みが止まった。

その時になって初めてケノワはレイダの腕を握り締めていた事に気付いた様子で手を離す。

「すまない、顔色が悪いな。そこに座るんだ」

すぐ近くにあったベンチに座り、解放された手にほっとしながら首を振る。じっとケノワから見つめられ、その真剣な目が怖くなりレイダは俯いた。

その耳に言葉が落ちてくる。

「早いうちに、一番大切な事を話さなくて悪かった……話すのは全てがちゃんと治まってからだと勝手に決めていた私がいけなかった……」

途切れた言葉にレイダが顔を上げる。そっと頬に添えられたケノワの指先は冷たい。目元をひと撫でされる、昨晚ひとしきり泣いた目は赤い。

手を思わず振り払い、戸惑いに目線を逸らした。

「あの、私、仕事に戻ります」

混乱する心はケノワの言葉を聞くことを拒否していた。

彼の言葉全てを信じていいものかが分からない。そしてどうしてよいのか分からない状況から一刻も早く逃げ出したかった。

「駄目だ。話が終わってない」

いつも優しいケノワからは考えられない言葉にレイダは息を呑む。それでも譲れない思いに震える声で呟く。

「ケノワ様は…わかってない…」

「何が？」

「全部です。私が凄く貧しい家に生まれて育った事も、ケノワ様が立派過ぎるほどの貴族の人である事も、それが周りからどう思われるかも」

「そんな物は、一対一向き合った時に何になるんだ。関係ない」

「…私も、それでも良いと思ったんです。」

けれど、違いました。ケノワ様の言う一対一になった時さえ、分かり合えなかったでしょう？」

一緒に暮らし、なんでもない日々の出来事を共有し、何かあれば一緒に乗り越えられると、何もかもさらけ出そうしていた自分が怖くなった。レイダは唇を噛み締める。

「すまなかった。私はどこまでも人の心というものを解れないようだ。自分の心さえ――…レイダを傷つけてばかりだな」

いつもの自分ならケノワにこんな風に謝られたらすぐに許してし

まうだろう。しかし、好きだからこそ不安になる。

レイダは空を見上げる、暗鬱な自分の心と裏腹に驚くほど青い空が広がる。人通りも少なくちょうど木陰のベンチにふたり並んで座るなんて、普段なら嬉しくなってしまう。

「さっき：ノーマちゃんは王子様と結婚することになりましたね…」
「ああ」

「綺麗な女の人になったノーマちゃんと王子様なら誰でも祝福してくれそうですよね？」

「そうだろうな。人騒がせなものだ」

溜め息を漏らすケノワにレイダは表情を表に出さずに続ける。

「私とケノワ様はそうはいかないでしょうね……幼馴染が結婚する事が決まったにも関わらず私はあの時、絶望してしまいました」
「レイダ」

汗ばむほどの陽気にもかかわらずレイダの顔色は先ほどの屋敷に居た時と同じように青ざめていく。

「あんな風に真っ直ぐな強い思いなんて…私には…」

ほんの少し前までは馬鹿みたいに一心に何の疑いも無く信じていた。

けれど、それがなんと愚かな物に思えるのだろうか。
綺麗な笑みの下には数多の悪意が隠れている可能性を知ってしまった。共有できているという思い込みで自分が蚊帳の外にいたことを知ってしまった。

膝の上で握り締めていた手をそっと握られる。そちらに目を向けると静かな顔で自分を見るケノワと目が合う。

「ケノワ様は私が好きですか？」

口をついて出た言葉に自分でも驚いた。そして、いつも言葉が少ないケノワから直接聞いていない事に思い当たる。

ケノワのブルージェイの目が少し細められた。

「…好きだ」

それは一切そらされる事無く彼から告げられる。

「レイダが必要だ。一緒に居る為なら、リュウ家と縁を切ったって構わない。レイダが居るからこうやって一つの事に懸命になる」

「嘘…」

ケノワの口からこうやって聞くことが無いだろうと思っていた告白。

レイダは目を見開く。

「嘘ではない。レイダを思う切なさや、何も顧みず手に入れたいと思う愛おしさも全部本当だ」

「ほん…とう…」

レイダは衝撃に擦れた声で呟いた。動揺でケノワの手を思わず力いっぱい握り締めてしまうほど。

幼い頃から本当にノーマが言うようにケノワに片思いをしてきた。焦がれる思いはずっとレイダの中であって、こうして大きくなってケノワと同棲する事が出来ただけで幸せだった。それでも、全てを話して欲しいと思いながらもどこかで虚しくなるような日がある

のだろうと思っていた。好きという想いはレイダからの一方的なもので続くのだと。

しかし、ケノワは自分を必要で愛おしいと言った。

レイダが想うようにケノワも想ってくれる、その事実にも何とも言えない感情がこみ上げて来る。体の奥からやってくる温かいものに胸が苦しくなる。

「…本当…ですか、信じてもいいんですか…？」

「ああ。本当だから、泣くな」

ケノワが困ったように指先で頬を濡らす涙をぬぐわれて泣いていることに気付く。

「っ…泣いてません」

「嘘をつくな」

そっと撫でるのは先ほどと同じ指先にも関わらず心地よく、視界はさらにぼやける。

小さく溜め息が聞こえ、思わず強張った体が次の瞬間引き寄せられる。

「思う存分泣いていい」

ケノワの背中に回された手が優しく、すっぱり腕の中に収まったレイダはケノワの上着を握り締めて頷く。感情が制御できないままケノワの胸に顔をうずめてレイダは涙をこぼす。

「私…ケノワ様のこと誰にも負けないくらい好きなんです…」

呟くと耳元で小さく笑う声が聞こえた。

「知っている」

その声は凄く穏やかでレイダにこれまで以上に安心感を与えるものだった。

嫉妬

「戻りました…」

目と鼻の頭を真っ赤にしてレイダが店先に姿を現したとき、エレノアは半分泣きそうな顔で座っていた椅子から立ち上がった。

しかし、直後にレイダの後ろから現れた男に手にしていたものを投げつけた。

カキンッと鋏が床に落ちる金属音が響く。その後もそこら辺にあるモノ全てをぶつける為に投げる。

たった半歩、身を引くだけで軽々と交わした男は無表情にエレノアを見る。

「危ない」

「危なくしてやったんだから、そうに決まってるでしょ！ 何しにきたのよ！」

エレノアはつかつかと二人の下へ駆け寄る。

途中でレイダが「エレノアさん…」と途惑った顔で声をかけてくる。

それでも歩みは止めずに腕を高く振り上げた。

——バチン！

短い沈黙の後、力いっぱい打ちつけた手のひらが痺れるのを感じてエレノアは腕を振る。

ぎゅっと目を瞑っていたレイダが強張った顔で自分を見上げるのを横目に、ケノワを睨む。

一般人のそれも女性の平手打ちなど彼なら先ほどの鉄と同じようによける事など簡単だろう、しかしケノワはあえてそうしなかった。

「…これくらい、レイダちゃんを傷つけたことに比べたら軽いものでしょ。全然足りないくらい!」

そう言ってやるとケノワはレイダを見やる。

「そうだな」

昨日のレイダの憔悴した様子を思い出すとふつふつと怒りがこみ上げて来るが、その当の本人がおどおどとした様子で二人を交互に見ている。

「…あの」

レイダが困った顔で自分を見上げてくるのに少し落ち着いて声を落착ける。

「レイダちゃん、仲直りしたんでしょう」

「え」

何か一所懸命言葉を探していたレイダは目を大きく見開く。素直にこころごと表情を変えるレイダに微笑みかける。

「朝と顔が全く違うもの、それでも私は何かしてやらないと気が済まないのよ。昨日あんな事をされたのによく頑張ってきたわね、レイダちゃん」

「エレノアさん…」

レイダが表情を崩すとエレノアに抱きついてくる。

普段ならレイダからこんな事は決してされないが、それだけずっと緊張に晒されていたからだろう。抱きしめ返しながら自分より一回り小さなレイダ越しにケノワを見る。

今朝、馬車で再び出て行く時のレイダの顔が、再び大泣きした形跡はあったもののスッキリしたものになった事には内心驚いていた。店先に現れた二人の雰囲気があからさまに以前と違った事にも嫉妬を感じる。

ケノワがレイダにそっと寄りそうに様に立っていたことももちろんだが、レイダの様子も一転している。何か今までの頑なさがなくなり穏やかな空気がレイダに現れていたのだ。

「貴方はいつまでここに居るつもり？ 仕事に行ったら？」

嫌味にぎゅっとレイダを抱きしめながらエレノアは告げる。

一瞬、二人を眺めていたケノワの眉根が寄せられる。

実に効果的な攻撃であったようだ。こいつからこの表情を引き出すなんて。

「今日は休みだ」

少し慚然としてケノワが反論の言葉を漏らす。

「ふうん、あなたの愛するレイダちゃんを返して欲しい？ 私とライフのレイダちゃんへの愛だってすんごく深いんだから。今度またレイダちゃんを傷つけたら私、あなたに復讐しに行くわよ。そりゃもう雨嵐も必死ね。そんな私よりも貴方の方がふさわしいと思う？ それだけ愛してるって言えるの？」

「エ、エレノアさんっ」

耳まで真っ赤になってレイダが腕の中でもがく。それを押さえつけて彼の返答を待つ。

「そうだな、返してもらおう」

そういうなりケノワはエレノアの腕越しにレイダの両肩を掴むと、
どういうわけかするりとレイダを引き寄せた。

そこまで強くは既に掴んでいなかったが、思った以上にあっさり奪われてエレノアは啞然とする。当然何が起きたか分からない様子でレイダもキョトンとしている。

レイダを背後から支えるようにして立っているケノワは、分かりにくい但至少余裕のある顔で口を開く。

「ついでに今日はレイダを連れて帰る」

くるりと踵を返すとレイダの手を掴んで店を出て行こうとする。

「え、ケノワ様!？」

驚いて半分歩きかけていた足をレイダは止める。エレノアは小さく溜め息をつくとレイダに手を振る。

「いいよ。今日はレイダちゃん、休みね。ゆっくり話し合いなさい。ただし、また苛められたらすぐに私のところに来なさい」

「ありがとうございます」

嬉しそうに頭を下げるとレイダはそのままケノワに引かれて出ていた。残されたエレノアは小さく呟く。

「今晚はライフにたっぷり愚痴を聞いてもらわなくっちゃ…大事な
レイダちゃんあげちゃった」

蝶と優しい時間

ちょうど賑わいを見せ始めた大通りを抜けて、ケノワとレイダはアパートメントへ戻ってきた。

昨晚、何もかもに絶望してここを飛び出したのに、すぐに戻ってくるとは思わなかった。

それも、心は絶望する前よりも数段軽くなっている。短い間に自分の中がここまで変化するとは、その不思議さにレイダはくすりと笑みを漏らす。ちょうど玄関に入ったところで、ケノワがレイダを振り返る。

「どうした？」

「いいえ、幸せだなんて」

ケノワに見上げて微笑むと体を引き寄せられる。

エレノアに抱きしめてもらった時も嬉しかったが、ケノワのそれは優しくレイダを包みほっとさせる。

こめかみに口づけを落とされ、顔を上げると唇が深く重なる。今までで一番甘く感じたそれはレイダの中で絡み溶け合い、じわじわと熱と幸福感がこみ上げて来る。ずっとこのままでもいいと思わせるほどに。

きゅるるるーっ

その小さな音に二人は唇を離す。

「あ、あのっ」

レイダのただでさえ赤みがかった頬は真っ赤になり、恥ずかしさにケノワから目をそらした。せっかくのムードが自己主張の強すぎるお腹のせいでぶち壊しだ。なんでこんな時に…とレイダは自己嫌悪に陥る。

「くくっ」

珍しく笑いを漏らすと、ケノワはレイダの頭を撫でて優しく告げる。

「そういえば朝から何も食べてなかったな、何かありあわせで作ろう」

ケノワはあっさりとレイダから離れてキッチンへと足を向ける。

「あの、待って下さい」

自分から遠くなるぬくもりに思わずケノワの上着を掴む。そこではじめて思い当たった。

「なんだ？」

「…あの…今みたいになんか抱きしめてくれますか…？」

何だか自分が凄く恥ずかしい事を言ってる気がしてレイダは口ごもる。エレノアが言っていた意味がやっと分かった気がしたのだ。こうやって抱きしめてもらって口づけしてもらおう本当の意味。

一瞬驚いた顔をしたケノワは、少し微笑んでレイダにまた向き直り軽く触れるだけの口づけを落とす。

「言われなくても」

軽いそれだけでレイダの顔には笑みがいっぱいになった。本当に胸が喜びでいっぱいなのだ。

ケノワは本当にありあわせで窓際に植えていたハーブとハムでおいしそうなパスタをテーブルに出した。

レイダだと一時間かかるところが彼の手にかかれば15分ほどで完成するそれに感心せざるえない。

「いただきます」

香ばしい匂いにレイダは嬉しそうにパスタを口に運ぶ。口の中に広がるハムの旨味とハーブの出す香りの豊かさにレイダは夢中で食べた。

自分のためにこうして作ってくれるケノワは世界一だと思う。食べ終わった所で、ちらりと彼の方へ目を向けると思いがけずケノワは自分を見ていた。

「：どうか、されました？」

フォークを皿において訊ねる。特にケノワは険しい顔をしているわけではなく、いつもより穏やかな雰囲気を漂わせている。

ケノワの長い指先が伸びてきて口元を拭われる。子供みたいに何か口元についていたのかと赤くなる。

「別に、答えたくなかったら構わないんだが：」

ケノワの話はどうも今の口元のものとは違うと察して目線で促す。

「…十年前に私は、レイダに会っているのか？」

先ほどノーマが言った言葉をケノワが覚えていた事に驚いてレイダは目を見開く。いつか訊ねられるような気がしていたが、今がその時なのだと認識する。

レイダにとってこれは否定されてしまったら全てが崩れ去ってしまふような気がしてずっと告げられなかったものだ。

レイダが思わず胸元を握り締めて息をつめたのを見止めてケノワが目細める。

「人の顔をよく覚えれない私が悪いのだが、こういう風に気になった事を直に訊ねるのもこれからは必要かとおもって」

何も本当の事を教えてもらえないと泣いたレイダへのケノワの思いをつげると、レイダは暫く躊躇った後で握り締めていた手を緩める。首の後ろへと手をまわすと細いチェーンのネックレスを引き出し外した。

恐る恐るとレイダは外したチェーンごとケノワに差し出した。その指先はどんなに意識しても小さく震えるといった感じだ。

「覚えてますか…？」

レイダの言葉にケノワは真剣な顔でレイダからネックレスを受け

取るとその先についていた小さな石を見つめる。

石だと認識して見ていたが、触った感じでは貝殻に彫刻が施されておりそれは蝶の形をしていた。

親指の先ほどしかないその小さなペンダントトップに首を傾げたケノワに、レイダの顔が落胆するのが視界の端に映る。

そのとき唐突に頭の片隅に隠れていた記憶が転がりでる。

この白い飾りは確か本当に十年ほど前、幼年学校のバザーで無理矢理押し付けられた飾りではないか？　では、これを自分はどうしただろうか？　妹達にでも渡すつもりで休みに実家に持ち帰って――

「あの時……」

レイダが少し顔を上げた。

その顔に今にも泣きそうな顔で蝶を捕まえようとしたと告げていた幼い顔とが重なる。自分は蝶を捕りそこなったレイダに蝶の形をしたこれを渡したのだ。

「あの……蝶が好きなレイダか」

初めて王都でレイダと会った時にどこかで見た事があると思ったのは、なんと十年以上前に会ったからだとは思いつかなかった。

驚く自分にレイダは半分泣きそうな顔で頷いた。

「嬉しいです。覚えてくれていましたね、それは私のケノワ様からもらった一番最初の宝物なんです」

その手に蝶を返すと大切そうに手に包み込む。

「……あの日からケノワ様のことずっと好きだったんです」

照れくさそうにレイダは告白する。その顔を愛おしいと思いながらも訊ねる。

「少ししか会った事は無かったと思うが…」

「はい。それでも、私は懂れてたんです……ちよつと怖いですよねえ」

レイダはくすりと笑って首にネックレスを戻した。いつもよりも素直に饒舌なレイダは続ける。

「ケノワ様と王都で会ってから、ただの懂れの好きじゃなくなっただんです。ケノワ様と一緒に暮らしてもっともっと好きになって、私を好きになって欲しいって思っていました…」

「それは…叶ったか？」

レイダはキョトンとして自分を見つめた後、頷く。

「はい。でも、もっともっとケノワ様を知りたいです。少しずつ教えてもらえますか？」

「そうだな、私も教えてもらおう」

意外にも自分はレイダの事は知らない。少しずつお互いの事をこれ以上に知っていくのは良いことかもしれない。

そつと二人微笑み合う。

「まずは、レイダがどうしてもあの屋敷に居たかだな…」

この日は夜遅くまでレイダに質問攻めされたケノワが根を上げるまで会話が続いた。

数週間後、ケノワの妹ノーマとmamⅡレム王国第二王子のオーウエンの婚約が発表された。

号外の新聞を読んでいたエレノアが顔を上げて、レイダを見る。

「レイダちゃん、あなたたちこそ先に結婚すべきじゃないの？」

少し首を傾げたレイダは微笑む。あの日以来レイダは少し女 of 目をするようになった。

大人の関係ではないようだけれど…それが悲しいような、嬉しいような…。

「いいえ、まだ結婚は早いと思います」

「そんな事言ってるあいっつまでもしてくれないよ？」

あの鈍感男だ、絶対タイミングを逃すと厄介になる。

「大丈夫です。したくなったら私からお願いしますから」

たくましく告げたレイダにエレノアは彼女が強くなった事に気付く。以前のように不安に揺れていない。

「だったら、安心ね」

「はい！」

にっこりと笑ったレイダは、手にしていたアネモネの入った鉢を

店の外に出しに行く。

その姿はキラキラと光っていた。まるで朝日に照らされ咲き誇る
野花のように。

蝶と優しい時間（後書き）

ここまでお読みいただきありがとうございました。

3章は終わりです。

これから少し、レイダの過去のお話を更新予定なのでお読みいただけたら嬉しいです。

：ちなみにそれ以降のお話のストックがないため、更新速度はカタツムリ並みに遅くなると思います。

超迷惑（SS）（前書き）

ちよつとした後日談です。

超迷惑（SS）

「なあ、超迷惑なんだけどー」

キフィの不貞腐れた声にケノワは書類から顔を上げた。主語がない彼の言葉にケノワは冷めた目を向ける。

「何ですか」

「おまえさあ、自分がレイダちゃんと一件落着でラブラブだからってこれを放置するなよな」

手元にあった書簡の束をケノワに投げつける。

ばさりと沢山の封筒がケノワの資料の上に広がる。封筒から漏れる甘い花の香りにケノワは眉を寄せる。花屋で働くレイダから香る匂いとは根本的に違う、調合された高貴なそれは自分には合わない。

「…これは、あなたに届いている書簡でしょう」

全て束ねるとケノワはキフィの机に腕を伸ばして返す。

「げ、お前って鬼？ 悪魔？ これはどう考えてもお前の所為で俺様が被害にあってるだろ！」

恐ろしいものを見る目でケノワと書簡の束を見比べるキフィは、本気で嫌がっているようだ。

「嫌ならば、マラ様へお返事を書かれたらどうですか？」
「ぐっ」

王家との婚姻については妹ノーマで親同士の約束は果たされた。そして父アルツのレイダ擁護の一声でケノワとマラの話は完全に流れた。その直後から、ケノワではなくキフィにマラからの熱烈な恋文が届くようになったのだ。一日も欠かさず届くそれはある意味感心に値する。

「素直に想っている方が居るとでも書いておけば、いいのでは？」
「アゲハはそんなじゃないって言ってるだろ！」

キフィが即座に否定の声を上げる。

「別にアゲハさんのことだとは言っていないませんが」

頭を抱えるとキフィが叫ぶ。

「がーっ！ ケノワのくせにっ！ 誰だよ、コイツが優秀な補佐官とか言ったのー！ 超ムカツク！ 今後、絶対お前のご助けねえぞ。そして、お前を末代まで崇めてやる」

ケノワはいつもの事と溜め息を吐くと、そのまま顔を書類に戻す。今日中に仕上げなくてはいけない案件がまだ残っているのだ。

横で唸っているキフィにケノワは下を向いたまま告げる。

「そのことについては既に私から書簡を書いて王女へ提出をしました」

ピタリと口を噤んだキフィが自分を見ているのが分かる。

「それを先に言えよ」

「聞かれていますので」

勝手に自分がした事だ。キフィにはちゃんと想い人がいると書き付けておいた。

「で、いつ出したんだ？　いつになったらこのラブレター攻めは終わる？」

「一週間前です」

キフィが固まっている。

目線だけ机に戻された書簡に移されている。彼が言いたいことは分かる。

手元に届く手紙は最新のもので今日の午前中に届いたものだ。

「つまり：これはお前の書簡を読んだ上での行為って事か」

「そのようですね、あとは私の力は及ばない事なのでご自身でお願いします」

「…」

ぐったりとキフィが机に倒れる。

少々可哀想な気がするが、本当にケノワが人の恋路に入れる物でもない。

キフィはよく人に関わるが、自身の事はケノワから見ても苦手であるのが分かる。これは上手く彼自身が立ち回るしかないのだ。

厄介なあいっ（SS）（前書き）

お久しぶりです。

ちよっと前に書いたSSをUPします。

キフィの親友シンが軍から失踪した直後くらいのお話です。

厄介なあいつ(SS)

「キファイ・クレイ！ シンはどこよ！？ どこにやったのよおー！！」

急に怒鳴り込んできて自分の襟元をガタガタ揺らされながらキファイは考えてた。

あいつってやっぱり厄介かも。

キファイ・クレイの部屋に気安く入れる人間は滅多に居ない。

しかし、彼女は違った。

ジョセフィヌ、キファイと同じ特別上級士官である彼女はただの同僚ではなく15歳まで同じグループとして生活していた。便宜上は、仲間だ。

「ぐるしい」

首をガクガク揺らされてキファイは声を絞り出した。

助けを求めたのに、遠目からケノワは無視するようにお茶を入れているだけだ。怨んでやる。

「だったら教えなさいよー！」

目尻に涙を浮かべて彼女はキファイを乱暴に手放した。

「知らない」

「よりによってアタシが遠隔地へ行ってる間にどうしていなくなるのよ?!」

睨まれてキフィは慚然と言い返した。

「知らない。何で俺に言うわけ？」

「アンタが私からシンを奪ったからでしょ?! シンがどう踏み違えたのかあんたなんかというから!」

びっと指を指されて威張っていわれたことに目を細める。

「選んだのはシンだ」

「くっ」

ジョセフィーヌはぷいっと顔を背けた。

シンとジョセフィーヌは物心ついたときから一緒のグループに振り分けられていたらしく幼馴染だった。大きくなってその中に入ってきたのがキフィ。

あっと言う間にシンはキフィと親しくなってしまった。

それが、シンに恋心を持っていたジョセフィーヌには許せなかったらしい。

シンの事で事あるごとにぶつかっていた(ジョセフィーヌの一方的な八つ当たり)がとうとう彼女が居ない間にシンが脱走したのだ。

実際彼女が居ない間に逃げるように指示したのはキフィだった。

彼女にシンも愛情を抱いていたから。

でも彼女が向けるものとは違う、家族に向けるもの? そういうもの

を感じていた。

悪いけど、どうせ叶わない恋だったのだ。

「お前、俺の事嫌いなくせによく来るよな」

ぽろっと本音を漏らしてしまった。

ジョセフィーヌはキツとキフィを睨みつけた直後、手元にあった書類のファイルを取ると振りかざした。

あ、やべっ。

そう思ったときには側頭部へそれはぶつかり、頭は反動で押しやられていた。

「馬鹿っ!! 本当に、大っ嫌いよ!!」

入ってきたときと同じように乱暴にドアを閉めてジョセフィーヌは出て行った。

頭を押さえつつ横まで近づいてきたケノワを睨む。

「何で助けないんだよ!」

ケノワはいつも通り無表情に口を開いた。

「一応、あの方も上司ですので」

さらりと言われた言葉にキフィは唸った。

シンを心の中で怨んだ。

キフィの周りがいつも騒がしかったのはシンが居たからだ。

彼が居なくなれば少しは静かになるかと思ったが、今度は違う意味で自分に騒々しさがやってきた。

この俺様を殴る奴さえいる。

彼が居ない寂しさなんて感じてられない。

あいつは、やっぱり厄介だっ！

厄介なあいっ (SS) (後書き)

キファイが殴られるの図でした (笑)

お願い（前書き）

レイダの幼いころのお話です。

お願い

「おーねーがーいっ！　ねえ、お願いだから連れて行って！」
「レイダやめなさい。おじいちゃんの仕事で行くんだから」

祖父の腕にまわりついて叫んでいたレイダをたしなめる様に母は言った。

腕には一歳になったばかりの妹が抱かれている。

「でも、私どうしてもいきたいんだもん！」

頬を膨らませるレイダに祖父は頭を撫でながら問う。

「どうしてそんなにについていきたいんだ？」

「だって…今日は領主さまのお家でしょ。とても綺麗なんでしょ？」

聞かれたことで目をキラキラさせながらレイダは答えた。

王都からすると南部、ヤサ地方の山が近いルンデの町。

街中の栄えた場所から少し離れた所に、私は住んでいた。

大きな町ではないけれど地域を治めている領主、リュウ家の人々は町の人に愛されており住みよいところだった。

リュウ家の建物は古くても立派で町の子供なら誰でも入ってみたいと思う。

呆れた顔で母はレイダを見下ろしている。

「家は確かに立派だが、中にはいる事なんてしないぞ」

祖父は愛想はないがレイダには甘かった。
頭を撫でられる。

「家自体じゃないの、お庭。おじいちゃんが手入れしているお庭が見たいの。お手伝いもするから、お願い。連れて行って欲しいの」

祖父はリュウ家の庭師をしている。町で一番の腕を持つ庭師だ。
レイダは自宅の庭も綺麗に手入れをする祖父が大好きだった。彼のおかげで色々な種類の植物を知った。

その祖父が腕によりをかけているのがやはりリュウ家だ。彼が語る今の庭の植物の状況を聞くとどうしても自分の目で確かめたいくなるのだ。

今の時期の花々はさぞ美しく咲き誇っているだろう。

「分かった。ただし、勝手な事はしないようにするんだぞ」

「お父さん、まだ九歳の子供なんて連れて行ってはだめよ」

「大丈夫だ。花の管理だったら物心つく頃から教え込んで。基本的なことならできるさ。だろ、レイダ？」

にっこり笑ってくれた祖父にレイダは大きく頷く。

「ちゃんとする。勝手な事しないし、言葉使いに気をつける。ありがとおじいちゃん」

初めて町の中心にあるリュウ家の建物に入る。

レイダは祖父に手を引かれて扉に囲まれた門を通る。

当たり前のように私兵が立っていてドギマギする。けれど、いかつい顔でレイダをみとめた兵は頬を緩めてレイダにポケットに入っていた飴玉を渡してくれた。

いつもこの門の前を通る時は彼らに怯えるのだけど、そんなに怖い人でないと認識のしなおしをした。

祖父が進んでいくのは裏の通路、もちろん祖父が綺麗に整える木々がむかえてくれる。その先には大きな壁が現れる。

貴族であるリュウ家の人々が住まう建物、目の当たりにしてレイダは口をあけたまましばらく見上げてしまった。

レイダの住む家は家族五人がぎゅっと一緒に詰め込まれたようにして暮らしているけど、そんなの比べ物にならない今見ている建物は多分レイダが通う学校より大きい。

レイダの頭に祖父の手が置かれる。

「どうだ、すごいだろう」

「うん：こんなに大きい家だと100人くらい住めそう」

「そうだなあ：」

レイダの素直な感想に祖父は面白そうに笑った。

「この国の王様はもっと大きい家に住んでるらしいぞ」

「え！？ これより？ ご家族何人くらい要るの！？」

「そうだなあ、家族だけじゃなくていろんな人がいるのかもしれないな」

「へえ：」

そうか、王様には家族以外の人もついているんだ。子供心に妙に納得した。この家にも家族の人以外が住んでいてもおかしくないの

かもしれない。

祖父はそんなレイダの手を更に引いて歩く。

少し歩くと大きな庭に出た。多分、レイダの学校の運動場くらいあるはず。その端のほうに小さな小屋があった。本当に小さいものだけど、ちゃんと扉や窓がついている。

そこへ祖父は近づいていくと扉の鍵を取り出してあけた。

「ここは？」

「ここは、私の休憩室だ。ほとんど仕事に使う倉庫だがね」

そういいながら入った小屋の中には手前に小さなテーブルと椅子が二脚あり、あとすぐ近くに木箱が二つ壁に寄せてある。テーブルの奥には祖父の言ったとおり箒や剪定に使う道具などが所狭しと並んでいた。

祖父は母が作ってくれた二人分の弁当を置くと奥にあったバケツなどを手に取る。

「レイダ、仕事にいくぞ」

祖父の言葉にレイダはにっこり笑う。

「はいっ！」

名前は

庭を横断するように歩く。

小屋から対角線上に歩いていくと建物の横を通る。しばらく建物がいくつも分かれている中を通っていく。建物の構造なのかそここに中庭があるようだ。

でもそこはちらりと見るくらいで祖父はそこには入っていく事はないようだ。それでも中庭は綺麗につる薔薇がアーチを作っていたり、春の花々が美しさを競っていた。

前のほうから風が強めに吹く。

それは春の暖かさを含むものでレイダは日よけの帽子を押さえながらも微笑む。だってその中に花々の香りを感じたから。

急に視界が開ける。

「わあっ」

目の前に広がったのは一面の鮮やかな赤。

決して同じ色はないと思われるほど濃淡の違う赤い花びら。細い茎に柔らかなような薄いその一枚一枚の花びらが風に揺れる。

それは、豪華な花ではないけれど一瞬でレイダはこの花に魅了された。

「カザハナ」

「え？」

隣りで囁かれた言葉にレイダは顔を向ける。祖父が優しい顔で言葉が続ける。

「この花は、風花といって種を風に乗せて飛ばす事ができる。自身の子孫をそうやって残していく凄い花なんだよ」

「風に…お花の名前は？」

小さな花びらを見つめながらレイダは祖父に聞いた。

「アネモネ」

——アネモネ。

レイダは心の中で呟いた。名前でさえも自分を魅了する。

あまり広くない小さな庭だったが、祖父が丁寧に植えたアネモネは一面に咲き誇る。

庭を一本の通路が通りその先に二人掛けのベンチがあった。小さな屋根がついているがその上も白い小さな花々が植えつけてあるようだった。

「おじいちゃん。私ね、アネモネが大好きだわ」

「そうか、良かった。おじいちゃんもとても好きな花だ」

祖父を手伝いアネモネの花に水を与える。

そうするとキラキラと花びらの上で水滴が光り小さな庭が明るく染まる。

祖父の後についてリュウ家に来る事は結局一度ではなかった。レイダは祖父に頼み込みアネモネの栽培方法や手入れの方法を教えてもらうことになったのだ。母は渋い顔をしていたが、祖父がちゃんと手伝いをさせる事で許可を貰った。

その日も学校が昼で終り、走って家に帰ると荷物を置きレイダは家を飛び出した。

後ろで母の声が聞こえたが、そのまま一気にお屋敷まで走っていく。

「こんにちは」

きちんと門のところで挨拶をすると、顔なじみになった門番が手を上げて通してくれる。

頭を下げてレイダは祖父の居るはずの作業小屋へ歩いた。

天気の良い日だ。

買ってもらったばかりの帽子が活躍している事が誇らしかった。

小屋の前までたどり着き、扉を叩いて返事も聞かず開けた。レイダの悪い癖だといつも母に怒られるが、どうしても抜けない癖だった。

「おじいちゃん」

扉を開けきったレイダの目の前にあったのはふわふわしたものだ。った。

そう、桃色と白と綺麗な金色。

「…」

そのいろいろが何を表すのか理解するのにかかなりの時間を要した。硬直したままそれを見つめ続けているとその物体が声を発する。

「あの？」

可愛いオンナノコの声。その声に一步下がる。自分がかんりの近

さでその人の前に立っていたことに気付いたのだ。

透き通るような白い肌に桃色の頬、金色に光る柔らかい髪がその可愛らしい顔を包み込んでいた。

「か、可愛い！」

認識した途端思わず出た声に、目の前の少女が驚いて目を見開く。同じ学校に居るどの子よりも可愛らしかった。

「レイダ、先に挨拶なさい」

少女の後ろから祖父のこえが聞こえてレイダは興奮から我に返る。その少女はにっこり笑うと、自分を小屋の中に入れてくれる。そこにはもう一人女の子がいた。先ほど扉を開けてくれた子が自分と同じくらいに、奥にいた子は少し年上に見えた。

「ごめんなさい。まさか、おじいちゃん以外の方が居るとはおもわなくて…」

「いいの、いいの。私たちが遊びに押しかけてるんだから」

奥に居た少女が快活に笑う。

「私、レイダ・ゼイライス。おじいちゃんの手伝いに来たの」

祖父に言われるように自己紹介をする。

「偉いわねえ、私たちもニックさんからお孫さんが来るって聞いてあなたのことも待ってたのよ。ね、フリーダ」

「ええ、私と年が近いからと聞いていたから」

「あ、名乗るのを忘れていたわ。私はノーマ、この妹がフリーダ」

「…」

聞いた事がある。

リュウ家の次女と三女が確かそんな名前で、そしてここはリュウ家のお屋敷。九歳の頭の中で色んな事がせめぎあいピタリと合致する。

「あ！ リュウ家のお嬢様！？」

「そうだよ、レイダ。言葉遣いに気をつけなさい」

「あ、ごめんなさい」

祖父にたしなめるように言われて二人に頭を下げる。

「いいのよ、レイダちゃん。敬語は使わないで。私たちは普通にお友達が欲しいんだもの」

ノーマがにっこりと再び笑う。

「お友達になってくれる？」

フリーダが遠慮がちに自分に尋ねる。

こんなキラキラした人たちの誘いを断る理由をレイダは持ち合わせていなかった。

「うん」

好きな場所

二人の友人を得てレイダは毎日のように祖父の働くお屋敷へ顔を出した。

レイダは花を育てる事に夢中だと姉妹は気付いていたためもっぱら三人の子供が花いじりを手伝う事が多かった。

レイダと一緒に遊ぶうちにノーマとフリーダは競うように花の知識をつけていた。自分達の花壇を作るのだとやる気を見せて祖父の力を借りて計画を立てていた。

「レイダちゃん、昨日の夜、お兄様が帰っていらしたのよ」

あまり綺麗でない小屋で嫌がる風も無く四人で昼食をしている時にフリーダが言った。

口にはしているのはリュウ家のキッチンからフリーダが籠に入れて持ってきたサンドウィッチだ。普段、家で食べた事がないベーコンがパンの間から出てきてレイダはそちらの美味さに気を取られていた。

「お兄様？」

「そう、ほら春の中休みで宿舎から帰っていらしたの。2, 3日だそうだけど家ですごされるのよ」

「お兄様またかっこよくなってたわね、ノーマ姉さま」

嬉しそうに笑うフリーダを見て、レイダはどのお兄様か分からずに首を傾げた。

リュウ家には六人の子供が居る。

目の前のフリーダが一番下で8歳、レイダの一つ下。ノーマが1歳だと聞いた。後は兄が三人に姉が一人とだけ。一番上のお兄様が既に成人している事を聞いた時に驚いた事だけ覚えている。

「お兄様はどこかにすぐ消えちゃうから、探すの大変なのねえ。いつもどこにいろのかしら？」

「本当ね。レイダちゃんにも見つけたら紹介してあげるからね」
「うん。ありがとう」

この広い家だったら確かに誰にも見つけられない場所があるのは分かる気がする。

真剣にパンを齧るレイダをよそに実に良く喋る姉妹の話は二転三転する。どこまでも会話が途切れる事がないのはきつと彼女たちの特技だろう。

彼女たちは実に巧みに他のものたちも会話に混ぜていく。祖父とレイダはいつの間にか彼女たちの会話に入っているのだ。

あんまり話してないけど…。
きつと明るいノーマたちの家族だ、賑やかな人達に違いない。

「さて、これから庭を一回りしてくるから三人はこのままあの庭の計画を続けてください。危険な事はしないようにね」

昼食後、祖父は仕事道具を抱えて告げた。

「分かっているわ、ニックさん」

ノーマが年長者として答えると、手を上げて祖父は小屋を後にし

た。

三人も続けて小屋をでる。

小屋のすぐ脇に姉妹の庭計画があるのだ。いい場所には既に花々が咲いている為、何もされていなかった小屋の脇に花壇が作られているのだ。今は何の花を植えるか姉妹が計画中だ。土は既にレイダの指揮の元、三人で耕していつでも種は蒔けるのだ。

芝生の上にシートを広げてノーマとフリーダは購入してもらった真新しい花の図鑑でこれから育てるものについて話し合いを始めた。レイダからすると、どんな花でも育て始めると同等の愛おしさを感じるので二人が育てたいそれが今の時期から植えられるかと土壌があっているかのアドバイス役だった。

楽しそうにおしゃべりをする二人を見て、自分も妹と会話をする日が待ち遠しく思う。年の差はあるけれど、たくさんのかたを話してみたいと思う。

きっと楽しいだろう。

二人の話し合いが少し長くなってきた所で、レイダは立ち上がり二人に声を掛ける。

「ノーマちゃん、フリーダちゃん、私はお花を見てきてもいいかな？」

ピタリと息のあった動作で二人はレイダを見上げる。

「うん、行つて来て」

「いつものお花のところでしょう？」

レイダが一番好きな場所は二人に既にばれてしまっている。笑いながら肯定する。

「そう。いつもの所にいるから」

手を振ってレイダは庭を渡り、建物に沿って歩く。

何度も通いなれたその庭は奥のほうにある。

途中薔薇の手入れをしていた祖父の後ろを抜ける。そうして建物と建物の間を抜けるようにして突如現れるあの風景が大好きなのだ。その小さな庭はこれ以上先進む事はできない行き止まりになっている。上の窓から視界に入れて楽しむのだろう。

そうして、いつもの様に急に飛び込んでくるその花たちの彩を楽しんでからゆっくりとその花びらを愛でる。朝一番に祖父と二人で全ての花への水遣りはしているのでこのアネモネも見ているのだが、何度見ても見飽きない。

ちょうど今朝は祖父に花びらではなく、がく片がこんな風に綺麗に色をつけているのだと教えられたばかりで観察もしたかった。

庭の中ほどまで歩いていくと蝶が止まる花を見つけてゆっくりと中腰になってそれに手を伸ばす。

きつとフリーダに見せたら喜んでくれるだろう。

この前、ノーマと二人で蝶を見たことを話したら自分も見えたかったと涙目だった。

蝶に手が届く手前、背後でバタンツと唐突に音が響く。

びくりと肩が震えて手元が狂う。

「あっ！」

手元から蝶は飛び立ち手の届かない場所へ行ってしまった。

けれど、少し怖い事実気付いてレイダは後ろを振り向けなかつ

た。

お屋敷の一番奥の小さな行き止まりの庭で、ここにいるのは自分だけだったはずだ。けれど背後から物音がするのはおかしかった。

今レイダが背を向けているのが庭の奥だからだ。

素敵なおはなし

「：ノーマ？ フリーダか？」

知らない声にレイダは身を竦ませる。

けれど、その声は少年のもだった。恐るおそる振り返ると、声の持ち主と目が合う。

彼はちょうど足元に落ちた本を手を取っていた。

どうやら奥にある二人がけのベンチに彼はずっと居たようだった。彼の様子からそこで寝ていた雰囲気があった。

「どこの子だ？」

見た目の幼さの抜けない顔立ちからは想像できない落ち着いた口調で彼はレイダに尋ねる。しかし、レイダは答えることが出来なかった。

薄い栗色の髪が太陽の光に晒され、その下でブルージェーの綺麗な瞳が自分を捕らえている。

それは、初めてフリーダの顔を見たときに感じた驚きを越えていた。端正な顔かたちとはやはり貴族の遺伝子で作られるのだと幼いながらもレイダは認識したのだ。

答えを返さないレイダに不思議そうに少年は首を傾げて腰掛けていたベンチから立ち上がる。

それと同時に強い風が吹き込む。

それは一気に花々を襲い、儂い花びらを奪い取った。しかし、レ

イダが目にしたそれは美しかった。ゆっくりと舞い散る花びらが彼を引き立てる物にしか見えなかったのだ。

ゆっくりと彼が近づいてきてレイダの肩を捕らえる。

「大丈夫か？」

発育の悪いレイダの身長は彼の肩にも届かないほどで覗き込むように訊ねられる。

「！」

レイダは近づいた顔に自分の顔が一気に熱くなるのを感じた。

何か答えなくてはいけないと思うのに、混乱して答えることができない。怪訝そうな顔の彼に半ば泣きそうになりながら口を開く。

「ちょ、蝶を捕まえようと…」

やっとの事で出てきた言葉は彼が質問していたどの内容にも当てはまらなかった。

しかし、彼は数度頷くとそのままレイダの頭を撫でる。

レイダの体は蝶を捕まえようとしていた時のままだったため、その手を引いて彼はレイダを誘導する。

自分がもともといたベンチに再び腰掛けてレイダにも隣を勧める。

「悪かったな」

「え？」

されるがまま彼の隣りに座ったレイダは何について謝られたのか分からず、キョトンとする。

「蝶を、捕まえたかったのだろう」

レイダのことを見ることをせずに真っ直ぐ前を捉えながら彼は言った。

「あ…いいんです。ただ見せてあげただけだから」

なんとか答えると、レイダの方を向いて彼はゆっくり微笑んだ。

「そうか、それならまた現れるまで待てばよい」

「あ、はい」

レイダは彼の笑顔に魅了され、それが心を満たすのを感じた。まだお互い名前も知らないのにこんなに嬉しいのは何故だろうか。

レイダの隣りで彼は手にしていた本を開いた。本自体の値が高くあまり買ってもらえないレイダは綺麗な横顔で本を読んでいる彼を知らず見つめていた。

「何？」

特に目線を寄越す事無く彼が尋ねる。自分の目線に気付かれていたのだ。

「ごめんなさい」

「別に怒ってない」

そっけない様に聞こえるが、それは本当に彼が怒っているわけではないと口調から分かった。

「何の本を読んでるんですか？」

勇気を出して訊ねてみる。ちらりとレイダを見ると彼はゆっくりと自分の前だけに出していた本の内容をレイダに広げてみせる。

「伝奇」

「物語ですか」

「そうだ」

それはレイダが普段読んでいる本の倍くらい文字数があり、その横に異国風の挿絵が入っている。レイダには難しくて内容を上手く読み取る事が出来なかった。

そんなレイダの様子に気付いたのか、彼は一つだけ短い話を聞かせてくれた。ゆっくりと彼の声変わり前なのに落ち着いた声で読み上げられた物語は、レイダの全く聞いた事がない物で夢中になって聞き入った。

それはどのくらいの時間が経っていたのかわからない。話を聞き終わった後にしばらくぼんやりしていた時だった。

「レイダちゃん？」

庭の入り口からノーマの声が聞こえた。

夢のような時間が破られてレイダは一瞬にして現実に戻された。

ノーマとフリーダがベンチに座る二人を見つけて走りよってくる。隣りの少年は二人を見ても特に驚く様子も無く無言で座っている。

「なかなか戻ってこないからどうかしたのかと思ったわ」

ノーマが安心したように笑うと、フリーダも頷く。

「本当に。でもケノワお兄様と居たのね」

隣に座る少年・ケノワは改めてレイダを見ていた。

そうか、二人が先ほど話していたお兄様とは彼のことだったのか。ケノワ様、と心に刻むようにレイダは頭の中で繰り返した。

名前を知れた事で高揚する気持ちを抑えて答えた。

「うん。物語を聞かせていただいたの」

答えを聞いた二人の表情が変わる。

「え、お兄様から？」

「お話を聞いたの！？」 私たちだって聞いた事がないのに」

「そうよ、フリーダがどんなにお願いしても聞かせてくれないのにずるいわ」

二人が頬を膨らませているのは嘘ではないようだった。当の本人は知らん顔でまた本に視線を戻そうとしていた。

「お兄様、私たちにも聞かせてください」

ノーマの言葉にケノワは、眉を顰める。

「お前たちは黙って話を聞くことが出来ないだろう」

煩く非難していた姉妹はひるんで口を噤む。ケノワは立ち上がる

と二人の頭をそれぞれ撫でると脇をすり抜けるようにして庭から出て行ってしまった。

「うーん、やっぱり一番ケノワお兄様がクールよね」

唸るようにして八歳のフリーダが幼い顔にしたり顔で呟くと、ノーマも頬に手を当てながら頷く。

「ロットお兄様やリーガルお兄様も優しくて大好きだけど、あんな風にそっけないものなかなかだわ。本当は優しいのだもの。レイダちゃんもそう思わない？」

ノーマはレイダに確認するように訊ねた。

それまでぼんやりしていたレイダは掛けられた言葉に頬を赤くする。ノーマの質問がまさにレイダが心の中で考えていた事と一致していたからだった。

その様子見たノーマとフリーダが顔を見合わせて笑った事にレイダは気付かなかった。

てのひらの蝶

レイダはあの後、祖父が迎えに来てそのまま家に帰った。

ぼんやりしながら夕食を食べていたことで母に何度食べこぼしをして怒られただろう。

けれど、レイダは幸せだった。

心の中がなんだかほかほかしている。ケノワのことを思い出すだけで笑みがこぼれてしまうのだ。布団の中で何度思い出し笑いをしただろう。彼が話してくれた物語を忘れないために夕食後にすぐに机に座り書き付けた。

あまりにも真剣に普段向かわない机に座り始めた為に、両親は娘が何か変な病気に罹っているのではないかと心配をしていた。余計なお世話だ。

次の日も祖父についてレイダはお屋敷を訪ねた。

レイダが通う学校もケノワ同様、春の中休みに入っていて日中は自由に出来るのだ。ちなみにノーマとフリーダも普段は隣町の貴族の子弟が通う学校にいくと聞いた。

小屋に荷物を置きレイダはいつもより張り切って、沢山の庭に水遣りをする。

「ね、ねえおじいちゃん。私、アネモネの所にいてもいい？」

そわそわしながら訊ねる孫に苦笑しながら頷く。

「じゃあ、レイダに今日は任せるよ」

不安そうに聞いていたレイダの顔にそれは本当に花が咲いたように笑みが広がる。

「ありがとう！」

レイダは嬉しさのあまり駆け出していた。

可愛い孫娘の後姿に少しだけオンナを見た気がしてニツクは本当の苦笑いをした。

レイダは勢いよくアネモネのある庭に入った。

昨日ケノワと会えた場所だ。いつもよりもっともっと好きになった。

嬉しくて誰もいないのに笑みを浮かべてしまう。庭の入り口にある水瓶から水を掬う。

沢山自分に向けてその花を開き始めているアネモネたちに水を与えていく。朝の早いうちはまだチューリップのように固くつばみに戻っているが時間と共にふんわりと顔を見せてくれるのだ。

夢中になって過ごしていると、不意に視界に入る人影に気付いて動きを止める。そちらにきちんと体を向ける。

「…ケノワ様」

覚えてた彼の名前を呼ぶ。

名前を呼ばれて彼は顔を上げた。いつの間にか彼は昨日いたベンチに腰掛けていた。

「おはようございます」

「おはよう」

短く答えると、彼はじっと自分を見つめる。

「レイダ？」

確かめるようにして名前が呼ばれて、レイダは背筋を伸ばす。

「はいっ」

「ああ、合ってるのか。こちらに来てくれるか？」

どうやらレイダの名前に自信が無かったようだ。頷きながらケノワは手招きする。

そちらに駆け寄ると、レイダが来た事を確認して手のひらを出すように示される。

土と水に汚れた手が恥ずかしくて一度エプロンで拭うとケノワの手が上下から添えられる。手のひらに何かが載ったのを感じる。

ゆっくりとケノワの手が離れていくとそこには綺麗な色をした蝶が載っていた。もちろんそれは本物ではなくて白い貝殻から掘り出した何かの飾りの一つのようにみえた。

「これ…」

「学校のバザーで買わされた物の中にあった。高いものではないが…蝶が好きなのだろうか？」

特別に蝶が好きだったわけでもないのに、レイダはこくと頷いた。だって、今日から大好きになるのだから。

「あげるよ」

「いいんですか？」

「昨日の蝶の代わりだ」

「ありがとうございます」

構わない、ケノワはそう言って首を振るとそのまま手にしていた本を読み始めた。

少しの間だけケノワの前で手のひらに載せられた飾りを見つめた後、自分に任された仕事を思い出して慌ててアネモネへの水遣りに戻った。

朝の水遣りの後はケノワの周りにまわり付くわけにも行かず、迎えに来たノーマたちと共に花壇造りに精を出した。

次の日も彼に会う事に期待をして水遣りにあの庭を訪ねたけれど、そこにはアネモネしか存在せず。ケノワが姿を現すことは無かった。ノーマに訊ねると、少し気を使った様子で教えてくれた。

「…ケノワお兄様なら宿舎へ帰ってしまったわ。上級学校を受ける準備をするのですって」

横に居たフリーダもすねたようにして言葉を続けた。

「上級学校って、王都の物を受けるつもりらしいの。そんな事をしたら今よりずっと会えなくなっちゃうわ…」

「今度のお休みはレイダちゃんがいてくれるから少しは長くいるのかと思ったのに」

ショックに呆然としていたが急に自分の名前が出てきて首を傾げる。

「私？」

「そうよ、レイダちゃんとあのケノワお兄様が沢山お話してたみたいだから、仲がいいお話相手になってくれるかと思ったの」

ノーマがにつこり笑う。そっとレイダの手をとって告げる。

「今回は残念だけど、またいつかケノワお兄様と会うことがあったらその時は沢山お話してちょうだいね。お兄様は本当に言葉数が少ない人だから、会話が出来る人こそ珍しいの。レイダちゃんだったらいい相手になれるからきつと」

ノーマに励まされレイダも頷く。

ポケットに握られていない方の手を入れる。そこに大切に入れた飾りは今後どんな時もきつと離さないだろうと予感する。

「うん。ケノワ様にまた会う時が来たらたくさんお話を聞いてもらうわ」

すぐにある事が出来なくても、また休みがあれば彼はこのお屋敷に姿を現すだろう。

その時に彼を捕まえてお話をまたねだってみよう。

生まれたばかりの淡い恋心が本当の恋に変わるのがいつか、それはまた別の話だ。

てのひらの蝶（後書き）

w i n d f l o w e r ・ a n e m o s ・ かざはな、すべて同じ花ア
ネモネを指します。

三章まで引き延ばしてしまいましたが、このお話がレイダとケノワ
の出会いになります。

ケノワじゃなくても普通忘れてしまうくらいの些細な出会いなのか
もしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8381s/>

Wind flower

2011年9月11日00時08分発行